

東方言葉録

ワロリツシュたん

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

とある事件から幻想入りしてしまう主人公。

幻想郷にて、言葉を武器に行方不明の親友を探すことに――

しかし、その時各地で妖怪が失踪する異変が起こっていた

言葉と林檎が幻想郷にて紡ぐ、友情の物語

一話一話をなるべく短くしようとしています

あまり時間は掛かりませんので、読んでみてください

お願いします

ラブコメは本編終了後を予定しています
続編『東方真言記』

目次

落下するプロローグ

第一話、高速自由落下 | 1

第二話、そんなことより命とられちま

うよ | 6

第三話、まーがとろさん | 12

第四話、白黒？オセロかなにか？

18 第五話、弾幕はパワーだぜ!!! 前編

24 第六話、弾幕はパワーだぜ!!! 中編

31 第七話、弾幕はパワーだぜ!!! 後編

異変調査編

39

第八話、素敵なお賽銭箱はあっちよ

45

第九話、異変が起こるってね | 57

第十話、速すぎて消えているように見

えた | 65

第十一話、あるよ。とっておきの一枚

がね。 | 71

第十二話、これは確かに異変だ

75

第十三話、剣として | 81

第十四話、強さの定義 | 88

第十五話、ジャムの秘密	161	第二十三話、入道の兄貴の拳でヒイヒイ言わされるお話	172
第十六話、門番が寝ていない時点で嫌な予感はしていたんだよ	141	第二十四話、バーサーカー聖	191
第十七話、怪我はアリスの魔法で治しました	108	第二十五話、凶ったなナズーリン	204
第十八話、人里救出ミッション	115	第二十六話、唯一の可能性	221
第十九話、第一侵蝕	126	第二十七話、夢	232
第二十話、ルールとマナーを守って楽しく弾幕ごっこしよう!!	133	第二十八話、地底への進撃	242
第二十一話、一緒に行こう	141	第二十九話、急転直下	254
精霊異変	273	第三十話、結末が待っているんだ	
第二十二話、第二侵蝕	161		

落下するプロローグ

第一話、高速自由落下

体を包み込む浮遊感、

下に見えるのはコンクリートの地面、

そう僕は今！決死の紐なしバンジーに挑んでいるところだ!!

——自分の意思じゃないけど。

物語の始まりは、空から女の子が降ってくるのかがよくあるけど、

僕は男だし、

降ってくるじゃなくて降ってるだし。

物語の始まりどころか、終わりへ真っ逆さまである。

なぜか、恐怖という感情はない、

屋上から落ちて即死確定なのに。

……親友と同じところに行けるからかな？

走馬灯は見れてないので、その代わりと言っちゃなんだけど、僕が今こうして飛んで

いる経緯でも思い出してみるかな。

僕は林檎好きのごく一般的な高校三年生。

強いて違うところをあげるとすれば、ちよつとした能力が使えるってとこカナ——名前は日下部 真言（クサカベ マコト）

そして事件は新学期の始まり、始業式の日に起きた。

なぜか始業式は校長不在で、「校長の話」ではなく「教頭の話」となっていた。

教頭は、校長に比べて生徒や教師に人気がなく、セクハラまがいの発言をすることで生徒に嫌われていた。

そのような教頭の話を書く生徒はおらず、僕も聞き流していたが、教頭は聞き捨てならない言葉を言った。

「皆も進藤のような愚かなことをしないように——」
は？

「進藤は、神聖な学び舎で自殺をした愚か者だ！」

黙れ、黙れ、黙れ、黙れ、黙れ

お前に何がわかる、お前に何がわかるんだよ!!

『黙れ』

と僕は言う

すると、教頭の口は強制的に閉じられた。

まるで、誰かに力強く押さえつけられたように

これが、僕の能力——『言葉を現実にする』程度の能力』だ。

教頭は声を出したいのに、強制的に口を閉ざされているので、「あが、あが、あがが」と滑稽な声をあげている

そして、聞こえてくるのは全校生徒の笑い声。

—————

時は流れて放課後、屋上にて。

僕は進藤が死んでからというもの、よくこの屋上に足を運ぶ。

そして、フェンスから外を見渡すのだ。

一体、進藤は自殺する時一体何を考えていたのだろうか……と考えながら

まあ、考えても答えはでないんだけどね

はあ、それにしても今日は疲れたなあ、久しぶりに能力をあんなに強く使ったから、体力的に疲労感が半端じゃない

僕は、フェンスに背を向けて体重をかける、すると—————

ガシャン

老朽化か、それとも誰かが悪戯したのか、
フェンスは音をたてて壊れた。

僕は落ちまいと足に力を入れて持ち堪える
が、誰かが僕を押しした

僕を押しした人の姿は一瞬だが、目に入った、その人は金髪の短髪で尻尾……？を
生やした女性？だった

僕はそのまま空に投げ出された—————
回想終了。

では、このまま高速自由落下にまいます（笑）

そこから先は速かった。

あつと言う間に地面が目の前ってきて

—————暗転

なぜか、痛みがなかった。

不思議に思い、目を開けてみると—————そこは、茸がたくさん生えている森の中
だった。

「……は天国？」

「・・・ちがうよ」

「そう、つてえっ!？」

誰だ!？」

後ろを振り向くとそこには黒い服の金髪の少女がいた

そして彼女は言った

「ところで、貴方は

食べ物でもない人間？」

続くわよ！読んでね！素敵なスキマのお姉さんからのお願いよ？

第二話、そんなことより命とられちまうよ

「——貴方は食べてもいい人間？」

「えっ!？」

理解が追いつかなかった。

どういうことだ？

あの金髪少女はなんていった？

人間？食べる？

現代で人肉を食べるやつなんていない——じゃあ、性的な意味でか？

「いやいやいやいや」

「？」

金髪少女がキョトンとしちやつてるよ！

急に頭を抱えていやいや言ってる僕に若干引いてるよ！

少し、心にくるものあるよ・・・

「はっ」

思考が止まってた！いけないいけない。

では、何かの比喩表現だろうか？

もしくは、僕が知らないだけで現代でも人肉を食す文化が存在するのか!?

「もうどつちでもいいや

いっただきまゝす」

そう言った刹那、金髪少女は僕に向かって飛びかかってきた！

「うわあ！」

これを紙一重で避けた————あとで思い出すとこれを避けることができたのは、奇跡だったのだと思う。

驚くべきことに、金髪少女は僕が

避けた先にある木を噛みちぎっていた

「なんで、食べさせてくれないの？木なんておいしくないよ」

その瞬間僕は理解した。

この金髪少女は本気なのだと、本気で僕を食らいにきているのだと。

「今度こそ〜いっただきまゝす！」

金髪少女はまたも飛びかかってくる！やばい！

僕はとつさに能力を使う。

力を込めて言葉を放つ！

『止まれ』

そうすると、金髪少女は飛びかかってくる姿勢のまま動きを止めていた。

「あれ？動けない、なんで？」

一息つこうとした直後

「えい」

「ふえ？」

金髪少女が動き出した

そして僕は逃げ出した

「おかしい！おかしい！普通の人間なら一分は動きを止めるはずなのに！！10秒ももたないなんて！！」

「まつのかー」

『止まれ』 えええええ！！』

さつきと同じ方法でちよくちよく金髪少女の動きを止めつつ、走る。走る。走る！！

ある程度距離が離れたら、金髪少女は飛びかかるだけの今までとは違う行動を始めた。

両手を前に出して手から————

球を放った。

「なあにそれえ!？」

球というより弾?どつちでもいい!そんなことより命(タマ)とられちまうよ!!

「うひゃん!」

大きく横に跳んで球を躲す。

バキィ!

森の木を吹き飛ばして消える球。

「死ぬかと思った……。」

そう思ったのもつかの間、金髪幼女はさらに球を連射してくる。

「うわっ!」

頭を狙って飛んでくる球をスウエーで躲し、走り出す。

「走るしかない!どこにゴールがあるのかわからないけど!!」

幸運なことに飛んでくる球の数は少なく、素人の僕にも躲すことのできるレベルだった。

「そーう当たらなければどうということはない!!」

「じゃあ、こうするのにかー」

「ふえええ?」

金髪少女はカードのような何かを取り出し言う

「夜符『ナイトバード』」

「なんだそれはあああああああ!?!」

彼女がナイトバードと言った直後、今までの球とは質も量も段違いの球の塊が僕を襲ってきた。

今までの球は小さく、数が少なかったため、僕でも体を大きく動かせば躲すことができた。

しかし、今回は……

「どうあがいても躲しきれない?!」

迫り来る球の塊、それが自分にぶつかりそうになった刹那、僕は思考を切り替えた……

僕は、力を込めて森の木々に言葉を放つ!

『曲がれ』

すると、木々は曲がって球の塊の前に即席のバリケードができた。

「これで……」

守れると思った? 残念!! 大爆発でした!!!

そう、球の塊はバリケードごと、僕を吹き飛ばした!!

「ぐっがはっ！」

吹き飛ばされる僕。

そして、頭から地面に着地する——意識を失う刹那、僕は灯りのついた家を見つ
ける。

『開け』

僕がそう言うと、家の扉は開いた——それが、僕が見れた最後の光景だった。
続くのか——

第三話、まーがとろさん

「上海ー？蓬萊ー？紅茶をお願いするわ」

「シャンハイー」

「ホラーイ」

私ー七色の人形遣いアリス・マーガトロイドはいつものように紅茶を人形達にお願いする。

しかし、今日は普段と違っていた。

なかなか人形達が紅茶を持ってこないのだ。

「ちよつとー、上海ー？蓬萊ー？」

不思議に思い、私は部屋を移動する。

「シヤ、シャンハイー」

「ホラーイホラーイ」

なぜか、上海人形と蓬萊人形は家の扉の前で外を見ていた。

「えっ？外に何かあるの？」

私も人形達と一緒に外を見てみるーそこには、いつもとは違った光景が広がって

いた。

人間が宵闇の妖怪ールーミアって名前だったかしら？に襲われていた

「なるほど、だから紅茶が遅かったのねーでも、扉は貴方達が開けたのかしら？」

人形達は私の問いに首を振って答える

私の家から、あの人間やルーミアまで距離があるし

いったい誰が開けたのかしら？

ラツキーな人間もいたものね

「はあ、見捨てるのも目覚めが悪いし

上海！蓬萊！やるわよ！」

「シャンハーハーハーハーイ!!!」

「ホラーハーハーハーハーイ!!!」

・・・なぜか、いつになく人形達がやる気満々だったのだけれど

『戦符【リトルレギオン】!!!』

—————

体が痛い・・・『痛い』？

僕は生きているのか？

あー、食べられたけど消化まで時間ってかかるよねー

「ヤメロー！シニタクナーイ！シニタクナーイ！！」

飛び起きる僕。

そんな僕を襲う痛み。

「……………いてててててて！！」

「やかましい人間ね」

「あえ？」

女性の声が聞こえる。

金髪で落ち着いた物腰の女性が紅茶を片手に話しかけてきた。

あれ？僕は食べられたんじゃないの？

あ、その女性も食べられた仲間かな？

僕と同じ胃袋ルームメイトかしら？

「言っておくけど、ここはあの妖怪の胃袋の中ではないわよ」

「じゃあ、ここは？」

目の前にいる金髪の女性に尋ねる。

「ここは、私の家よ。」

私が襲われてた貴方を助けたの。

私の名前は「シャンハイ」・マーガトロ「ホラーイ」、ちよつと!!上海!?蓬萊!？」

「はあ、まーがとろさんですか

どうも、僕は日下部 真言といいます

ピンチのところをお助けいただき、ありがとうございます」

「ちよつ、まーがとろつてなによ!？」

私は、アリス・マーガトロイド!!!

七色の人形遣いよ!

呼ぶならアリスつて呼びなさいよ!

真言!」

初対面だけど、アリスをからかうの面白いと思つてしまった大変失礼なマコトくん

す (はあと)

本人には言わないけどね

「で?どうして貴方は妖怪に食べられそうになつていたの?」

僕は今までの経緯を説明した、屋上から落ちたらここにいたこと、目を覚ましたらいきなり金髪少女に襲われたこと。

「そう、でも不自然ね」

「どうしてですか?」

「普通、外からくる人間はこの森——魔法の森にはこれないよになつてるのよ

あと、敬語やめてくれる？

普段聞き慣れてないから、なんか嫌だわ」

「わかりまし・・・うん、わかった

で、なんでこの森は人間はこれなの？」

と、僕が聞くとアリスは魔法の森は瘴気で満ちていて、人間はおろか妖怪ですら居心地の悪い場所だということを説明してくれた。

「で、貴方はこれからどうするの？」

まあ、外の世界に戻るわよね

案内するわよ、ついてきなさい」

と行ってアリスは外に出るため、扉に手をかけたーーーー僕はアリスの手をとり、彼女を止めた

「なに？どうしたの？」

「いや」

僕は息を大きく吸い、ハッキリとアリスに告げた

「いや、僕は外の世界には戻らないよ」

この言葉が僕の物語の始まりだった。

続くわよ！

シヤン
ハー
イー
ホラー
イー

第四話、白黒？オセロかなにか？

僕が外に戻ろうとしない理由、これを語るためには僕の親友である——進藤 花（シンドウ ワカ）について語らなければならぬ。

彼女と出会ったのは中学二年の時だった、特別な出会いなどではなくただ同じクラスになった、ただそれだけだった。

彼女は寡黙で、一人でいることが多かった。

そんなクラスでも地味なタイプな彼女だったけれど、僕はなぜか親近感というか、彼女に興味を持っていた。

その頃の僕は自分の能力を自覚していた、だから僕が彼女に興味を持ったのは必然だったのかもしれない

——そう彼女も僕と同じく能力持ちだったのだ

『【精霊と会話し、使役する】程度の能力』

それが、進藤 話花の持つ能力であった。

精霊というのは、万物の根源となる気である。

だから、実体はない。

しかし、彼女が水の精霊を使役すれば水が湧き出て、炎の精霊を使役すればマッチも無いのに火がついた。

便利な能力だと思っただろうか?

僕もそう初めて彼女から能力について聞かされた時、そう思った。

しかし、その能力は現代社会においては便利でもなんでもなかった。

蛇口をひねれば水は出るし、マッチをこすれば火はつく。

さらに、精霊には実体はない。

だから、彼女は両親にも同じ年の子供たちにも気味が悪いと思われていた。

なぜなら、他人から見れば一人で話しているようなものだから。

それが理由だったのか、彼女はあまり他人と関わり合いをもたないようにしていたそう
うだ。

そんなことをしているうちに、彼女はいじめの標的にされていた。

彼女が汚された制服を能力で水を出して洗っていた時、偶然僕はその現場を見て、彼女に話しかけた

「君も不思議な能力を持っているんだね?」

「つ、あ、あなたも?」

「うん」

これが僕等の初めて交わした会話だった。

それから、同じような境遇だからだろうか

——僕等はお互いを親友と呼べるようになる仲になった。

さらに、僕は彼女を守ると誓った

そして、僕等が高校生になって数ヶ月が経ったある日、事件が起こった。

彼女が能力で他人を傷つけてしまったのだ

傷つけてしまった理由をいくら聞いても彼女は僕に教えてくれなかった。

それから、僕等にすれ違いが起こってしまった。

だからだろうか

彼女は狂ってしまった。

そして、その日は訪れる。

結果を言うと、屋上から飛び降りて彼女は自殺した————と『言われ

ている』

なぜ、『言われている』という曖昧な表現をするのかというと

彼女の死体は見つかっていないのだ

屋上にあつた彼女の上履き、遺書から飛び降り自殺だと判断されたらしい。

しかし、僕はそうは思わない。

彼女も、僕と同じように幻想郷にいるのではないか?

いや、絶対にいる。

僕はそう確信している。

精霊という言葉のもう一つの隠された意味

それが僕の確信の根幹をなす。

精霊という言葉には、「妖怪、妖精、幽霊、神、鬼」を指す意味がある

そう、まさに幻想郷を形作るモノではないか

だから、僕は彼女を探す。

彼女を見つけて話をするんだ。

・・・なにを話せばいいかまだ決まってるじゃないけど。

—————

と、アリスに僕がここに残る理由を言うと彼女は納得したように言った。(最後の精霊の隠された意味については伝えてないけど)

「そう、ここに残る理由は納得したわ

けれど、貴方はここで生き残ることができると言うの?

聞いた限り、能力はあるみたいだし、普通の人間に比べると強い霊力を持つてるだけ

ど」

アリス曰く、魔法の森の瘴気に耐えられるのは強い霊力のおかげらしい
「さっきの妖怪くらい倒せるようにならないと

幻想郷では生きていけないわよ」

「でも……」

僕は引くわけにはいかなかった。

彼女を守る誓いを果たすために！

「霊力を使う才能はありそうんだけどねえ、魔法の才能はなさそうだから、正直私には
貴方を手助けすることはできなさそうよ

……せめて同じ人間である白黒や紅白なら話は違うんだろうけどね」

なんで色が関係あるんだろう？

「白黒？オセロかなにか？紅白？めでたい!？」

思ったことを口にする。

「おいおい、誰がオセロなんだぜ？」

「えっ？」

アリスの家の扉が開いて一人の少女が立っていた。

一般人が想像する典型的な魔女っ娘の姿をした少女だった。

「話は聞かせてもらってたぜ

私は霧雨 魔理沙
普通の魔法使いさ」

・・・・・・また金髪かよ

続くんだZE☆

第五話、弾幕はパワーだぜ!!!前編

先に言っておこう、心が折れそうだ

今日、魔理沙とアリスから教えてもらったこの幻想郷での常識があまりにも僕の住んでいた世界での常識とかけ離れていたからだ。

—————

アリスに僕がここに残る理由を話したこの日、まだルーミアにつけられた傷が完治していない僕はアリスと魔理沙にこの世界———幻想郷についてとここでの戦いのルール、そう『弾幕ごっこ』について教えてもらうことになった

(ちなみに、魔理沙は僕がここに残る理由を一字一句漏らさず聞いていたらしく、感動した!!と言ってくれて、物凄く協力的だった)

僕が聞いたことをまとめると次のようになる

『弾幕ごっこ』

- ・ 人間、妖怪両方が知る決闘方法
- ・ 揉め事の最も有効的な解決方法
- ・ 弾幕———能力で生成した弾をばらまいて闘う、威力もそうだが、見た目にも重点

を置くらしい

・弾幕はパワーだぜ!!!

『スペルカード』

・自分の必殺技を記したカード

・発動するときはその名前を宣言する

・弾幕ごっここの前にスペルカードの使用枚数を宣言する、宣言した枚数のスペルカードを全て使いきっても負けとなる

『幻想郷』

・二つの結界により外の世界と隔離されている理想郷

・外の世界では忘れられた妖怪や妖精などが存在している

・時々異変が起こる

・油断すると死ぬ

—————

弾幕ごっこについての説明が終わった次の日、魔理沙に弾幕を見せてもらうことになった。

「で、これが弾幕なんだぜ」

と魔理沙は言って、手のひらに光球を生み出して空に向かって放つ

「わあ」

正直、感動した

「感動したか、そうかそうか！

でも、これができなきやここでは生きていけないんだぜ？」

「そうだった」

がつくりと肩を落とす、感動してるだけではないけないのだ。

これから、僕も弾幕ごっこをするようにならないのだから。

「で、弾幕ってどうやって作ればいいの？」

まず、方法を聞いてからだ！諦めるのは！

と思い、魔理沙に尋ねてみた——すると、返ってきたのは驚きの答えだった

「こう、うおーってなつてぎゅつとして、どかーん!!!だぜ!!」

わあい、イミワカンナイ

うん、薄々気づいてた魔理沙ってき

体育会系だよね

魔法使いなのに

ガシヤーン

あ、アリス、魔理沙の返答にずっこけてやがる

「ちよ、ちよつと魔理沙あ、それじゃ誰にも伝わらないでしょ」

アリスが助け舟を出してくれる

「なんだとアリス、私の説明に文句があるのか？」

「大有りよ、なにそれぎゅつとしてどかーんつて

フランドールじゃない」

フランドールつて誰？

「仕方ないだろ！だつて方法を意識しながら弾幕ごっこなんてできないんだぜ！」

はい、今までの流れを無にする魔理沙先生の発言いただきましたー泣きそう

(; ; ω ; ;)

僕に残された手は

「うう、助けてアリスうゝゝゝ」

アリスに泣きつくことしかなかった

「そ、そうねえー参考になるかどうかわからないけれど私のやり方を説明するわ」

・・・なんだかんだいってアリスつて面倒見いいよね

「私の場合は魔力なんだけど、それを手のひらに集中させてそれを球形に留めて飛ばす。

貴方はそれを魔力じゃなくて霊力にすればできるんじゃないのかしら？」

霊力つて言うのはアリス曰く、人間の生命力のエネルギーだと言う

また、魔法使いの生命力を魔力、妖怪の生命力を妖力というらしいつまり、弾幕は自分の生命力を球形に変えて作り出すのだ

方法はわかったー！ー！ー！けど

「できない」

「んー、仕方ねーな

ほら、ちよつと手えだせ」

魔理沙に言われた通りに手をだす

そして、魔理沙は僕の手に向かって自分の手を

バツシーン!!

叩きつけた

「いつてええええええー！」

なにするんだよ！魔理沙あ！」

「ほら、自分の手を見てみるよ」

半泣きになりながら、自分の手を見る。

すると、なにか黄色いもやのようなものが見えるようになっていた。

「?なにこのもやみたいなの?」

「それは、私の霊力だぜ

私の靈力を少し、お前に分けてやったのさ」
なにか掴めたような気がする。

集中する、自分の生命力を感じる

そして、自分に向けて言葉を放つ

『集まれ』

手のひらにエネルギーが集まっていくのがわかる、あとはこれを球形に留める!!!

「で、できた!!」

「あら、すごいじゃない

．．．．正直、私はもっと時間かかると思ってたわ」

「ふん、私はこれくらい楽勝でできると思ってたぜ」

「ははは、二人ともありがとう」

素直にお礼を言っておく

「私はなにもしてないわよ

貴方の努力の結果よ」

「私の教え方は完璧だったからだぜ!」

魔理沙．．．ドヤ顔やめろ

「ところで、真言の靈力は緑色なんだな

私のは、黄色だし

霊夢のは、水色だった」

「色によつて違いがあるのかしら？」

「さあ？わからないのぜ」

「さて、真言も弾幕を作れるようになったし、

私と弾幕ごっこだぜ!!」

「わかった!」

よし、僕の初めての弾幕ごっこスタートだ!!

「・・・真言、なにか大事なことを忘れてないかしら？」

うん、アリスさん

気づいてたならもつと早く教えておいてくださいよ

あやや、続きますよ？

第六話、弾幕はパワーだぜ!!!中編

「マスタアアアアスパアアアアアアク」

どうも！おはようございます！こんにちは！こんばんは！

絶賛極太レーザー接近中の真言くんです！

・・・うん、わかってた

僕は飛べないし、スペルカード持ってないし

勝負以前の問題が発生していることぐらい。

落ち着け！冷静になれ！そう、K O O Lになるんだ、日下部真言!!

食らったら死ぬ！食らったら死ぬ！

だけど、躲すにしても空も飛べないような貧弱一般人の僕ではムリゲーだ！

ん？飛ぶ？そうだ！飛べばいいんだ！

魔理沙は地面にいる僕を狙って攻撃してきた

だから、空に飛び上がれば回避できる！

こ、これしかない!!

霊力を思いきり込めて自分に向けて言葉を放つ

「『飛べ』えええええー!!」

結果を言うと、僕は飛べた

物凄いスピードで真上に飛び上がり、マスパを躲すことができた

だが、宙にとどまり続けることができずに落ちた

そして、地面に落下し気を失った

・・・後からわかつたんだけど、スピードと飛行時間は靈力の使い方調節できるのだという

—————

私、アリス・マーガトロイドは飛んで落ちた真言について、紅茶を飲みながら魔理沙と話をしていた

「はあ、やる前に気づきなさいよ

スペルカード持ってないし、飛べもしないことくらい」

「ドジな奴なんだぜ」

「貴女もよ魔理沙、なにが先手必勝よ

いきなりマスタースパーク使われて対応できるわけないじゃない、今回躲すことができたのは奇跡に近いわよ」

「まあ、反省してるぜ

けど、真言のやつ私と同じくらいのスピードで飛び上がったな
「そうね」

そう、彼の飛行速度だけは評価できる

下手すれば私より速い

なにより、彼が飛ぶ瞬間、彼の体は緑色の光を放った

彼は肉眼で色が確認できるほど濃密な霊力を使うことができるのだ

そんなことができるのは、霊夢や魔理沙レベルだ

そして、彼が言った彼自身の能力『「言葉を現実にする」程度の能力』———将来、彼は強力な使い手になるのではないのだろうか

私の中ではもう彼を外の世界に戻そうとする考えは浮かんでこなくなつた

もう少し訓練すれば、彼は十分幻想郷でも生きていける———私はそう確信した

—————

僕がこの幻想郷で生きていくうえで、頼ることができるのは、『「言葉を現実にする」程度の能力』だけだ

だから、僕はこの能力と向き合わなければならぬ

沈む意識の中、僕は能力について考えていた

言葉を現実にする———聞こえはいいかもしれないが、皆が思っているほど万能

な能力ではない

僕の能力が通用するのは、人だけでなく、僕が正しく認識しているものであれば、あらゆるものに通用する

しかし、通用するのは僕の視界に入っているものに限る

たとえば、『曲がれ』と言えば、目の前の木を曲げることはできても、どこかわからない木が曲がることはない

そして、僕が使えるのはまだ動作の命令のみである

最後に、決定的なのは

僕自身のスペックが低いため

回数制限があり、自分より格上の相手にはたいした拘束力を持たないということだけれど、僕はこの能力を使って生きていく

人間は知恵を使って生きる生き物だからだ

—————

「はい、これ」

目を覚ますと、アリスに3枚のカードを手渡された

「これがスペルカード？」

「そうよ、これに貴方の技を記録するのよ」

「でも、やり方がわからない」

「これに関してはやり方なんてないわ、貴方と貴方の能力の問題よ」

アリス曰く、スペルカードに記録できるのは自分の能力で再現可能な技だけなので、他人のスペルカードは使用できず、他人に作ってもらったスペルカードではうまくいくことはほぼなく、うまくいったとしても弱いものになることが多いらしい

「ま、自分ができる派手なことを記録すればいいんだぜ

簡単だろ？」

・・・魔理沙はなんでも簡単そうに言うなあ

簡単だと思うのは魔理沙だけでしょうに

でも、なんでだろう魔理沙にそう言われると

できるような気がする

「よし、じゃあできたら外に出ろよ

今度はちゃんとした弾幕ごっこをやろうぜ！」

・・・うん、こいつはただ暴れただけだ

まあ、待たせるのも悪いし、即席で二枚のスペルカードを作り上げ、外にでた「死にそうになったら助けてあげるわよ」

アリスさん優しすぎ泣いた

「よっしゃ、行くぜー!」

魔理沙は箒に乗って飛び上がる

僕も飛び上がり、空中で静止する

「……一回大失敗してるから、大分コツがわかってきた失敗は成功のもとだよね☆
「じゃあ、弾幕ごっこスタートだぜ!」

というと、魔理沙はさっそく弾幕をばらまいてくる

球形と星形の混ざった弾幕。

正直、見惚れそうになってしまったが、

避けられない弾幕は自分の弾幕で消しつつ、回避していく

「ほう、初めての弾幕ごっこにしてはいい動きじゃないか!

私の想像以上だぜ」

物凄く楽しそうに魔理沙は言う

「お褒めいただきどうも」

会話しながらも僕は全力で頭を回転させる

正直、勝てる可能性があるのは魔理沙が『マスタースパーク』を出したときしかない
この、マスタースパーク対処用に作ったこのスペルカードで

「やっぱ、通常弾幕じゃ、落とせないな

なら、一発いっくぜー!」

そう言うと、魔理沙はスペルカードを懐から取り出す

来るか!? 『マスタースパーク』!?

『魔符「スターダストレヴアリエ」!!!』

違う!? 『マスタースパーク』じゃない!?

素人の僕でもわかる、圧倒的な魔力と靈力——これは避けられない——そう思った僕は一枚のスペルカードを発動させた

『虚偽「ワードオブマウス」』

その直後、『スターダストレヴアリエ』は凄まじい光を発しながら発射された——僕とは真逆の方向に向かって

—————

「あー、魔理沙つてば学習能力がないんだから

『スターダストレヴアリエ』なんて真言が躲せるはずないじゃない」

まあ、真言が死なないように助けてあげましょう

そう私が思つて、人形達に真言を守るように指示しようとした——その直後、凜とした声が響いてきた

『虚偽 [ワードオブマウス]』

真言の声だった、それを聞いた私の世界への認識が『ずれた』

ずれた、というのは正しい表現なのかはわからないが

実際の世界とは違う、全く別の世界を見せられたような

そんな感覚

そして、その感覚が終わった後残ったのは

真言とは真逆の方向に向かって放たれた『スターダストレヴァリエ』と無傷の真言だった。

あーうー続くよー

第七話、弾幕はパワーだぜ!!!後編

私——霧雨魔理沙は、ついこの間幻想郷に来たばかりの人間と弾幕ごっこをして
いた。

皆、私がただ弾幕ごっこをしたいただけのバトルジャンキーなんだと勘違いしてるかも
しれないが、

私だって、相手の力量くらい見極めてから弾幕ごっこをする

……はげだぜ、まあ誘われたら断らないけどな!

じゃあ、なんで真言と弾幕ごっこをしようかと思ったのかと言うと、飛行速度や靈力
の強さっていうのもあるけど、アイツの順応性の高さに私は興味をもったんだ。

アイツは、私やアリスが魔法使いつて言ったのに、それに疑問をもっていなかっ
た——つまり、

アイツは外の世界より幻想郷寄りの人間だったってことさ

んで、弾幕ごっこに話をもどすぜ

正直、『スターダストレヴアリエ』は真言を試すつもりで使った

当たったとしても気絶程度で済むレベルの威力にしていた

けれど、まさか

かすりもしなかったとは!!

ワクワクしてきたぜ!

久しぶりだ、こんなに楽しい弾幕ごっこは

確かに、霊夢やアリスとの弾幕ごっこも楽しいけど

真言との弾幕ごっこは別の楽しさがある

アイツは、何をするのかわからない

宝箱を開けるようなそんな楽しさが

真言は、そんな可能性をもったやつなんだ!!

さあ、お前の可能性を私に見せてみる!!!

『彗星「ブレイジングスター」!!!』

—————

『マスタースパーク』じゃないのかよ!!!

世の中思い通りにはいかないものだなあ

次こそ『マスタースパーク』が来ると思っていたのに

僕の手元にあるスペルカードはあと二枚、

その内容は、『マスタースパーク』対処用スペルカードと何も記録していない白紙のス

ペルカード。

これでは、避けることも守ることもできない

終わった、Game over (; ω ;)

対処法も決まってるのに、魔理沙は待ってくれないし、
箒に乗って星形の弾幕をばらまきながら突進してくる

僕はそれをただ見て、避けることすらできなかった

せいぜいできたのは、霊力を集めてダメージを軽減することくらい

そして、感じる鋭い痛み

そのまま僕は、地面に衝突した

ああ、負けちゃったか

まだ、スペルカードを使い切ってすらいらないのに

悔しいなあ

—————

「あちゃー、ちよつと真言が戦えるからって調子にのちまっただぜ」

『ブレイジングスター』が真言に直撃した後、後悔する私。

だって、もつとできると思っただんだぜ？

弾幕ごっこはこれで終わりだ

と思つて私が真言を回収しようと着地した——その直後、
『言霊【生きるという意味】』

真言は二枚目のスペルカードを宣言した

—————

薄れていく意識の中に僕は見た

親友である進藤話花の姿を

……ああ、これは過去の記憶か。

話花は中学の制服を着ていた。

そして、中学生の頃の姿の彼女は僕に向かって言うんだ。

「言葉にだって精霊はいるんだよ【言霊】って言うの。」

君の能力は言い換えれば、言霊を扱う能力とも言えるんだよ？

だから、感じてみて？

言霊を。」

【言霊】——その単語を思い出したとき、僕の中で何か歯車のようなものがカチリとはまる音がした!!

そして、僕にも見えた【言霊】の姿が。

【言霊】は、僕に近づくと一枚のスペルカードに変わった。

そして僕は宣言した、そのスペルカードを

『言霊【生きるという意味】』

その直後、スペルカードから言霊が出てきて、言霊は僕に言霊自身の霊力を分け与えてくれた。

すると、体はボロボロだけどエネルギーが満ち溢れてくる!!

うん、まだ体は動く。

僕は立ち上がる。

僕には勝利の可能性がまだ残っている!!!

—————

驚いたぜ、まさか『ブレイジングスター』をまともにくらって立ち上がるとはな
そして、もっと驚いたのは

真言のやつ、ボロボロなのに私に向かって

手招きして、挑発しやがった

ふうん、いいぜ!

私のフェイバリットスペルカード、『マスタースパーク』で終わりにしてやる!!

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお『恋符【マスタースパアアアク】!!!」

私のミニ八卦炉から極太レーザーが放たれる

これが私の全力だぜ!!!真言!!!

「マスタースパアアアアク!!!」

思わず笑みが漏れそうになる、

やっときたか『マスタースパーク』!

待ってんだ!

そして、僕も最後のスペルカードを発動させる

『反射【曲解される言葉の意味】!!!』

スペルカードが発動した直後、魔理沙の『マスタースパーク』はその向きを変えて魔理沙に向かって進んでいった

そこから先の記憶はない、スペルカード発動後僕は意識を手放してしまったからだ
続くわよ!あたいつたらさいきよーね!

異変調査編

第八話、素敵なお賽銭箱はあつちよ

「いやー驚いた驚いた」

「はあ、あんたも呑気なものねえ」

興奮さめやらぬ感じの私の眩きにアリスは呆れ気味に反応する

いやーだつてさ、本当にびっくりしたんだぜ？

だつて、真言以外のみんなは私のマスパを避けるか力勝負をするかのどつちかだったからな、跳ね返すなんて斬新すぎるアイデアだぜ。

まあ、結果的に私の全力マスパを完全に跳ね返すことはできず私には当たらなかったから、アイツもまだまだだつてことだな。

あのあとアイツは気絶しちまったから

弾幕ごっこは私の勝ちだったが、

自分の能力を応用して私に幻覚を見せて『スターダストレヴアリエ』を回避したり、『ブレイジングスター』が直撃しても立ち上がったアイツ————日下部 真言を、私、霧雨魔理沙は十分幻想郷でも生きていけると判したので、アリスにそれを告げる

「な？言つたろ？」

真言は面白いやつだつて」

「そうね。」

「おいおい、淡白だな

あれくらいの実力があれば、ここでも十分生きていけるだろ？」

「いいえ」

アリスは私の思つてた答えとは正反対の答えを言つた。

「なんでだよ？」

私と弾幕ごっこをしつかりやりとげるなんて、十分すぎる実力だろ？」

「貴女、気づかなかつたの？」

彼と私達との物凄く大きな違いに」

「物凄く大きな違いい？」

「なんだそれ」

「彼はさっきの弾幕ごっこで、

一度、も攻撃をしなかつたのよ」

—————

ただいま、アリスのベッドの上で寝込み中の日下部 真言です！みなさん、こんにちは

は！

「シャンハイイ」

「ホラーイ」

・・・人形達がうるさいので目を覚ますことにします。

「おはよう、上海、蓬萊」

人形達を撫でながら挨拶をすると

「シャンハイイ」「ホラーイ」

心なしか人形達の機嫌がいい気がする

そんな人形達を見て和んでいた僕に突然変化が訪れた。

ぐうぐ

僕のお腹から聞こえる腹の虫

「あははははは、お腹減ったなあ」

僕がそう言っていると、

「シャンハイイ！」

「ホラーイホラーイ」

人形達は突然部屋を出ていった。

そして、聞こえるアリスと魔理沙の声。

「あ、ちよつと上海!? 蓬萊!?

なにするのよ!？」

「ん? なんだ?

アリスに料理させようとしてんのか?

いいな、私にも何かつくってくれよ」

「なに? 真言がお腹減ったって?

ちよつと、あんた達真言に優しすぎじゃないの!？」

「はははは、人形に好かれる人間ってのもいるんだなあ!

こんな困ってるアリスは久しぶりに見たぜ」

「まったく、他人事だからって」

「ん? だって他人事だぜ?」

「シャンハニー」

「ホラーイ」

「はいはい、わかったから! 作るから!」

人形って便利だなあとかと思いました。

「さてと、じゃあこれからどうするかについてだが、博麗神社に行こうと思う」

食事を終え、不意に魔理沙が話をはじめた

「ちよつと！魔理沙！」

まだ、真言には問題があるでしょ!？」

「問題？なんのこと？」

「それはー」

アリスが僕に説明しようとしてるところを魔理沙は遮って言う。

「それなら問題ないぜ」

「なんでよ？」

「博麗神社へは私も一緒に行くし、これは時間をかけて真言自身が気づいて解決すべき

問題なんだぜ」

「そうかもしれないけど・・・」

「まあ、博麗神社に行くまでには問題ないだろ？な？」

「まあ、魔理沙がそこまで言うなら」

渋々と言った感じで、アリスから承諾を得た

「でも、とりあえず

これ持って行きなさい」

「なにこれ？」

アリスが僕に何かを手渡す——これは、腕輪？

「まあ、お守りみたいなものよ

常につけておきなさい、特に弾幕ごっここの時は絶対に外さないこと！」

言われた通り、僕は腕輪を身につける

「アリスは心配性なんだぜ

いや、これは心配だけじゃないのか？」

「な、なによ」

「いやいや、なんでもないぜ？」

「いや、あのアリスがねえ」

「なにニヤニヤしてるのよ!？」

「にゅふふふ、なんでもないんだぜ——？」

腕輪に見入ってたら、アリスが真っ赤になってて、魔理沙がニヤニヤしていたでござ
るの巻

「んじゃ、行ってくるんだぜ」

「うん、行ってくるよ、アリス」

「はいはい、行ってらっしゃい」

そう言うと、魔理沙と真言は博麗神社に向かつて飛んでいった。

静寂が私を包む

「ちよつと、寂しいかもね」

独り言を呟く

「確かに魔理沙と一緒にに行けば問題ないかもしれないけど、

なぜか安心できないのよね・・・」

私——アリス・マーガトロイドが、真言に対して問題だと思ってることは

彼の性格についてだ。

彼は優し過ぎる

優しいというのは良いことだと一般的には認められているが、ここ幻想郷ではそうで

あるとも限らない。

ここでは『力が全て、力がある者しか認めない』という思想を持っている妖怪も少なくてない。

そういう妖怪達の前で優しさなんてものは役に立たない

だから、私は真言が心配なのだ

そう、心配なだけ！心配なだけなんだから！

・・・魔理沙は勘違いしてたみたいだけど

「シャンハイ」「ホラーイ」

「ん?なに?」

さつきまで、寂しそうにしていた上海と蓬萊が私を呼ぶ。

「シャ、シャンハイ」

上海が指差す先にあつたのは、

真言が忘れていった彼のリュックサック

はあ、仕方ないわねー

「いくわよ?上海、蓬萊」

「シャンハイ!!!」「ホラーイ!!!」

そして、私も博麗神社に向かって人形達と一緒に行くことにした。

—————

「おーい、霊夢——!来たぜ——!」

そして、僕と魔理沙は博麗神社の鳥居をくぐる

博麗神社までの道中で、氷の妖精と弾幕ごっこしたりしたけど、それはまた別の話。

まあ、氷の妖精以外は概ね道中に問題はなかった。

「あら、魔理沙。

いらっしやい、素敵なお賽銭箱はあっちよ」

博麗神社には箒を持った紅白の色の巫女服を着た少女がいて、僕等をめんどくさそうに出迎えてくれた

「キノコでいいなら入れるぜ？」

「おいおい、魔理沙、キノコなんて欲しがるわけないだろ

「ありがたくいただくわ!!」

「ずこっ！」

僕はギャグ漫画みたいにくけた。

「おい、真言? どうしたんだぜ？」

「だって、キノコ・・・」

「ああ、おい霊夢

「お前今日なにも食べてないのか？」

「失礼ね! ちゃんと水と砂糖食べたわよ」

目がマジだった。

かわいそうに思った僕はお賽銭箱にそつと千円札を入れておいた

すると、巫女さんは

「ありがとうございます! ありがとうございます!」

「私こと博麗の巫女、博麗霊夢が僭越ながらご主人様のお力になります!!」

目をキラキラさせながら僕の手をとってブンブン振った

「れ、霊夢さん!? ストップ! ストップ!

ぼ、僕は日下部 真言!! 真言って呼んでよ!」

「はい! では、真言様!! 本日はどのような御用件でしょうか!? 妖怪退治ですか? お任せください!!」

私、博麗霊夢にかかればあらゆる妖怪も退治してみせます!

サーチアンドデストロイ! サーチアンドデストロイ!」

痛い! 痛い! 痛い! 霊夢さんの腕力が強すぎて腕がとれそうです!!

「ちよ、ちよつと魔理沙!? 助けて」

「お、おい霊夢、ほどほどにするんだぜ!」

「え? あの白黒の泥棒妖怪の退治ですか!」

お任せください!!」

ちよ、霊夢さん!」

なんで魔理沙に思いっきり喧嘩を売ってるんですか!」

「ほう? 誰が妖怪だって?」

屋上へ行くこうぜ……久しぶりに……キレちまったよ」

「魔理沙さん! どうして喧嘩買っちゃってるんですか!」

あと、屋上なんてありませんよ!?ここ屋外ですからね!?

『恋符【マスタースパーク】』

『霊符【夢想封印】』

僕の静止なんて二人とも聞かずに

弾幕ごっこをはじめてしまった

「はあ、なにやってんのよ、霊夢も魔理沙も」

「あ、アリス!?!」

そこには、常識人という名の天使がいた

僕は感極まって無意識にアリスに抱きついた

「わっ、ちよつと真言!?!」

どうしたのよ!?!」

「アリスうゝ僕にはあの二人の相手は無理だあゝ」

「もう、仕方ないわねー」

僕はアリスに抱きつくのをやめる・・・なんでアリスさんは残念そうな顔してるんだらう?

う　そしてアリスは息を大きく吸い込み、大声で弾幕ごっこをしている二人に向かって言

「霊夢！そつちに小銭が落ちてるわよ！」

「魔理沙！あつちに珍しいキノコが生えてるわよ！」

「な、なんですつて（だつて）!?!」

弾幕ごっこをやめてアリスが示した方に飛んでいく二人。

そして、なにもないのに気づくとアリスのところに集まつて

「なにもないじゃないか（の）!?!」

そんな二人にアリスはげんこつを落として言う

「ええい、二人とも落ち着きなさいよ」

はあ、先が思いやられる……

続きと素敵なお賽銭箱はあつちよ

第九話、異変が起こるってね

魔理沙と霊夢さんの弾幕ごっこが終わったあと、僕等は博麗神社でお茶を飲みながら話をしていた。

「で、ここ1、2年の間に博麗神社を訪れた外来人はいないのよね？」

アリスが霊夢さんに尋ねる

外来人って言うのは、外の世界から来た人間のこころしい。

「ええ、いないわ」

「じゃあ、ここ1、2年の間に幻想郷に訪れた外来人はいるのぜ？」

「それに関しては分からないと答えるしかないわね。」

まあ、紫に聞けばわかると思うけど」

「紫？」

「ああ、真言は知らないのよね、八雲 紫。

妖怪の賢者って呼ばれてる胡散臭いスキマ妖怪よ。

彼女が主に外来人を連れてくるの」

アリスが説明をしてくれる

「へえ」

「で、霊夢。」

紫はどこにいるんだぜ？」

「それが」

霊夢さんは真剣な表情で言う

「最近、というかここ1、2年の間紫が行方不明なのよね。」

「え？」

「おいおい、どういうことなんだぜ？」

「だって、紫の式神に聞いても帰ってこないって言うし」

「白玉楼の幽々子には聞いたのか？」

魔理沙が尋ねる。

「いいえ、聞いてないわね。」

正直、あまり追及する気にならなかったし。」

「そうか。」

邪魔したな。行くぜ？アリス、真言。」

魔理沙は立ち上がった

—————

「ちよ、ちよつと魔理沙？

行くつてどこに!？」

私は急に立ち上がった魔理沙に尋ねる。

魔理沙は私の疑問に不敵な笑みをうかべて答える

「ふっふっふっ、次の行き先は決まったぜ!!」

冥界の白玉楼だぜ!!」

はあ、こうなつた魔理沙は誰にも止められない。

「仕方ないわね、乗りかかった船よ。」

「なんだよ、素直じゃないな」

真言と一緒に行って嬉しいくせに」

「そ、そそそそんなことあるわけないじゃない!!」

その時、話題の真言はというと、

私が届けた彼のリュックサックの中に入っていた

彼の自家製林檎ジャムを霊夢と舐めていた。

「これ、おいしいですね」

「でしょ」

真言も大概マイペースな人よね。

「じゃあ、出発だぜー!」

次の目的地は冥界の白玉楼というところらしい

「冥界っていうのは、死者が転生または成仏の順番待ちの間、幽霊として住む世界のことよ。」

「へえ〜」

相変わらずアリスの説明はわかりやすいな〜

「まあ、ちよつと距離があるけどな

真言の飛ぶスピードなら問題ないぜ」

「はあ、魔理沙アンタねえ〜

どんなにがんばったって着くのは夜になるわよ!」

「じゃあ、白玉楼に泊めてもらえばいいだけだろ?」

「・・・魔理沙、後で後悔するわよ」

まさか、このアリスの発言がのちのフラグになるとは魔理沙は知らなかった

「おい!」

「いて!魔理沙、なにするんだよ!」

心を読まれた!?

「なんとなくだぜ」

「なんとなくかよ」

「ほら、二人とも！遊んでないで出発するわよ！」

「おう！」

「わかったぜ！」

僕等は白玉楼を目指して飛び立った。

—————

「さあ、着いたぜ！」

魔理沙が白玉楼の入口に着地する

「へえ〜ここが冥界・・・」

「ほら、幽霊がいっぱいいるでしょ？」

彼等を管理しているのが、西行寺幽々子。

八雲紫の親友で今回の目的よ。」

私は真言に説明をする——と急に真言が前を指差し慌てていた

「えっ！ちよつと!?!アリス!!あれ!!」

「な〜よ〜」

私は真言が指差す方に視線を移すと

魔理沙が白玉楼の庭師——魂魄妖夢に斬りかかられていた

「お、おい妖夢!?!いきなりなにするんだぜ!?!」

「問答無用!!」

泥棒は斬らせてもらおう!!」

「こ、今回はなにも盗む気はないし、

盗んでるんじゃないやなくて借りてるだけなんだぜ!?!」

魔理沙は箒で妖夢の剣を受け止める。

前から不思議に思ってたんだけど、物凄く丈夫よね。

魔理沙の箒。

「だー!こうなつたら弾幕ごっこだ!」

魔理沙は帽子からミニ八卦炉を取り出す

「魂魄妖夢、参る!!」

はあ、これだから戦闘狂共は、と私が呆れた時

白玉楼からほのぼのとした女性の声が聞こえた

「ちよつと妖夢くやめなさい」

「ゆ、幽々子様!?!」

そして現れる件の人物、西行寺幽々子と真言!?!

いつの間にも!?

「このジャムおいしいわね〜」

「お褒めいただきありがとうございます。」

ちやつかり、仲良くなってるし!?

—————

「魔理沙さん、すいませんでした」

「まあ、わかつてくれたならいいんだぜ」

事情を理解した白髪の子——魂魄妖夢さんは魔理沙に斬りかかったことを謝罪している

まあ、普段から疑われるようなことをする魔理沙の方が悪いと思うのは僕だけでしょか?

「で、幽々子。貴女は失踪した八雲紫について何か知っているのかしら?」

アリスが本題について

ピンク色の髪の女性、白玉楼の主——西行寺幽々子さんに尋ねる。

「そうねえ、こころ、2年くらい会ってないけど」

紫と最後に交わした会話が印象的だったのは覚えているわ」

幽々子さんは少し間をあけてはつきりとした口調で言う。

「彼女は言つたわ

異変が起こるってね」

—————

魔理沙達が白玉楼に旅立った後、私——博麗霊夢は一つ大事なことに気がついた
紫だけでなく、萃香も行方不明だったのだ

思い出した直後、

博麗神社の境内に降り立つ一つの影

それは——

「なんだ、萃香じゃない。今までなにしてたのよ？」

頭から二本の角を生やした鬼の幼女、伊吹萃香だった

「グググ……レ……イム……ニゲロ……」

「は？あんななにいつて——」

私が言葉を言いきる前に萃香は私に向かって殴りかかってきた

続くわね

ちよつと……？よ……む……？ご飯まだ……？

第十話、速すぎて消えているように見えた

「で？これで貴女のもっている情報は全てなのかしら？」

幽々子さんにアリスは尋ねた。

しかし、返ってきたのはアリスの質問への答えではなく、幽々子さんから返ってきたのは驚くべき提案であった

「そうねえ、あるにはあるんだけど

ただ教えるだけじゃあ面白くないわね」

じゃあ、こうしましょう！

日下部真言さん、貴方がうちの妖夢に弾幕ごっこで勝利することができたら情報を教えましょう」

「えっ！」

「・・・どうしてですか幽々子様。」

妖夢さんは納得できないという様子で幽々子さんに尋ねる

「まだ勘でしかないけれど、今回の異変に少なからず、真言さんは関係しているわ」

幽々子さんは落ち着いた様子で言う

「なんで、真言が異変に関係しているっていいきれなのよ？」
「いいよ、アリス。」

僕が妖夢さんに勝てばわかることさ」

僕ははつきりと戦う意志を示す。

「幽々子様がそうおっしゃるのであれば」

妖夢さんは立ち上がる。

「おいおい、二人とも！やる気があるのはいいが、正直ここで戦う意味はないと思うぜ？」

魔理沙は僕と妖夢さんを止めようとする

「あと、真言さんが勝ったら今夜はここ白玉楼で泊めてあげるわよ」

「おっしゃ！頑張れよ真言！絶対勝つんだぜ!!」

変わり身速いな!?

—————

「では、いきますよ曰下部殿！」

「お手柔らかにお願いしますよ、妖夢さん」

私と曰下部殿はお互いに頭を下げた後、距離をとる

・・・正直、私——魂魄妖夢は彼に対してあまり良い感情をもってはいない。

悪い人間ではないことはわかる・・・ジャムも美味しかったし。
なんというか、とらえどころがないのだ。

彼は他人と話している時でも、心はどこか別の明後日の方向を向いている・・・ような気がする。

悩んでいても仕方が無い！

剣で語れば、わかることだ

「では——魂魄妖夢参ります!!」

—————

「魂魄妖夢参ります!!」

そう妖夢さんが言った直後、妖夢さんが持つている剣を振るう
すると

斬撃が飛んできた

ああ、これが妖夢さんの弾幕なのか

咄嗟に飛び上がって斬撃を躲す

・・・さつきは勝てば良いなんて自信ありげに言いきったけど、正直、勝ち目がない
んだよな・・・

だって、妖夢さんは明らかに剣を使った近接戦闘スタイルだから反射は使えない。

つまり、僕には攻撃手段がないのだ。

冷静なように見えるかもしれないが、内心物凄く焦っている。

だけど勝負は待つてくれない。

妖夢さんは弾幕を放ちながらどんどん距離を詰めてくる。

そして、いよいよ僕は妖夢さんの剣が届く距離まで接近を許してしまった

妖夢さんは僕を真つ二つにしようと剣を振るう

その瞬間、僕は能力を発動させる

妖夢さんに向けて言葉を放つ

『止まれ』

すると、妖夢さんの体は一瞬動きを止める

ほんの一瞬、だけどその一瞬だけでも止まってくれれば僕には十分すぎる!!

体を逸らして妖夢さんの剣を紙一重で躲す

「なっ」

妖夢さんは驚愕の表情を浮かべる

その隙に僕は距離をとろうとしたローが、とれなかった

『人符【現世斬】』

妖夢さんがスペルカードを発動させる

すると、妖夢さんは物凄いスピードでこちらに向かつて突進してきた
速い!? これじゃ逃げきれない!

そう悟った僕は、一枚目のスペルカードを発動させる

『虚偽「ワードオブマウス」』

なんでか、やっぱり一枚目はこのスペルカードになっちゃうんだよな

—————

私の剣を躲し、距離をとろうとした日下部殿を逃すまいと私は『現世斬』を発動させた
が、彼がスペルカードを発動させた直後、私は彼を見失ってしまった。

そして、なぜか彼はさつきまで私が斬ろうとした方向とは真逆の方向にいた

なので、私は急ブレーキをかけ、日下部殿を今度こそ斬った

けれど、手応えはなく

日下部殿は私の背後にいた

不覚! 幻覚だったのか!

さらに、敵に背中を見せてしまうとは!

私は、日下部殿の攻撃に備えて構えるが、日下部殿はなにもしてこなかった
くつ、なめられているのか!?

その余裕もこの次のスペルカードでなくしてやる!!

そう思って、私はもう一つの剣、白楼剣を抜き、スペルカードを宣言した
『人鬼【未来永劫斬】』

妖夢さんが二枚目のスペルカードを発動させたその直後、妖夢さんの姿が消えた。
いや、消えたという表現は少し違うか

『移動速度が速すぎて消えているように見えた』

これが正しい表現であった

妖夢さんは一瞬で、僕の目の前に移動し、二つの剣を十時に斬りおろした
素人である僕が、妖夢さんの放つ斬撃を躲ききることはできるはずもなく、
ガードごと吹き飛ばされた。

気絶しなかったのは、ガード中に霊力を使って全身を強化していたからだろう
しかし、ダメージは隠せない

服もボロボロだし、下手したらアバラの一本や二本折れてるかもしれない
そんな僕に妖夢さんは見下した様子で言い放った

「他人を傷つける勇気をもたない者が他の者を守るなんてこと、できませんよ」
続きます！読まないで、斬ります！

第十一話、あるよ。とっておきの一枚がね。

「他人を傷つける勇氣をもたない者が他の者を守るなんてこと、できませんよ」
妖夢さんはこう言った。

この言葉のおかげで僕は自分に足りないものがわかったんだ

—————

私には、日下部真言という人間がわからなかった

なぜ、彼はあれほど攻撃のチャンスがあつたにも関わらず私に攻撃をしなかったのか。

彼を直接斬ってみて、私は理解した。

彼は攻撃する意志がそもそももないのだ。

だから、私は言う

「貴方がもう攻撃しないということとはわかっています。

だから、もう勝負の意味なんてありません、

どうせ、攻撃用のスペルカードなんて一枚もないのでしょうか？

この勝負は終わりです、もう諦めなさい。」

私が言葉を言いきった数秒後、彼は驚くべきことを口にした

「いいや、あるよ。」

とっておきの一枚がね。」

『言霊【荒唐無稽】』

—————
スペルカードを宣言すると、カードから言霊がでてくる

僕は言霊を掴み、そこに自分の残っている霊力をできるかぎり集める

「うおおおおおおおおおおおおおおお！」

「お、おい真言のやつどんだだけ霊力を集めてるんだよ!？」

「そうね、集めすぎて手のひらが輝いているわね」

「やつぱり、私の見込み通りの人間だわ〜」

霊力を集め終わる頃には言霊は丸々と太った姿になっていた、これで準備完了だ

「いきますよ！妖夢さん！」

「ええ、私も私の最高のスペルで貴方を迎えますよ！」

妖夢さんもスペルを宣言する

『断迷剣【迷津慈航斬】!!!』

妖夢さんのもつ楼観剣に圧倒的な力が集まり、巨大な光の剣となった

「言霊！発射あー！」

僕が叫ぶと言霊は口を広げ、僕が集めた霊力を一気に解放した。

解放された霊力はまるで魔理沙のマスパのような極太レーザーとなって妖夢さんを襲った

「破アアアア!!」

妖夢さんはレーザーに向かって光の剣を振り下ろす

拮抗する二つの力

しかし、勝負には必ず終わりが訪れる。

—————

「お疲れ様、楽しい勝負だったよ」

「はい、こちらこそ楽しかったです！

ありがとうございます！真言殿！」

僕と妖夢さんは互いの健闘を称えて握手を交わす。

結果を言うと、弾幕ごっこに勝ったのは僕だった。

最後の拮抗は、お互いのスペルカードが制限時間を迎え、妖夢さんはスペルカードを使い切ったので僕の勝ちということになった。

なぜか、勝ったはずの僕の方がボロボロで傷だらけなんだけど。

そして、妖夢さんの僕の呼び方が日下部殿から真言殿に変わっていた。

・・・仲良くなれたってことかな？

「ライブル出現だな？アリス」

「ちよ、ちよっと!?!?どういう意味よ魔理沙!?!」

続くぞ！私の授業よりも面白い物語がな・・・うわああああん、もこおおおお

おおおおお

第十二話、これは確かに異変だ

「じゃあ、聞かせてもらおうぜ」

先程の弾幕ごっこでボロボロになった真言と妖夢を（ボロボロなのは真言だけだが）
寝室に寝かせた後、

私はさっそく幽々子に尋ねる。

「そうね、でもちよつと誰か博麗神社まで行つてくれないかしら？」

しかし、幽々子から返つてきたのは質問の答えではなかった。

「は、博麗神社？なんでまたそんなところに？」

「そうだが、あそこには異変の手がかりはなにもなかった。

行く理由がないのぜ。」

私とアリスは納得できないといった様子で、幽々子に反論する。

「なんだか、嫌な予感がするのよ」

・・・それは理由の説明になってないぜ

けれど、幽々子は真剣な顔をしていた

こういうときは絶対なにか確信があつて言っているのだ

はあ、仕方ないな

「わかったぜ、私が博麗神社まで行ってくる。

それでいいだろ？」

「ええ、お願いするわね」

幽々子の口調はほのぼのとしたものに戻っていた

「魔理沙、私が行くわよ！」

アリス、そう言ってくれるのはありがたいのだが・・・

「この中じゃ、私が一番速い。」

あと、私は他人の恋路を邪魔するような無粋な真似はしないようにしてるんだぜ」

と言って、アリスに向けてウインクする

・・・うむ、我ながらきまっていたのぜ

・・・アリスは顔を真っ赤にして下を向いていたので私のキメキメウインク

は見ていなかったようだけど

(・・・) ショボーン

「貸し一つだぜ？」

私は箒に跨り幽々子に向かって言う。

「お菓子なら歓迎なのだけれど？」

幽々子・・・さっきまでのカリスマは一体どこにいったのぜ？

つつこむ気も失せたので、私は博麗神社目指して飛んでいった。

魔理沙が飛んでいったのを見送った後、私——西行寺幽々子は一人呟く。

「よかった、これで安心ね。」

博麗の巫女にはまだ死んでもらっては困るもの」

「じゃあ、この話の続きは真言と妖夢が起きてからにしましょう」

私は魔理沙の見送りを終えて戻ってきた幽々子に向かって提案する。

「そうね、それもいいけど」

この異変、なにが起こるかかわからないから、一番大事なことだけ、貴女に伝えておくわね」

「?」

私が首を傾げていると、幽々子は真剣な口調で

驚くべき事実を告げた

「貴女達は気づいていなかったみたいだけど、ここ数日の間に各地の主要な妖怪達が失踪しているわ

紅魔館のパチュリー・ノーレッジ、永遠亭の蓬莱山輝夜、守矢神社の八坂神奈子、地霊殿の霊鳥路空、命運寺の寅丸星、あとは伊吹萃香くらいかしらね、私の知っている限りでは」

「ちよつと、待つてよ！

そんなに失踪しているんなら誰か気づくものじゃないの!？」

「そうね、けれど誰も気づいていない。

まるで、存在と非存在の境界を弄られたのかのようね。」

幽々子のその言葉を聞き、私はある妖怪を連想する

「……八雲……紫……」

「彼女が犯人だと言いきえることはできないけれど、少なからず関わっているわね」

犯人とは言いきれない？

「ここまで、証拠が揃っているのに？」

「なんでよ？八雲紫が犯人に決まってるじゃない」

「いいえ、幻想郷を愛する紫がこんなことをするとは、思えないわ」

「そういうわれればそうかもしれないけど」

「納得はできないが、幽々子の言葉も一理あると思った」

「じゃあ、一体誰が犯人なのよ!？」

「それはわからないわ。

けれど、紫を探すって方向性は間違っていない。

だから、貴方達はこのまま紫の捜索を続けなさい。

貴女もそろそろ気づいているんじゃないの？」

幽々子に言われるまでもなく、私は気づいていた。

・・・はつきりとしていなかった感覚が綺麗にまとまって一つの言葉になっていく感じがする。

ふふ、私は博麗の巫女じゃないのだけどね

——これは確かに異変だ

「で、私達はこれからどうすればいいわけ？」

正直、八雲紫に関する手がかりはなにもないわよ」

私は幽々子に尋ねる。

そう、異変だとわかっていても解決するための手がかりがなければ解決なんてできやしない。

私はただの人形遣い、霊夢みたいな万能な勘があるわけじゃないのだから。

「そうね、正直、失踪した妖怪がいるところに行っても

相手の後手に回るだけよね」

だから、失踪した妖怪がない場所

太陽の畑なんてどうかしら？」

げげっ、フラワーマスターのいるあの畑!?

正直、気が向かないけれど・・・

「わかったわよ、他に手がかりも無いしね」

そして幽々子はもう話すことがないのだと言わんばかりに大きな欠伸をして、

「もう、私は寝るわーおやすみなさい」

「・・・おやすみなさい」

そう言って、私も白玉楼の寝室へ行くのだった。

—————

そして、夜が明けて次の日

西行寺幽々子は失踪していた。

続く！おい、ちよつとけーね!?!なんで泣いているんだ!?

第十三話、剣として

時間は遡り、魔理沙が博麗神社に着いた頃

「おい、なんだこれは・・・」

私が博麗神社に着いたときにはもう既にすべてが終わっていて、

博麗神社の参道はいくつものクレーター状の穴が空いてボロボロになっていた。

一体ここで何が起ったっていうんだ!?

「おい！ 霊夢！ どこだ!？」

恐らく、霊夢はここで戦っていたんだ

私は何度も霊夢の名前を呼んで探す

すると、

「う、るさい…わね…人が…寝てるっ、てのに…」

博麗神社の本殿で横になっているボロボロの霊夢が返事をした。

霊夢の服は所々破けて、そこから傷が見えていた

出血が酷い、医学に関しては私は素人なのだが、

素人の私が見てもヤバい状況なのは確かだ。

「おい！ 霊夢！ 死ぬなよ!？」

私は迷わず霊夢を抱きかかえると、

急いで永遠亭を目指して飛びたった。

—————

時間は戻り、白玉楼

—————

「幽々子様—————幽々子様—————どこですか—————!？」

という、妖夢さんの大声で僕は目を覚ました。

自分の寝室から出て、妖夢さんに声をかける

「妖夢さん、おはようございます。」

どうしたんですか?」

「あ、真言殿！ おはようございます!!」

突然ですが、幽々子様を見かけませんでしたか!？」

今日の妖夢さんはグイグイくるなあ・・・

「いいえ、見てませにゆ」

おかげで嘔んじやったよ

「にゅ?」

「見てません!僕は見てませんよ!!」

羞恥心をかき消すように大声で言った。

「……うるさいわねえ、一体なにがあったのよ?」

僕の大声のせいで、アリスを起こしてしまったみたいだ。

—————

「で、朝起きたら幽々子はいなくなっていて、枕元に手紙が置いてあったと。」

アリスが妖夢さんの主張をまとめてくれる。

「はい、そうです。」

あと、手紙の中には幽々子様のスぺルカードが入っていて」

と言つて、妖夢さんは手紙と一枚のスぺルカードを取り出した。

「その手紙にはなんて?」

僕が妖夢さんに尋ねる。

「『異変を解決する手伝いをするように』と書いてありました」

「その内容だと、幽々子はまるで、自分が失踪する、ことがわかってたみたいね」

……アリスの発言に違和感を感じた

アリスはなにか知っているのか?

「なあ、アリス。」

「なあに？」

「どうして失踪だなんてわかるんだ？」

「そうです！」

幽々子様が失踪したとは限りません！

どこか遊びに行っただけかも……」

「いいえ、これは失踪よ。」

なぜなら、これは異変だからよ」

—————

私は全速力で飛び、迷いの竹林を越えて

目的地である永遠亭に辿り着いた。

周りが竹林だからだろうか、その建物だけ浮世離れしているように見える。

私は、永遠亭の扉を力一杯叩き、叫ぶ

「頼む！開けてくれ！霊夢が怪我してるんだ！」

扉は開き、一人の少女が出てきた

明るい紫の長髪にうさみみブレザーのあざとすぎる少女、鈴仙・優曇華院・イナバが

目を擦りながら私に話しかける

「なによ？ 魔理沙、こんな夜遅くに……」

ええっ!? 霊夢!?

どうしてそんな大怪我して」

「理由は後だ！ 頼む、永琳を呼んでくれ!!」

「わ、わかったわ！ 待ってて！」

そう言うのと、鈴仙は永遠亭の中に戻って

「師匠ー！ 師匠ー！ 急患です!!」

「あらあら、どうしたの？」

「霊夢が大怪我をしていて」

「そう、とりあえず治療室へ」

鈴仙は私達の元に戻って

「魔理沙、肩を貸しなさい。」

霊夢を治療室に連れて行くわよ。」

「わ、わかったぜ」

鈴仙と二人で霊夢を治療室へ運ぶ

死ぬんじゃねえぜ、霊夢。

—————

「・・・妖怪達の失踪」

「犯人は紫様の可能性が高いと」

「そう、だけど幽々子は紫が犯人とは思えないって言ってたけどね」

私は真言と妖夢に幽々子と最後に交わした会話の内容を説明した。

「で、次の目的地は太陽の畑よ」

「あ？」

妖夢は物凄く嫌そうな顔をする、そりやそうよね

太陽の畑といえ、あのアルティメットサディスティッククリチャー風見幽香のテ
リトリーだからね

・・・私だって行きたくはないわよ

「嫌ならついてこなくていいわよ」

私と真言だけで行くから」

「お、おう？」

なんで真言、貴方が嫌そうな顔をするのよ

まあ確かに妖夢の嫌そうな顔からヤバさはある程度伝わったでしょうけどね

私が真言の手を取り、出発しようとする

「行きます！」

「この魂魄妖夢！真言殿の剣として！」

「ああ、よろしく、妖夢さん」

こうして、私ーアリス・マーガトロイドと日下部真言に魂魄妖夢を加えた三人で太陽の畑を目指し旅立つのであった

「ねえ、なんで真言だけの剣なの？」

「私の剣でもあるんじゃないの？」

「こ、言葉の綾です！」

ZZZZ・・・ハッ!?

続きますよ!!ちよつと、咲夜さーんナイフはやめ・・・!!

第十四話、強さの定義

どうも！皆さんこんにちは！日下部真言です！

ただいま、アリスと妖夢さんと襲ってくる弱小妖怪や妖精を弾幕で蹴散らしつつ、太陽の畑へ向かっています

アリス曰く『普段に比べて好戦的な妖怪や妖精が多い』らしい
異変の影響なのでしょう？

そんな疑問を抱きつつ、飛んでいると

鮮やかな向日葵の黄色が見えてきました

「見えますか？真言殿

あの向日葵生い茂る場所が太陽の畑です」

「なんて、綺麗な向日葵なんだろう」

僕は思わず感動していた

「そこに住んでるやつはとんでもないけどね……」

「……ですね」

あれれ？

なんで、こんなに綺麗な場所なのに二人ともテンション低いの？

けれど、僕のテンションは向日葵の綺麗さに上がっているの、無意識に僕の飛行速度は上がっていく

ああ、向日葵畑の中心はどんなに綺麗な景色なんだろうか、ワクワクするなあ

しかし、向日葵畑の中心は僕の想像とは真逆の姿をしていた

所々に空いている大穴・・・まるで大きな二つの力がぶつかりあった後のような

—————

正直、気が向かないのよねー

太陽の畑。

風見幽香のこともあるけど

・・・私花粉症なのよね

なんて、どうでもいいことを考えている間にも太陽の畑に近づいていく

どうして真言はあんなにテンション高いのかしら

正直、理解できないわね・・・

そして、太陽の畑の中心地に一番早く着いた真言が突然止まった

どうしたのかしら？

その疑問の答えはすぐにわかった

ぐちゃぐちゃになり、穴だらけになった花畑。

これが一番しつくりくる表現だろうか

この荒れ方を見ただけでわかるわ

八雲紫と風見幽香が闘ったのだ

・・・恐らく、八雲紫が風見幽香を今まで失踪した妖怪達と同じように連れ去ろうとしたのだ

しかし、風見幽香も八雲紫と同じく幻想郷最強の一角

上手く連れ去れずに抵抗したのでろう

その結果がこの荒れ果てた花畑ということだ

「だ、大丈夫ですか!？」

真言が声をあげる

そこには――

ポロポロになった風見幽香の姿があった

――

「だ、大丈夫ですか!？」

僕は、家の壁に寄りかかってかろうじて立っている

赤いチエツクの服を着た緑髪の女性――風見幽香さんに声をかける

風見さんは頭から血を流し、彼女の左腕は本来曲がってはいけな方向に曲がっている

それよりも気になったのは、彼女の顔色は真っ青で頭をおさえていることだ
「風見さん？頭が痛いんですね？」

でも、どうすれば・・・

僕が悩んでいるのを知ったのかスペルカードから言霊がでてきて、僕のリュックサックを指差した

リュックサック？中には林檎ジャムしか入ってないぞ？

言霊は僕を見つめる

・・・わかった

僕は自分のリュックサックから自家製林檎ジャムを取り出し、それをアリスの家から借りてきたスプーンにのせて

それを風見さんに持っていく

「これを舐めてください、良くなるはずですから！」

「いら…な、い」

風見さんは拒否する

けれど、僕は諦めない

「遠慮しなくてもいいんー」うるさい! いらなくて言うてるでしょ!!」

風見さんは僕の言葉を遮って叫ぶと僕を突き飛ばした

その突き飛ばしで5 mくらい飛ばされた、弱っているのになんて強い力なんだ
 ……意識が朦朧とする

「私は風見幽香よ!」

幻想郷最強の一角!

人間ごときの施しを受けるなんて、私のプライドが許すわけないじゃない!!

人間の施しを受けるくらいなら迷わず私は死を選ぶわ!!!」

なんだって? 今、この女はなんて言った?

プライドが許さない? 死を選ぶ?

……ふざけるなよ

「そんなプライド……. 犬にでも食わせちまえ!!!」

—————

私——魂魄妖夢が見たのは、真言殿が風見幽香に突き飛ばされるところからだ

風見幽香が叫び、それに呼応するかのよう真言殿は立ち上がり叫ぶ

「そんなプライド……. 犬にでも食わせちまえ!!!」

その直後、空気が震えた

真言殿……なんて靈力を放出しているんだ……

真言殿はどんどん風見幽香との距離を詰めていき

彼は風見幽香まで辿り着き、言った

「他人に助けてもらうことは弱さなんかじゃねえ！

他人に助けてもらって、お返しに他人を助ければ、

それは強さになるんだよ!!」

「うるさい！私に説教なんかするんじゃない!!

人間があ!!」

風見幽香は右手から弾幕を真言殿に向かって放とうとする

真言殿!?危ない!!

私が真言殿を助けようと走るが、

風見幽香から弾幕は——

放たれなかった

『止まれ』

風見幽香は右手を真言殿に向けた体制のまま動きを止めていた

彼が能力を使ったのだ

「どうして…体が…」

馬鹿な!? 風見幽香が完全に動きを止めているというのか!?

本来、能力の効果というのは使用者の力量と効果を受ける者の力量によって左右される

例えば、使用者の力量に比べて受ける者の力量が大きかった場合はすぐに能力の効果はなくなってしまう

つまり、今の状況は

真言殿の力量は怪我をしてはいるが風見幽香の力量を上回っているのだ!!

『口を開けろ』

そのまま、彼は能力を使い風見幽香の口を開けさせて、そこにジャムを流し込む

『眠れ』

風見幽香はその言葉を聞くと糸の切れた人形のように倒れこんだ

……日下部真言、彼は只者ではないのではないか

私は彼を見てそう思った

「妖夢さん、アリス、風見さんを家に運んでおいて

あと、さつき突き飛ばされたとき僕の左腕も曲がっちゃいけない方向に……」

「ちよ、大丈夫ですか!?

風見幽香相手にあんなことするから!!」

「てへぺろ☆」

・・・私の気のせいかもしれない

ねえ、続いて欲しいの？それとも、虐めて欲しいのかしら？

第十五話、ジャムの秘密

一晩に渡る霊夢の治療を終えて

服の中心で赤と青に色が別れている服を着た幻想郷の医者——八意永琳が治療室から出てくる

「霊夢は大丈夫なのか!？」

「ええ、命に別状は無いわ

けれど、目を覚ますのに時間がかかるかもしれないわね」

「そうか、それなら問題ないんだ」

ところで、と私は間を作って

「話は変わるんだが、

どうしてここにいる住人は

ニートは、いない、のに

まるで、いるか、のような

振る舞いをしているんだ？」

ニートっていうのはここ永遠亭の主のかぐや姫——蓬莱山輝夜のことだ

「っ!? 魔理沙、貴方

姫様が、いないのがわかる、のね?」

「ああ、いないものはいないじゃないか」

「……私の研究室までついてきなさい」

永琳は驚くと早足で研究室に入っていく

断る理由もないし、私も永琳の研究室に入る

—————

「確かに、姫様は数ヶ月前から姿を消しているわ

私の前だけにね」

「? どういうことだ? 永琳の前だけ? 鈴仙や兎達の前からも姿を消しているじゃないか」

「私だけから姿を消しているというのは、言い方がよくないわね、正しくは姫様が姿を消していることに、気づいている、のは私だけということよ」

「じゃああなたか? 鈴仙達にはニートがいるように見えているってことなのか?」

「ええ、そうよ。」

彼女達の『存在認識の境界』が弄られているの」

「存在認識の境界だっ!?」

「そう、存在認識の境界が弄られた者は存在していないものを存在しているように認識する」

「だから、あいつらはニートがいるように振舞っているのか」

これで、鈴仙が誰もいない部屋に向けて呼びかけていたり、

食事を一人分多めに用意していた理由も理解できた

「そして、姫様を連れ去り、存在認識の境界を弄つたのは……」

「八雲……紫か」

いよいよききな臭くなってきたな

紫……今度は何をたくらんでやがるんだ？

少しの間の後、今度は永琳の方が納得できないことがあるのか私に質問してきた

「ねえ、魔理沙

貴女はどうして姫様がないことに気がついているの？」

「それは、永遠亭の外から来たからじゃないのか？」

「それだったら、他人が外から来たらずぐ失踪したことがバレちゃうじゃない、八雲紫は

そんなミスはしないわ」

「……正直、心当たりは無いぜ」

「本当？最近変なものを食べたとか、変なものを拾ったとかないの？」

「私は犬か何かかよ・・・っ!？」

変なものではないけれど、一つ心当たりが見つかった

私は帽子から小瓶を取り出す

「これは？」

「つい最近来た外来人の日下部真言の荷物に入ってた林檎ジャムだ。

美味しいから借りておいたんだぜ」

「少し、いただくわね」

そう言うと、永琳は一口ジャムを舐めた

「・・・やっぱり」

「ん? どうしたんだぜ?」

「このジャムには、

八雲紫の能力を打ち消す効果があるわ」

—————

私——鈴仙・優曇華院・イナバは何時ものように、昼食を用意して、姫様を呼びに
いく

「姫様—? ご飯ですよ—!」

「おい、鈴仙」

姫様を呼んでいる私に話しかける声が一つ

「何よ？魔理沙、あんたの分の昼食だって用意してうえっ！」

すると、魔理沙は私の口に向かってスプーンを突き込んだ

「なにすんのよ！」

「……あれ？」

私は魔理沙に文句を言おうとしてる間に異変に気づく

「姫様は一体どこに？」

「姫様はいないわ、失踪したのよ」

答えたのは、私の師匠——八意永琳師匠だった

「うどんげ、目覚めたばかりで悪いのだけれど

魔理沙と一緒に姫様を探しに行つて来なさい」

え、ええ——！！？

続くわねって、座薬は関係ないでしょ!？

第十六話、門番が寝ていない時点で嫌な予感はしていたんだよ

「で、どこにいくのよ?」

こんにちは、鈴仙・優曇華院・イナバです

私は今、魔理沙の後ろについて飛んでいます

……まったく一体、どこに連れていかれるのかしら

「ああ、言つてなかったな、紅魔館だぜ」

こういう時は、パチュリーに聞くのが一番なんだぜ」

……紅魔館ねえ、あの吸血鬼の館に一体何があるというのかしら?

私は、道中暇なので魔理沙に自分の感じている違和感について呟く

「でも、本当に八雲紫が犯人なのかしら?」

「じゃあ、違うって言うのかよ?」

魔理沙が食いついてくる

「失礼かもしれないけれど、

私には八雲紫が姫様を連れ去る理由も

連れ去ることで生じる利益も思いつかないわ」

「……確かに、あのニートを連れ去るくらいなら、永琳を連れ去った方が現実的な気はするが」

そう、『師匠ではなく姫様が連れ去られた』

この事実は何か隠されている、そんな気がするのでわざと師匠を連れ去らなかつた？

誰のために？

……

「おい、着いたぞ！紅魔館だぜ！」

……まあ、悩むより行動よね

—————

「紅魔館には誰も通しません！」

紅魔館の門番の中国娘——紅美鈴が私達の前に立ち塞がる
珍しく寝てないな

……まあ、寝てても寝てなくても

マスパで吹き飛ばすだけなんだけどな！

……でもその前に、私は美鈴に尋ねる

「おい、美鈴

パチュリーは、いるのか?」

「むむむ!パチュリー様の読書の邪魔はさせませんよ!」

「じゃあ、パチュリーはいるんだな?失踪なんかしてないよな?」

「当たり前じゃないですか!」

「そうか」

私がミニ八卦炉を取り出し、構える

その瞬間、

「いいえ、パチュリー様はいらっしゃらないわ」

メイドが現れた

—————

私こと紅魔館のメイド長——十六夜咲夜は、ここ数ヶ月、違和感を感じながらも暮らしていた。

それは、

パチュリー様の失踪。

パチュリー様が失踪したのにも関わらず普段と変わらない私以外の紅魔館の住民達。しかもその症状は紅魔館の住民に限っただけの話ではなかった。

霧雨魔理沙——彼女はよく紅魔館にパチュリー様の本を目当てにやってくる。

その魔理沙も、パチュリー様がないことに気がついておらず、パチュリー様が図書館に疑問を少しも持っていないなかった。

しかし、今日現れた魔理沙は違った。

魔理沙はパチュリー様の失踪について知っているかのような口振りだった。

だから、私は魔理沙と話をすることに決めた。

「魔理沙、パチュリー様の失踪について話したいことが——」

私が台詞を言い終わろうとする刹那、

紅魔館から轟音が響き渡った

そして割れる窓ガラス……

彼処は……誰の部屋だったかしら……

……彼処はお嬢様のお部屋!?

……お嬢様の身に何か起こった!?

私は私の能力——『時を操る』程度の能力』で時間を止めてお嬢様の部屋を目指して駆け出した

……私がお嬢様の部屋で見たものは、うずくまっているお嬢様の姿とそれを静かに見下ろす八雲紫の姿だった

咲夜が現れた直後、紅魔館から轟音が響き渡った

・・・なんだよ、真昼間から穏やかじゃねえな

「鈴仙、行くぜ！」

「・・・わかったわよ」

鈴仙は嫌な感じがするのかわか、行きたくなさそうに返事をする

・・・嫌な感じがするのは私だって同じさ

「わっ、ちよつと、勝手に入らないでくださいよ!？」

久しぶりに働いている門番が私達を止めようとするが、私達には通じない

割れた窓ガラスから紅魔館の主の吸血鬼——レミリア・スカーレットの部屋に侵入する。

そこで私が見たものは、ある意味予想通りの嫌なものであったが、

まったく予想出来なかった光景でもあった。

私が見たのは、

傷をおさえてうずくまっているレミリアの姿と失踪していたはずの八雲紫の姿だった

紫が片腕を前に突き出す

するとレミリアの足元の床からスキマが開き、
レミリアを連れ去ろうとする

紫……お前の思い通りにはさせないぜ!!

私は即座にスペルカードを発動させる

『恋符【マスタースパーク】』

私のミニ八卦炉から紫目掛けてレーザーが発射される

しかし、私の『マスタースパーク』は紫には届かなかつた

「け、結界!？」

鈴仙が冷静に状況を分析する

そう、私の『マスタースパーク』はまるで見えない壁に阻まれていた

くそつ、流石腐つても幻想郷最強の一角だぜ

「お嬢様ああああああああああ!？」

咲夜が叫ぶ

咲夜の目の前には大量のナイフがあつた

……咲夜も必死にレミリアを助けようとしたんだな

もう既にレミリアの体は半分以上をスキマに飲み込まれていた

「ま、魔、理沙…人里に向かいなさい…そこに運命の十字路が…咲夜…紅魔館をいいえ、幻想郷を任せたわよ…」

それが、私の聞いたレミリアの最後の台詞だった

その直後、レミリアはスキマに飲み込まれていった

・・・紫い、お前一体何がしたいんだぜ!?

そして紫は自分でスキマを開けてその中に入る

「おい！待てよ！紫！

紫いいいいいいいいいい！！」

私の叫びは虚しく、紫は消えていった

残されたのは、崩れ落ちた咲夜となんとも言えない疲労感だけだった

続くわよ！うー☆

第十七話、怪我はアリスの魔法で治しました

皆さんお久しぶりの日下部真言です！

正直、魔理沙が主人公でもないんじゃないか？

という危機感を地味に感じている空気主人公、日下部真言君ですよ！

一応主人公ですからね？

……言つてて自分で悲しくなってきた

で、僕が今何をしているのかと言うと

……説教を受けています、アリスに。

風見幽香さんがいかに危険な妖怪であるか、

彼女に対して僕がした大立ち回りは

下手をしたら死んでいたこととか

そもそも、真言は日頃から無茶をしすぎだとか

無傷で物事を終えることは出来ないのかとか

……正直、今回とは関係ないことも説教された

妖夢さんは、

「アリスさんの説教はまるで閻魔様みたいに長いですね

でも、真言殿を心配しているから説教をするんですよ？」

と苦笑しながら言っていた

—————

目を覚ますとさつきまでの頭痛は無くなっており、

私————風見幽香の目の前に

土下座をしている人間がいた

「はあ？」

思わず、間抜けな声が出てしまう

「ほんつとうにすいませんでしたっ!!!」

人間は頭を何度も下げながら言う

「風見様にした、幾つもの失礼な行為、

本当に申し訳なく思っております!!!

反省してます!!!

どうか命だけは!!!」

……これがさつき私に説教をした人間の姿か
……そう思うと笑えてくる

私は、

「あはははは」

面白すぎて声を出して笑ってしまっていた

「風見様!!本当に申し訳ありませんでした!!!」

私の笑い声をどう解釈したのか知らないけれど、

人間はさらに頭を床に擦り付けて謝りだした

「私のことは風見じゃなくて幽香って呼びなさい

後、様もつけないわ

いい加減、その下手糞な土下座を止めなさい、見ていて不愉快になるわ」

「はい、すいません!」

勢いよく立ち上がる人間

「そうね、貴方の名前は?」

「日下部真言です!よろしくお願ひします!!」

「そう、じゃあ真言。」

「……た、助けてくれて、あ、ありがとうね」

思わず言葉が出た、まさか私が人間に感謝することになるとはね

「はい！幽香さん、すいませんでし、あるさ？」

はあ、まずは私の一挙一動に謝るこの状況をなんとかしなくちゃね

まさか、私が人間の名前を覚えることになるなんてね

真言、貴方、私に興味を持たれるなんてつくづく可哀想な人間ね

—————

風見幽香が目を覚ました後、

私——アリス・マーガトロイドと真言、魂魄妖夢の三人は幽香の家で話を聞いてい

た

「で、太陽の畑のあの惨状は貴女と八雲紫の戦闘によって引き起こされたものだと？」

「ええ、そうよ」

私が日課のお花の世話をしている間に

急にアイツはやってきたのよ」

幽香は私の質問に答える

「紫様は何か言っていますませんでしたか？」

妖夢が質問をする

「いいえ、無言で私に襲いかかってきたわ

よく考えれば、不自然だったかもしれないわね」

「不自然？」

「あのお喋り好きで胡散臭いスキマ妖怪が

、何も言わずに襲いかかってくるだけ、っていうのは不自然ではないのかしら？

まるで……いや、なんでもないわ」

幽香は言葉を濁した——私はここで追及しておかなかったことを後に後悔するこ
とになる

—————

正直、目新しい情報は無かったため、僕達は太陽の畑を出ることにする

「アリス殿、次の目的地は？」

「そうね、『彼岸』かしら」

「……あ？」

次の目的地が決まったみたいだ、

……また妖夢さんが嫌そうな顔してるよ

「では、幽香さん

失礼します」

「ええ、季節が変わったらまた来なさい、真言。

今度は綺麗な花畑を見せれるようにするわ」

「はい！楽しみにしていますね！」

「いつてらっしゃい」

「いつてきます！」

幽香さんにそう言つて僕はアリスと妖夢さんを追いかけて空を飛ぶのだった

私が目を覚ますとそこには見知らぬ天井があつた

「……ここは？」

体を起こし、眩く

「ここは永遠亭よ、おはよう霊夢」

……ああ、私は萃香にやられて魔理沙に運ばれたんだっけ

「起きたばかりで悪いんだけど、霊夢

今、幻想郷中で妖怪が失踪しているの」

「それが私に何の関係があるのよ？」

「これは異変よ、

だから解決するのは博麗の巫女、貴女の仕事でしょう？」

まだ続くの？むきゆー

第十八話、人里救出ミッション

・・・こんにちは、博麗霊夢よ

正直、体はまだまだ本調子じゃないのだけれど

永琳のやつに異変だと言われてから私の勘は冴え渡り、何も考えずに永遠亭を飛び出してきちゃったわ

異変って言葉だけで体が勝手に動くなんて

・・・最早職業病ね

で、私は今、妖怪の山の守矢神社に向かっているわ

理由は、勘よ

それにしても、鬱陶しいくらい妖精がいる

妖精の数からも明らかに異変だと言うことが分かるわね

まあ、この程度の雑魚妖精が幾ら束になったとしても私には問題無いわ

「あややや、霊夢さんじゃないですか

ここ、妖怪の山まで何の御用で？」

幻想郷最速の烏天狗が私に話しかけてくる

「あんたには関係無いでしょ、文」

私に話しかけている烏天狗——射命丸文は
しつこく聞いてくる

「何の御用で？」

答えてくれないと、通しませんよ？」

普段の私なら弾幕ごっこで無理矢理通ろうとするのだが、めんどくさいことに今の私は本調子ではない

「異変よ、異変の調査をしに行くのよ!!」

なんか文句あるの!？」

とりあえず、逆ギレする私

「あやや、それはお邪魔して申し訳ありません

ところで霊夢さん、貴女が調査しようとしているのは

今、妖怪の山の妖怪達が狂乱して、

人里に襲っている異変のことですか？」

……どうやら、今回の異変は一筋縄ではいかないらしいわね

「じゃあ、美鈴、紅魔館のことは任せたわよ」

咲夜が美鈴に話しかけている

ちなみに、門番である美鈴には、私——霧雨魔理沙が持っているジャムを舐めさせてある

「では、魔理沙、鈴仙、人里に行きましようか」

咲夜が切りだす

「おいおい、勝手に仕切るんじゃないぞ！」

「はいはい、早く行くわよ魔理沙」

鈴仙は飽きた感じで言う

私達は人里に向かって飛び立つのであった

—————

私——鈴仙・優曇華院・イナバは、置き薬の交換によく人里を訪れる

だから普段の人里について良く知っている

人間達が仲良く暮らすいい場所だと思う

けれど、私は今の人里の状況を見てまったく違うことを思った、

……ここは、何処だ？

所々で半狂乱の妖怪が暴れていて、
人里の店や家は酷く荒らされており、
怪我をしている人が大勢いる
ここが人里？

何処か別の場所と間違えたと言われた方がよっぽどリアリティがある
私はその光景がショックで少しぼーつとしてしまっていたみたいだ
そんな私の頬を叩く魔理沙

「おい、鈴仙聞いてんのか？」

「ぎ、ぎめん」

「まあ、いいけどな

じゃあ、もう一回言うぜ

私達は今から人里を救う、いいな？」

魔理沙は私達に聞く

「ええ、お嬢様の言った幻想郷の中に人里は必要不可欠ですもの」

咲夜は即答する

「いいわよ」

私もその意見に異論はなかった

「じゃあ、決まりだな

まず、鈴仙は人々の怪我の治療に当たってくれ」

「ええ、もちろん言われなくてもやるわよ！」

「で、咲夜は人里にこれ以上妖怪が入ってこれないようにバリエードを作ってくれ」

「ええ、了解したわ」

「んで、私が妖怪退治だ

じゃあ、ミッションスタートだ！」

「みっしょん？」

「……なんか言わなきゃいけない気がしたんだぜ」

「……………」

「ああくそ！なんでこんなに妖怪が人里に攻めてくるんだよ！」

私——藤原妹紅は得意の炎の術で妖怪達を蹴散らしながら文句を言う

思えば、私が今日、普段と違う何かが起こっているという事実気づいたのは今朝の

出来事だった

今朝、私はいつものように人里のパトロールと称して人里周辺を散歩していると

人里を襲おうとする妖怪と半人半妖の人里の守護者——上白沢慧音がいた

いつもなら慧音が楽に妖怪達を蹴散らすはずだった
・・・・そう、いつもなら、

突然、慧音が頭を抱え、苦しみだしたのだ

私はすぐに助太刀し、慧音を助け、朝はなんとかなったんだ
しかし、慧音の看病をしながらうとうとうとしていた昼下がりに

人々の叫び声が聞こえた

直ぐに外に出ると、尋常じゃない数の妖怪達が人間達を襲っていた
そして、今に至る

弱音を吐く趣味は無いが

正直、私一人ではこの数を捌ききることは出来ない
諦めそうになったその時、

『恋符【ノンディレクションナルレーザー】!!』

あの男勝りの魔法使いの音が響く

そして、放たれる圧倒的な光の奔流

妖怪達はその光に飲まれていった

「真打ち登場ってな」

いひひ、と自称真打ち——霧雨魔理沙が現れた

「で、妹紅、慧音はどうしたんだぜ？」

私——霧雨魔理沙は弾幕で人里に妖怪を入れないように蹴散らしつつ、白い長髪で赤いもんぺが妙に似合っている不老不死の蓬萊人——藤原妹紅に話しかける

「今朝から、頭が痛いって、家で寝込んでるよ」

「頭が痛い？人里のピンチになんて呑気な……」

「いや、慧音を責めないでやってくれ

おそらくだけど何か術のようなものをかけられてるようなんだ」

「術？もしかすると、これが効くかもな」

と言つて、私は帽子から真言ジャムの小瓶を取り出す

「ん？なんだそれは？」

「これを舐めると……えーと、えーと、なんだっけ？」

「おい」

「まあ、とりあえず試してきてもいいか？」

「いいけど、なるべく早く戻って来いよな」

「ああ」

そう言つて私は慧音の家に向かつて走り出す

「じゃあ、ちよつとだけ本気を出すとするかな

『蓬萊【凱風快晴―フジヤマヴォルケイノ―】』!!!」

・・・実はアイツ一人で良いんじゃないか？

—————

「はあ、はあ、やめろ…やめろおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

私——上白沢慧音は頭をおさえながら蹲る

この頭痛は、普段の生活で起こるような頭痛とは全く性質が違う

まるで頭の中を弄くられるような感覚

少しでも、気を散らすと体が勝手に動きだす

この頭痛は私を操ろうとしているのだろうか？

・・・そんなことはどうだっていい、お前の好きにはさせないぞ

「おーい、慧音ー？何処だー？」

突然、家のドアが開いて私のよく知っている魔法使いの少女——霧雨魔理沙が家に

入ってきた

ど、どうして魔理沙がここに!?

「く、来るな、魔理沙あ、来るなああああああ!!」

「相当酷そうだな・・・直ぐに楽にしてやるぜ」

そう言うのと魔理沙は私に小瓶を手渡した

「こ…これは？」

「それを舐めればきつと良くなる

私を信じろ」

私は藁にも縋る思いで小瓶の中のジャムを舐めた

すると、

さつきまで私を襲っていた頭痛は綺麗さっぱり無くなっていた

「魔理沙、なんだこれは？」

万能薬かなにかか？」

「いいや、普段のジャムだぜ？」

ただ、作った人間が特殊なだけのな」

「じゃあ、私は妹紅の手伝いに戻るぜ」

「待て、私も手伝おう」

—————

「はあ、どうしたものかしら」

私——十六夜咲夜は人里を守る為のバリケードを作ることの出来る職人を探して

いた

しかし、職人達は皆軽、重の差はあるけれど怪我を負っており、人里を覆うバリケードなど作ることとは出来ないようだった

私には建築の技術などはあるはずもなく、手詰まりかと思っていた時

「やあ、お困りかい？ 盟友」

青い服に青い髪の毛のツインテールが特徴的な河童が不敵な笑みで私を見ていた

「貴女は」

「河童の技術力は世界一イ!!!」

河童にとりだよー!」

「ところで、どうして貴女は他の妖怪みたいに暴れていないの？」

「暴れてただけど、

博麗の巫女に返り討ちにされたら治ってたんだよ」

「そう、貴女も大変ね」

どうやら、霊夢も異変解決のために動いているみたいね

……とりあえず、私に出来ることをやりましょうか

続き？そんなことよりキュウリ食べたい

第十九話、第一侵蝕

「はい、次の人連れてきて！」

どうも、鈴仙・優曇華院・イナバです

今は人里の人々の治療に当たっています

怪我をしていない人に治療を手伝ってもらいつつ、怪我人の治療をする

・・・まさか妖怪の私が人間と協力するようになるとはね

それにしても、今日の妖怪達の様子は明らかにおかしい

まるで、私の『「狂気を操る」程度の能力』で狂わされたかのような様子だ

・・・わ、私はやってないわよ!?

自分が黒幕なのに、その影響で怪我をした人間達の治療をするなんて非生産的でしょう？

で、今の人里の状態はというと

妹紅、慧音、魔理沙の活躍によって

人里内にいる妖怪はいなくなってきたりしているし、

咲夜も河童にアドバイスをもらいつつ、着実にバリケードを完成させていつている

恐らく、バリケードは半日もしないうちに完成するだろう

「ふう、人里内の妖怪は殆ど片付けたな」

私——霧雨魔理沙は帽子の中にミニ八卦炉をしまいつつ、妹紅と慧音に言う
「ああ、人里の方は私と妹紅だけで十分だ」

人里の『方は』？

「なんだ？」

人里以外にも何か問題があるみたいな口振りだな？」

「命蓮寺だ、彼処は数多くの妖怪が住んでいる」

「その妖怪達が暴れだしたら問題だ」

「じゃあ、何故もしないんだよ？」

「……命蓮寺か、」

命蓮寺は人妖の共存を志す聖人——聖白蓮の経営している寺だ

そこは、人間だけでなく妖怪からも信頼を得られているので

多くの妖怪が住み着いている

「それは、白蓮殿が」

『命蓮寺の妖怪達は私が食い止めます、人間達に手出しはさせません』と言うものだから、な

実際、命蓮寺から妖怪は出てきていないから問題無いんだが

・・・少し心配なんだ」

「確かに、心配だな」

ん？まさか、この流れは・・・

「魔理沙、申し訳ないのだが命蓮寺まで行つて様子を見てきてくれないか？」

・・・なんとという断りにくい雰囲気

「し、仕方ないのぜ」

つまり、私に逃げ場は何処にも無かったということさ

私は大人しく、命蓮寺に向かうのであった

—————

私——聖白蓮は焦っていた

ここ、命蓮寺には数多くの妖怪達が住んでいる

その妖怪達が今朝から一斉に苦しみだしたので

さらに、妖怪が人里を襲っているらしい

・・・このままでは人間達の妖怪に対する印象が今以上に悪くなってしまふ

それだけは避けたい、けれど……

私はここ、命蓮寺を離れるわけにはいかなかった

何故なら、命蓮寺の妖怪達は今にも人里の人間達を襲いかからんとしているのだ

苦しんでいる妖怪達は皆

「に、にん……げん、人間を……」

「コロ……シテヤル……」

「ユル……サナイ……」

などと呟いていて、私が魔法で抑えなければ

人里は直ぐに人々の血で真っ赤に染まるでしょう

でも、このまま魔法で妖怪達の力を抑えているだけでは問題は一向に解決しません

と、私が考え事に気を散らしてしまった所為で

さつきまで頭を抱えて蹲っていたナズーリンが人里を目指して飛び出してしまいま
した

……不味い、ナズーリンを止めなければ

と思ひ、私はナズーリンを攻撃しようとしませ

が、出来ませんでした

私にはナズーリンを傷つけることは出来なかつたのです

これが私の甘さなのでしょうか
そして、命蓮寺の扉を開け……

たのは、ナズーリンではありませんでした
扉を開いたのは白黒の魔法使いでした

「おっと、ナズーリン

どうした？ 穏やかじゃねえな
とりあえず、これ舐めとけ」

彼女は外に出ようとするナズーリンを押しさえつけ、何かをナズーリンの口に入れまし
た……あれは、ジャム？

すると、ナズーリンの動きは止まり顔色も良くなりました
私が安心したのも束の間、

私が目を離れた隙に最悪の事態が起こってしまいました
ナズーリン以外の妖怪達も目を覚まして

一斉に外に雪崩れ込んで行きました

「……ああ、やってしまった」

私は崩れ落ちました

「おい、聖！追いかけるぞ！」

.....

「諦めてんじやねえよ！聖！お前の理想はこの程度で折れちまうような陳腐なモンだったのかよ!？」

.....違う

「そうだ、魔理沙の言う通りだまだ諦めるのは早い、早過ぎる!!」

「私はまだ、諦めません!!」

「良い返事だ、行くぜ!!」

私と魔理沙は妖怪達を追いかけます

しかし、私達の予想とは裏腹に人里に被害はありませんでした

妖怪達は人里に辿り着く前に全員道中で気絶していました

「どうして?」

「理由はわかんないけどさ、まあ、結果オーライだぜ」

「聖ー！聖ー！」

私達が妖怪達を命蓮寺に戻そうとしていると

ナズーリンが私の名前を呼ぶ

「?ナズーリン?どうしたのですか?」

体調は大丈夫なのですか？」

「体調の方は問題無いさ、すまない、魔理沙には迷惑をかけた」

「困った時はお互い様だぜ」

「そう言ってもらえると助かる

で、だ、二人とも聞いてくれ私は私の

『【探し物を探し当てる】程度の能力』で失踪したご主人の居場所に大体の当たりをつけることができた」

・・・ナズーリン、貴女にとって星は『探し物』なのね、星、可哀想に

「で、一体何処なんだぜ？」

『『地底』さ』

「今の私の力ではこの程度で限界ね

まあ、第一侵蝕としては十分かしら

だけど、まだ足りない・・・

力が、足りない・・・」

続きます！いぎ、南無三ー！

第二十話、ルールとマナーを守って楽しく弾幕ごっこしよう!!

こんにちは、皆さん久しぶり

楽園の素敵な巫女、博麗霊夢よ

最近、魔理沙ばかり目立つもんだからここぞって時にテコ入れしておかないとね

あ、素敵な素敵なお賽銭箱はあつちよ

待ってるからね

で、私は今文と一緒に守矢神社を目指しているわ

文は、「異変のスクープはやっぱり霊夢さんと御一緒するのが一番ですからね!」って

言ってる着いてくる

・・・嫌と言っても着いてくるから、

正直ウザいけど我慢することにする、戦力にはなるはずだしね

「で、霊夢さん? どうして守矢神社に行くんですか?」

「勘よ」

「で、ではその勘の根拠は?」

「勘よ」

「貴方はどうやって異変を解決するつもりですか？」

「勘よ」

「劉邦が項羽を倒して建国したのは？」

「漢よ」

「良い質問ですね！」

「って、何を下らない話をしてるんですか!？」

「霊夢さん、文さん！」

「あら、早苗じゃない」

「文と下らない話をしている間にどうやら守矢神社に着いていたみたいだ」

「で、さっき私と文にツツコミを入れたのは緑の長髪に白と青の巫女服を着た守矢神社」

「の風祝——東風谷早苗だ」

「で、こんなところまで何の用事でしようか？」

「あやや、それは霊夢さんが異変の手掛かりが守矢神社にあるって」

「？諏訪子様には何か御用なんですか？」

「まあ、そんな感じよ」

私は適当に答える

「ところで、早苗、あんた誰かの術を受けた？」

「はい？術？そんな記憶無いですけど……」

ちよ、ちよつと霊夢さん!?!何事ですか!?

ちよつ、近、近いですよ……//

本人は気づいてないみたいだけど、明らかに誰かに術を掛けられた形跡がある

……私でなければ気づけなかつただろう、それほど証拠が少ない見事な術だ

これほどの術を使えるのは、私の知る限りでは一人だけ

あの胡散臭いスキマ妖怪だけだ

「どうやら、ここに来たのは間違いないじゃなかつたようね」

「?・霊夢さん?」

私は札を取り出し早苗の頭に置き

「解!」

すると、早苗に掛かっていた術は解除された

そして使った札を懐にしまう、私のレベルになれば一度使った札も針も再利用できる

……べ、別に新調するお金の余裕が無いわけじゃないんだからね、もったいない

だけよ!

「では、霊夢さん守矢神社に参りましょうか」

文がスクープの匂いがすると言って、私を急かす

「よくわからないですけど、

一応、お茶くらは出しますよ」

――

私――東風谷早苗は、霊夢さんと文さんに出すお茶を用意していたが……

何か違和感を感じていた

何か……何か……

あ、とりあえず神奈子様と諏訪子様を呼びましょう

一人でいくら考えても思いつかないものは思いつかないですし

「神奈子様―？神奈子様―？」

神奈子さ、まあああああああああああああああああああああああああああああ

あ!？」

――

「あああああああああああああああああ!？」

早苗の大声が聞こえてくる

「あーうーどうやら早苗も気づいたようだね」

ケロちゃん帽子を被った幼女神——洩矢諏訪子がいた

「あら、貴方は気づいていたの?」

「私は神だよ?」

あの程度の術に掛かるほど、落ちぶれてはいないさ

ところで、早苗に掛かっていた術を解いてくれたのは貴女かな?」

「そうよ」

「一応、お礼を言っておくよ

だけど、めんどくさいことになるよ」

「え?」

すると、バーンと守矢神社の襖が開き明らかに勘違いしている顔をした風祝が私を睨んでくる

「霊夢さん! 貴女ですね!?!」

神奈子様を何処かに連れ去ったのは!?!」

「は?」

「うちの神社の信仰が羨ましいから

神奈子様を連れ去るなんて!!!

もう許しません!

勝負です！」

「あやややや、博麗の巫女と守矢の巫女の因縁の対決ですか！これはスクープですね！」
と言つて、写真を撮りまくるバ烏天狗

「あはははははは」

早苗の巫山戯た勘違いに腹を抱えて笑う幼女神

はあ、これは避けられない戦いのようだ

—————

弾幕ごっこをするため私と早苗は外に出る

「ふふふふふ、今日の私はいつもの私とは思わないことです！」

早苗が吠える

正直、あんたよりこっちの体調の方がいつもと全然違うわよ

・・・傷が開きそうだから体術は使えないわね、あと長時間弾幕を避け続けるのも
敵しそうね

なら、遠距離戦で直ぐにケリをつけるしかない！

「いくわよ、早苗！」

「かかつてきなさい！霊夢さん！」

私は早速スペルカードを発動させる

「神奈子は『地底』いるよ」

弾幕ごっこが終わった後、諏訪子は私に話しかけてきた

「どういうこと？」

「君が聞きたかったのは失踪した神奈子の居場所でしょ？」

失踪したやつのは近くには必ず八雲紫、もしくは異変の元凶が必ずいるって予測してこ

こ、守矢神社に来たんでしょ？」

「勘よ」

私がそう答えると諏訪子はカラカラ笑って

「そうかい」

と言った

・・・早速私は地底に行こうとしたのだけれど先程の弾幕ごっここの影響で身体が動かなくなったので、しばらく守矢神社にて足踏みすることになってしまった

続きます！続きは、私の奇跡の力で面白してみせます！

第二十一話、一緒に行こう

どうも！いつもニコニコ貴方の隣に這い寄る高校生、日下部真言です！

今日は久しぶりに出番が来たということで、僕の名前の秘密について教えちゃいます

！

僕の名前、『真言』ですが、『真』だけでも『まこと』と読めます

では、『言』には一体どういう意味があったのでしょうか？

正解は某超有名漫画家『手〇治虫』の『虫』みたいなノリだそうです

・・・すいません、久しぶりの出番なのでテンション上がり過ぎて変な事を口走ってました

では、今の僕が置かれている状況について言及すると

アリスと妖夢さんと一緒に三途の川に辿り着いたと思ったら何処か別の場所に一人だけ連れてこられたでござるの巻

ということだ

僕が連れてこられた場所は、本当に何も無い空間だった

壁の雰囲気的に建物の一室のような感じだ

全体的に霞がかったている・・・室内なのに？

嫌な感覚がする、自分がここにはいけないと警鐘を鳴らしている

幾ら一人で考え込んでも状況が把握できるはずはないので、僕と同じくここにいる人物に尋ねることにする

緑の短髪に奇妙な帽子を被っている女性、ここには僕とその女性しかいなかった

「ここは、一体何処なんですか？」

彼女の凜とした声が響き渡る

「ここは、彼岸

死者達の終着駅ですよ」

—————

私——アリス・マーガトロイドは困惑していた

三途の川に着いた途端、日下部真言が

消えたのだった

「アリス殿、真言殿は一体何処に行ったのですか？」

妖夢も困惑した様子で私に尋ねる

「私にもわからないわよ……」

私がそう答えた直後――

「おやおや、お二人さん

お困りかね？あたいで良ければ相談に乗ろうじゃないか」

赤い髪に青の着物を着て鎌を持った死神――小野塚小町が現れた

「あら、サボリ魔の死神じゃない」

「おいおい、そんなこと言うんじゃないよ人形遣い

あたいだつて働く時は働くさ……ただ、休憩の時間が長いだけさ」

「だからって、仕事の時間もそっちのけで休憩ばかりとるのはいかなものかと……

小町殿」

「あれえ!?魂魄のはあたいの味方じゃないのかい!?

あんたもあたいと同じような従者的なポジションだろ?」

「従者的じゃなくて私は従者ですが」

「しかも、妖夢は年中無休で仕事してるわよ」

「うへー、あたいには理解できないねえ、年中無休とか……下手すればあたいは1、

2年で死ぬね」

「死神なのに死ぬの？」

「そりゃ、死ぬだろうさ……多分」

小町はなんともいえない顔をしている

あれー死神って死ぬのかなー？死神が死ぬなんて聞いたこと無いから、まさかあたいは不死なのかーそーなのかー

……とか考えてるんでしょね

「……あたいは人食いはしないよ」

「どうしたのですか？小町殿？」

「いや、なんだか凄く失礼な目で見られてるような気がして……」

「で、サボリマイスター、質問があるのだけれど」

「だから、私はサボリじゃな……」

私だつてさつきまで仕事してたんだよ！

しかも、四季様から頂いた超重要任務！

いやー久しぶりに良い仕事したねー」

四季様……ああ、四季映姫のことか

四季映姫・ヤマザナドゥー―死者達を裁く、この三途の川の果てある彼岸で仕事を
している幻想郷専属の閻魔様

……彼女に会おうと最後、死よりも辛いお説教が待っていると恐れられているこ
とで有名ね

そこまで聞いた時、私はある可能性に辿り着く

小野塚小町の能力『距離を操る』程度の能力』と消えた真言、ここから導き出される
答えは……

「で、その超重要任務つてのは人間をここから彼岸に送ることじゃないでしょうね？」
「ほう……」

私の質問を聞いて、小町の雰囲気が変わる

「人形遣い、あんたなかなか頭が切れるじゃないか」

「こ、小町殿？」

小町の変化に妖夢は困惑しているみたいだけど、私は言葉を続ける

「あら、その様子だと正解みたいね」

つまり、小町は真言の彼岸への距離を操って彼を彼岸まで送ったのだ

「まあ、大体合ってるね、

でも、正答率としては80%くらいだね」

「残りの20%は？」

私がそう言うのと小町は鎌を構えて言う

「残りの20%は……」

「ここを越えて彼岸へ行こうとする不屈き者を殲滅することだよ」

—————

はい、どうも！日下部真言です！

えーと、僕は突然『彼岸』という幻想郷の死者の裁判所に来ています！

そして、そこにいた幻想郷の閻魔様——四季映姫・ヤマザナドゥ様に……

説教をされています、正座で

僕が彼岸についての質問を終えた直後、彼女は

「日下部真言、そこに正座しなさい……」

正座あつつつっ！」

と叫び、その勢いに思わず僕は正座をしてしまい……すると

「そう、あなたは少し迂闊すぎる」

という彼女の言葉から

フェンスの老朽化の可能性くらい考えろとか、そもそも屋上は立ち入り禁止だとか……幻想郷以前の出来事を中心に心が折れそうなくらい閻魔様のありがたい、ありがたしい、ありがた迷惑な説教をいただきました

いやー、楽しい時間は直ぐに過ぎて、辛い時間は過ぎるのに時間が掛かるというのが典型的ですね

……永遠を感じました、割とガチで

ほう、と閻魔様は話を区切るかのように息を吐き

これからがまさに本題と言わんばかりに息を吸った

……まだつづくんですかねえ

「さて、ここまで貴方が犯してきた過ちについてお話をさせて頂いたわけですが、私は未だ貴方の犯した許されざる罪については言及していません」

「僕の犯した罪……」

罪……？

僕は万引きだつてしてないし、交通ルールもしっかり守っていた、ましてや殺人な

ん……て……

「どうやら、ほんの少し、記憶は残っているようですね……

しかし、貴方は忘れてしまっている

いや、貴方は自分の記憶を封じているのです、自らの手で……」

「記憶を封じてる……?」

「ええ、貴方は自分の犯した罪の記憶を封じています、貴方の『真の能力』と共にね

『言葉を実実にする』程度の能力』? そんなものは貴方の真の能力の一部に過ぎません

『言霊を操る』程度の能力』? それは貴方の力の依り代を「言霊」という形にただけです、貴方の真の能力はそんな形に囚われない自由な能力なはずです」

意味がわからない、閻魔様は何を言っているのか

「意味がわからないですか? 知らないですか?」

そうやって貴方は目を背けようとするのですか?」

そう、日下部真言、貴方は少し、自己防衛が過ぎる」

閻魔様が僕に目を向ける

しかし、その瞳は僕を見てはいない

まるで、僕の中にある僕以外の何かを見ているそんな感覚……彼女は一体何を見ているのだろうか……

「やはり、貴方は己の罪に気づく必要があるようですね……」

「僕は罪なんか犯してない！」

はあ、と閻魔様は呆れたように溜息をついた

「いいえ、貴方は犯しています」

では、問います……貴方の両親は何処に行つたのですか？」

両親？ 閻魔様は一体何を？

「質問の意味がわからないです、僕の両親は何処にも行っていないし、そもそも外の世界の話は関係ないで」「その両親ではありませんよ、日下部真言、貴方を産み貴方に名前をつけた両親の話です……」

僕の言葉を途中で遮り閻魔様が告げる

僕を産んだ両親……？

それは今の両親のことじゃな……いの、か……

そう考えた瞬間、僕の心が二つに別れた

違う！ と言う心と違わない！ と言う心——その二つに……

「少しは違和感を感じましたか？」

閻魔様は僕に尋ねる

「い、いや……何も感じないね……」

僕は虚勢を張る

「ふう、貴方も強情な人だ……」

これはあまり使いたくなかったのですが、

時間もありませんし

……仕方ありませんね」

使いたくない？時間が無い？一体彼女は何を言っているんだ？

すると、彼女は一枚のスペルカードを発動させた

『知罪（フェイスストウユアイノセントシン）』

そのスペルカードは弾幕では無かった

スペルカードが発動した直後、僕の影は僕の足元を離れ、

立ち上がった

『立ち上がった』というのは少し語弊があるかもしれない

僕の影は足元を離れ、地を這っていた状態から人型に姿を変えた

その影の姿は、僕そのものであった

「おお、やっと外に出れたぜ」

影が喋る、僕と同じ声で

なんとという違和感……自分と話をするなんて

「その影は貴方の罪そのものですよ、日下部真言」

「……僕の、罪」

「そうだ、俺はお前が長年封じてきた

罪の記憶——そして、お前の真の能力、そのものだ」

「おや、能力まで出てきてしまいましたか」

「ああ、コイツの罪は能力に深く関係しているからな」

影が僕を見る……

「よお、覚えてるか？ いや、覚えてないから俺がいるんだよ……」

「お前は……一体なんなんだよ……？」

「本当は気づいているくせに」

「っ!？」

「お前はまたそうやって、知らない振りをするのか？」

「う、るさい! うるさい!」

聞きたくない! 僕はお前の話なんか聞きたくない!

『言霊【荒唐無稽】!!』

僕はスペルカードを発動させる

言霊に霊力を与え、レーザーを発射する

「逃げてんじゃねえ！」

『拒絶【分かり合えない思い】』

影もスペルカードを発動し、レーザーに向かって己の拳を突き出した
すると、僕の放ったレーザーは文字通り消え去った

「これは、拒絶……相手のスペルカードや能力を無効にするスペルカード」

影は何故か自分のスペルカードを説明する……こいつは一体何が伝えたいんだ
「くそ、まだだ！」

『言霊【快刀乱麻】』

僕は再びスペルカードを発動させる

言霊の口から空気の刃が放たれる

「邪魔だ、小賢しい」

『強欲【決して手に入らない苦痛】』

影は言霊から放たれた空気の刃に向けて掌を向けた

すると、空気の刃はすべて奴の掌に集まって進み、奴はその空気の刃を掴み取った

「これは強欲……相手のスペルカードを相手に返すスペルカードだ」

そう言うとき影は空気の刃を僕に向かって投げた

「う、くっそがああああ！」

僕は叫ぶと思い切り跳んだ、多少は食らってしまったが、まだ身体は動く！

この戦いで少し影の行動パターンが分かってきた

あいつは遠距離攻撃を行わない……つまり、距離をとって冷静に戦えば！

僕はバックステップで影との距離をとろうとしたが

「遅過ぎるんだよ」

その間に奴は僕の真後ろに移動していた

「嘘……. . . だろ？」

「少し寝てな」

影は僕の後頭部を殴りつけた

鋭い痛み、意識が飛びそうだと吐き気がする

「ごほっ、ごほっ」

蹲り、咳をする僕……. . . 少し血を吐いた

すると影は僕に止めをさすのではなく、言霊の首を握り持ち上げる

「そうだ、あの時もこうやって、」

やめろ、言うな

「両親のー」

やめろ！これ以上言うんじゃない！！

僕の意味とは裏腹に身体はさっきの影の一撃の所為でまったく動かない

「こうやって両親の首を締めて殺してたなあ」

影は力を込めて言霊を『握り潰した』

「うわあああああああああああああああ！」

その直後、まるで封印が解かれたかのように流れてくる僕の過去の記憶……そう、

僕は自らの手で両親を殺したのだった

そして僕は全てを思い出す

己の罪、己の本当の能力を

—————

それは僕が小学低学年の頃、

両親は正直、真つ当な人間ではなかった

煙草は吸うわ、酒は飲むわ、借金だつてあつたし、僕を虐待することもあつた

僕は必死に我慢した

しかし、あいつらは僕の宝物だつた祖父から貰つた絵本を僕の目の前で破り捨てた

その瞬間、僕の中で何かが弾けた

そう、それが僕の真の能力

『【思いを力に変える】程度』の目覚めだった

僕はその能力で両親への憎しみを力に変えて、人を優に超える力で両親を殺した
それが僕の封じていた罪だ

—————

「どうやら、思い出したみたいだな」

影は僕に話しかける

「……お前が」

今の僕には立ち上がる体力も精神力も無かった

倒れ込んだまま影に話しかける

「お前がやれよ……僕には関係ないだろ」

「っ!?お前、本当に言ってるのか」

影の表情が驚愕に変わる

「ああ、身体だったらくれてやる、好きに使えばいい……僕を巻き込むな」

「そうだ、僕の代わりに影がすべてやればいい、異変の解決も何もかも……お前は
僕なんだろう？」

「この腰抜け野郎が!!」

影は僕の胸倉を掴み叫ぶ

「俺だって、お前みたいな腰抜け野郎じゃなくてな、自分の手で解決してえよ!!」

「ただど……」

冷たい感触……涙？

影に視線をやると……影は泣いていた

「俺じゃ駄目なんだ!!」

俺じゃ、憎しみや怒りの感情に囚われちまう!!!

守りたいものも俺じゃ守れないんだよよ!!!

ああ、そうか……

「アリス、魔理沙、妖夢、霊夢、幽々子、幽香……皆を俺じゃ守れない、むしろ壊してしまうかもしれない……だから!!」

……そうか、こいつは僕なんだ

気が付けば、僕は影を抱きしめていた

「気付くのに時間が掛かってすまなかった、お前は僕だったんだな……」

「ああ、遅過ぎんだよ……腰抜け野郎……」

後は、任せませ？」

影は僕を見て、泣きながら笑顔を作る

それに僕は

「嫌だ」

と渾身の笑顔で答えた

「はあ?」

影は泣くのも忘れて驚愕に顔を変える

「お前の言う通り、僕は腰抜け野郎だ

僕一人じゃ何もできない

だから……

お前も一緒に来い、お前も僕なんだから?」

僕は影に向かって言う

「ふっ、あはははははははは」

影は笑い出す

……失礼な奴だな、こっちは真剣だったのに

「……後悔すんなよ?」

影は僕に問う

「後悔も反省も十分した、後は開き直るだけさ」

「ははっ、ちげえねえ」

影と僕は握手をした

「さあ、行こうぜ相棒」

「ああ、行こうぜ相棒」

「幻想郷を守りに」

僕等がそう言うのと、影——相棒は僕の身体の中に入ってきた

「どうやら、終わったようですな」

閻魔様が話しかけてくる

「ああ」

「貴方の罪は許されるものではありません」

「わかつてる」

「けれど、善行を積みめば天国には行けるかもしれないね」

「そうか……」

「幻想郷を救うこと、それが貴方の今の積める唯一の善行です」

「ああ、わかつてる、僕に任せとけ」

「はい、任せましたよ」

閻魔様は笑顔で答えてくれた

……笑ったら結構可愛いじゃないか

『『地底』を目指しなさい、そこに全ての元凶がいます……貴方はもう、その正体に

気付いてるかもしれませんが」

「……」

「二つだけ質問をさせて下さい、もし自分の親友が悪事に手を染めていたらどうしますか？」

「話し合つて、

話し合つて、

話し合つて、

それでもだめなら、

殴つても連れ戻す」

「ふふつ、いいでしょう、及第点です

一つになつても他人に甘いところは変わらないようですね」

閻魔様は面白そうに言う

「うっせ」

僕は少し拗ねてみせる

「出口は用意しておきました、そこを通れば貴方の力ならすぐに三途の川を渡りきれでしょう」

閻魔様が指を差す、その方向には穴ができていた

「またな」

「ええ、幻想郷を頼みますよ」

僕がその出口に入ろうとした瞬間、世界が震えた

続くのか続かないのか、白黒はつきりつけましよう！

精霊異変

第二十二話、第二侵蝕

時間は少し戻り、三途の川

「さあ、彼岸へ行きたいんならあたいを倒してからにしな！」

小町が鎌の刃の部分を私達に見せて言う

「……はあ、まったくめんどくさい死神ね

「では、魂魄妖夢……参ります！」

挑発に乗った妖夢が小町に向かって駆け出そうとする——

のを私は妖夢の服を掴んで止めた

「ちよつと落ち着きなさい」

「どうして止めるのですか!?!アリス殿!?!」

「戦うメリットが無いのよ!戦って勝つたとしましょう、その後三途の川を越えるのよ? 一体時間は幾ら掛かると思っているの!?!その頃には、彼岸で起こってる事は全て終わっているわよ!」

「た、確かに……」

「だから、私達は信じて待ちましょう、ね？」

「わ、分かりました」

妖夢が物分りの良い子で助かったわ

「ところで、小町」

「なんだい？」

「どうして四季映姫は只の人間である真言を彼岸へ連れて来るように貴女に命じたのかしら？」

私はずつと頭に引っ掛っている疑問を小町に尋ねる

「あの人間に異変を解決させるためだって四季様は言ってたよ」

「異変を解決させるため……」

「どうして只の人間の真言殿なんか？」

今度は妖夢が質問をする

「あたかも詳しくは知らないけど、あの人間の本当の能力がどうか四季様は言ってたね」

「……やっぱり」

私は眩く

「何がやっぱりなんですか？アリス殿？」

「風見幽香の時の事を覚えているかしら？」

「ええ、真言殿が風見殿を能力で拘束したことですよね」

「そうよ」

「風見幽香つて例のフワワーマスターだろ？うへえー、あの人間凄いねえー」

「で、風見幽香を拘束した時発揮した力こそが真言の本来の力だとしたら？」

「っ!?!それは・・・」

「そう、真言には霊夢や魔理沙と同レベルくらいの力は最低限あるってことよ」

「確かにそれくらいのがありゃー、異変を解決するための戦力になるわなー」

「ですが、そんな力は必要なのでしょうか？」

妖夢が言う

「どういふこと？」

「妖怪が失踪するという異変なのですから失踪した妖怪達を見つけたら、

それで解決ではないですか、ならば正直、戦力は必要無いと思うのですが・・・」

確かに妖夢の言うことも一理ある、八雲紫を見つけたらそれで確かに解決してしまう

異変だ

もし、八雲紫が暴れたとしても霊夢や魔理沙が止めれば良い話だし

「おや、あんたら知らないのかい？」

異変はそれだけじゃないってことを……」

小町が驚くべき事実を告げる

「なんですって!?!」

「一体どういふことなのですか!?!小町殿!?!」

「だから、失踪だけが今回の異変じゃないんだよ

ついでこの間のことなんだけど、人里周辺の妖怪が暴走して人里を襲うっていった事件

が起こったんだよ

「ひ、人里を!?!」

「ああ、今回は暴走したのが人里周辺の妖怪だけだったから被害は少なくて済んだんだ

けどね……」

「そう、良かった……」

「でも、四季様はもつとヤバい事態を想定しているらしいよ」

「もつとヤバい事態って?」

すると小町は少し間を作ってハッキリと告げる

「幻想郷中の全ての妖怪が暴走するという事態だよ」

「なんですって!?!」

「そんな!？」

「恐らく、暴走した妖怪達は皆人里を狙う……人里の人間を根絶やしにするために」
「確かに……それは最悪ね……」

「そうだ、人間が根絶やしにされたら、人間達によって存在できている妖怪達は滅びる……そして」

「「幻想郷が滅びる」」

私達がそう言った途端、世界が震えた

場所は移り、彼岸

「地震か!？」

「これは、第二侵蝕!?!早過ぎる!?!もう準備が終わったというのですか!?!」

閻魔様が叫ぶ

「おい、閻魔様!?!なんだよ第二侵蝕って!?!」

僕は柱に掴まりながら閻魔様に尋ねる

「異変です!?!恐らく、この地震が終わると幻想郷中の全ての妖怪が暴走を始めます!?!」

「なんだって!?!」

「止めるにはもう、元凶を断つしかありません」

暫くすると地震は終わった、その代わりに閻魔様が急に頭を抱えて蹲った

「閻魔様、おい、大丈夫か!？」

「恐らく、妖怪達は…人間を、根絶やしにしよう…と…します、だから…」

は、やく人里に、向かいなさい、つあああああああ!!」

「閻魔様!？」

「わ、私に構わず、早く!早く行きなさい!!」

「わかった」

そう言うと僕は閻魔様に最後のジャムの小瓶を投げ渡した

「悪いな、ちよつとしか入ってないけど、多分足りるだろ?」

「ど、うして…このジャムがあれば妖怪の暴走から救えるんですよ!」

「俺が救いたい人の中には閻魔様も入ってるんだよ!」

じゃ、行つてくるぜ」

「ほん、とうにお人好しですね…後、私は閻魔様じゃなくて四季映姫ですよ」

「分かった!またな!映姫様!!」

「ええ、また会いましょう」

最後に映姫様と挨拶を交わし、僕は彼岸から出て行くのであった

地震が起こった

あたぃー小野塚小町は四季様から地震のことは聞いていたのであまり驚かなかったが、

「これは一体？」

「あわわわわわわ」

突然起こった事態、その情報を必死に得ようとしている人形遣いと慌てふためく半人の剣士

まるで真逆の態度をとる二人にあたいは笑いを堪えつつ、説明してやる

「こいつは異変だよ……この地震が終わった後、今回の異変——【精霊異変】は本当の意味で始まるのさ」

あたぃがそう言った数秒後、地震は止まり、その代わりにあたぃを激しい頭痛が襲った

いたたたたあつ!!? な、なんだいこれはあああああつ!!? 想像以上だよ!!?

あー、悪いねえ二人とも、あたぃにはこれに抗える程の力量が無かったみたいだ……

「人形遣いに魂魄の……に、逃げろ……あたぃはもう、自分を抑えられない……」

直後、あたぃの身体は勝手に鎌で二人を襲い始めた

二人は逃げようとするが、あたいの能力——『距離を操る』程度能力』で彼女達は逃げることは出来ない

やめろ!!やめてくれ!!!

あたいの鎌が人形遣いの首を跳ね飛ばそうとしたその刹那

「待たせたな」

その言葉を聞いた直後、あたいは意識を失った

・・・後は任せたよ、日下部の

—————

三途の川を渡り切った僕の目に映ったのは死神にアリスが襲われてる光景だった

僕はアリスを助けるため、死神を気絶させた

よくアニメとかでやる、首をトンってやるやつで

まさか出来るとは思わなかったけど・・・

へあれくらい余裕だぜ、アニメなんて人間の想像だろ？人間の想像力程度楽勝で超えれるってーの!>

おっ、相棒じゃないか!?久しぶり!

〈おう、相棒〉

大丈夫か？居心地悪くないか？

〈ああ、問題無いぜ〉

そうかそうか良かった良かった！

〈相棒、俺との会話は頭の片隅くらいに留めておいた方がいいぜ〉

どうして？

〈現実での会話についていけなくなるからだ〉

え？

相棒に言われて意識を現実に戻すと・・・

「ねえ！聞いてるの!？」

「だ、大丈夫ですか？真言殿、あわわわわ」

怒っていらつしやるアリスさんと慌てふためく妖夢さんがいらつしやった

〈ほら言わんこつちやない〉

「わ、悪い、ね、寝てた」

「はあ？寝てたあ!？」

「立ちながら寝るなんて、真言殿は器用ですね・・・」

我ながら下手くそな言い訳だったと思う

アリスに説教され、落ち着いた後、

「で、閻魔のところでは貴方は何をしてきたのかしら？」

アリスが聞いてくる

・・・やっぱり聞かれると思った

「自分の罪と向き合ってた」

「そう、道理で雰囲気が変わったわけね」

「ああ、もう逃げるのはやめたんだ」

〈本当かあ？〉

本当だよ!!

〈ああ、悪い悪い、ジョークだよジョーク、相棒のことは信用してるよ〉

・・・悪い冗談だな

〈だから、すまなかつたって！〉

「真言殿、これからどうするのですか？」

「そうね、貴方、四季映姫から何か聞いてるのでしょう？」

アリス、やたらと勘がいいな・・・

「映姫様は人里へ向かえって言ってた

妖怪達は人間を狙ってるらしいから」

「そう、じゃあ行きましようか」

「はい！行きましよう！」

「ああ、行こう！」

僕等三人は人里を目指して飛び立つのだった

続くよ！でも、あたいはサボらせてもらうけどね

第二十三話、入道の兄貴の拳でヒイヒイ言わされるお話

よお、久しぶりだな私だぜ

最近は、主人公が主人公しちまつてるから私の立ち位置が危ないと思ひ始めている霧雨魔理沙だぜ

私は今人里にいる

ナズーリンに地底というヒントを貰ったので、地底に向かおうと思った矢先、地震が起きた

地震が止まったと思ったら、いきなり妖怪の軍勢が人里を襲ってきたので、私は今人里で立ち往生している状態だ

・・・正直、ジリ貧だぜ

地震が起こる前の人里救出ミッションの時に暴れていた妖怪達よりも、今暴れている妖怪の方が質も量も段違いだ、バリケードはもう既に壊された

私や妹紅や咲夜が全力で迎撃しているが、全ての妖怪を止めることは出来ず、結構な数を人里に侵入させてしまっている、だから怪我人が増えている、鈴仙と慧音が治療に当たっているが、間にあっていない

「くそ！ 迎撃するにしても、治療するにしても人手が足りてねえ!!」

「おお、魔理沙が弱音を吐くなんてな！ 珍しいこともあるもんだ！」

妹紅が茶化してくる、そう言うお前も必死じゃねえか、顔が笑ってないぜ？

「けれど、魔理沙の言う通り人手が足りないのは事実ね」

何も無かったところからメイドが現れる

・・・正直、びっくりした

「さ、咲夜かよ、いきなり現れるんじゃないぞ！ びっくりしただろ！」

「あら、ごめんなさいね」

謝罪に心が籠ってないぜ・・・まあ、何時ものことだから気にしないけどよ

「つて、そうだよ！ 咲夜！ お前の能力で一気に迎撃出来ないか？」

「無理ね、私の『時を操る』程度の能力』も万能ではないのよ」

「まあ、だろうと思っただぜ」

私はあからさまにガツカリしてみせる

おうおう、咲夜が地味に怒ってる怒ってる、表情には出さないけど雰囲気で怒ってるのが伝わってくるぜ

・・・さつき驚かされた仕返しだぜ、いつひっひ

おっと、巫山戯てる場合じゃなかったぜ！

くそ！倒しても倒しても湧いてきやがる！

せめて、結界を張れる奴がいればいいのになーでも霊夢は怪我しちまつてる、紫は敵だしな．．．結界は期待出来ないだろうな．．．

――

「あやや、不味いですね．．．」

私、射命丸文は人里を目指して幻想郷の空を飛んでいた

先程の地震が起こり、それが治まった直後、幻想郷中の妖怪が一斉に人里を襲い始めていた

私も暴れそうになったのですが、霊夢さんの鉄拳制裁とお札でなんとか事なきを得ました

．．．うう、まだ霊夢さんの鉄拳で出来たたんこぶが痛みますよおうもう少しで人里に甚大な被害をもたらすところでしたから、無理矢理止めて下さったのを責めはしません

でも！もっと優しく止めてくれても良かったんじゃないんですかね！！

さて、人里も近づいて来ましたね、この私、幻想郷最速の射命丸文にしてみれば、人

「里まであつという間ですよ！あつという間!!」

・・・しかし、人里の状態は中々に酷いですね

人里の中には妖怪が入り込み、人々を襲い、家屋を壊している

「まあ、唯一の救いは失踪している強力な妖怪がまだ来てないことですかね・・・」

そう、今人里を襲っているのは妖精や精々人食い妖怪程度の実力しか持たない妖怪のみ、だから人里にはまだ致命的な被害はでない

・・・だけど、放置していい問題ではないですよ

「では、私も参戦致しましょうか!!」

私は高らかにスペルカードを宣言する

『【幻想風靡】!!!』

—————

私、霧雨魔理沙が妖怪達を迎撃していると、不意に一陣の風が人里に吹いた

この風は、射命丸か!!

射命丸は超高速で移動しながら妖怪達に弾幕をばら撒いていく！これは有難い援軍だぜ!!

「どうも！清く正しい射命丸です！超、超、超、超、超強力な援軍の登場ですよ!!魔理沙さん!!」

・・・ウザいけどな

「誰がウザいですって!？」

「おっと、口に出してたか!？」

「つて、本当にそう思ってたんですか!？」

「つ、射命丸お前! 鎌をかけやがったな!？」

「鎌なんてかけてませんよ!! 魔理沙さん、貴女は確かに口には出していませんでしたけどねえ、顔に顔に出てたんですよ!!!」

・・・全くカーカーとやかましい烏天狗だぜ

「・・・やかましいとか思ってますよね、また顔に出ていますよ!!」

「おつ、正解だぜ、凄いなお前、超能力か?」

「魔理沙さんがわかりやすすぎるだけですよおおおおおおつ!!!」

「はいはい、それくらいで辞めにしなさい、魔理沙も文も」

咲夜が私達を止める

「まあ、そうだなまだまだ妖怪達は湧いてきやがるからな」

射命丸が参戦してから数十分後、私の身体に異常が起こった

「これ、一体何時になったら打ち止めになるんですかねえー?」

「せめて、もう少し人手があればいいんだけど……おっととと」

私は倒れそうになって、ふらついた

「ちよつ、魔理沙さん!?!ふらついてますよ!?!大丈夫ですか!?!」

「……大丈夫だぜ」

「魔理沙は少し休んだ方がいいわね、魔理沙、貴女は人里の警備で寝てないのでしょう?」

「けど、魔理沙が抜けるのは戦力的に不味いぞ」

人里の逆側で妖怪を迎撃していた妹紅が言う

「妹紅さん……」

「情けないが、私や咲夜も消耗している……」

だから、ここで魔理沙が抜けるのは厳しい」

「くそつ!せめて、せめてもう一人!戦力があれば!」

「よう、魔理沙!呼んだか!」

そこには、久しぶりに会う人間がいた

—————

時は少し戻り、幻想郷上空——

僕、日下部真言は全速力で人里に向かっていた

人里が見えるようになるほど近づいてきた時、相棒が話しかけてきた

〈おっと、相棒、もうすぐ人里に着くがどうする?〉

どうするって?

〈今、人里の四方から妖怪達が攻めてきてる、それをどうやって迎撃するかって話だよ〉
どうやってって、そりゃ、お前のあの七つのなんとかスペカで……

〈七つの大罪スペカな、ああ、言ってなかったっけか……あれ全部近距離戦用なんだよ〉

え、マジ!?

〈マジマジ〉

使えないじゃん!?

〈だから聞いたんだよ、どうすんのって〉

……どうしよう?・

〈はあ、新しくスペカ作ればいいだろ?あんなに映姫様から貰ったんだからよ〉

おお、そうか!

僕は懐から白紙のスペルカードの束を取り出した

映姫様が「能力が変わり、今までのスペルカードは使えなくなるでしょうから」って
言ってくれたんだ

〈・・・相棒はどつか抜けてるよな、まあそれが良さなんだろうけどさ〉

うっせ、で、どんなスペカにしようか？

〈それくらい自分で考えろよ〉

僕は腰抜けだから（グノ・ω・ゝ）ムリムリ

〈おい！まだ俺が腰抜けって言った事根に持ってやがんのか!〉

っーん

〈はいはい！わかったよ！じゃあ、こんなんどうだ？〉

おお！いいね！採用！

〈俺がどんな意見出しても採用したんだろ、どうせ・・・〉

「よっしゃ！行くぜえ！『暴力』『圧倒的な力による地殻変動』!!!」

僕は人里に着くと即座にスペカを発動させた

僕が自分の拳を地面に叩きつける

すると、人里の四方の地面が隆起し、人里を周囲をぐるっと覆う巨大な土の壁が出来

上がった（進〇の巨人をイメージして頂ければ）

・・・ふう、これで飛べない妖怪は人里に入って来れないな

「よお、真言、久しぶりだなとつとつと」

魔理沙が話しかけてきた、おいおい、ふらついてるぞ

「おっと、魔理沙、大丈夫か？」

僕は慌てて魔理沙を抱きかかえる

「わ、わりいな真言……」

「良いってことよ、待たせて悪かったな」

〈流石！相棒！素で女性に優しい！この天然ジゴロが！キマシタワ！〉

黙れ、相棒、茶化すな

「なんかお前、変わったな」

魔理沙が言う

「頼もしくなったぜ」

「ああ、もう逃げるのはやめたんだ」

「……そうか、じゃあ、後は任せませ……」

そう言うのと、身体を僕に預けて目を閉じる魔理沙

「お、おい！魔理沙!?!……なんだ寝てるだけか」

すー、すー、と寝息が聞こえてくる

「魔理沙は私が預かるわ」

「うおっとおっ!?!」

突然、メイドさんが現れた!?!

幻想郷のメイドさんは瞬間移動が出来るのか!?

「いや、相棒あれは違う、瞬間移動じゃなくて時間停止だ」

「へーそんな便利な能力もあるのか」

「お前の能力も相当だがな」

「お前と俺のどろ？」

「ああ」

相棒とコントをしてる間にも会話は進んでいく

「私の名前は十六夜咲夜、お嬢様のメイドです」

「僕は日下部真言、人間です」

「お嬢様のメイド……?」

凄い疑問が湧いてくるフレーズだけど、有無を言わせない様子なので突っ込まないで

おく

すると

「真言ー！ちよつとあんた早過ぎるのよ！」

「真言殿と、咲夜殿ですか」

「二人が飛んできた」

「よお、アリスに妖夢さん」

「よお、じゃないわよ！なに勝手に突っ走っていつちやって！」

「悪かった、人里を救うために仕方なかったんだ」

言い終わると、

「おいおい、人間、まだ人里は救えてないぞ？」

白髪で掌に炎を纏った女性が話しかけてくる

「私は藤原妹紅、妹紅でいい、よろしくな」

「僕は日下部真言、よろしく」

握手をする、も、妹紅姐さん……その掌に炎を纏いながら握手ですか!?——あれ？熱くない……なんだこの炎は……?」

「それは恐らく妖怪にしか効かない炎だな、陰陽術つてやつだ」

……なるほど、彼女は陰陽師なのですな

「まあ、そういうことだろう」

「さてと、射命丸だけに任せるのも可哀想だしな、真言が作ってくれた壁のお陰で一息つけそうだ、人手も増えたしな」

「とりあえず、壁の中にいる妖怪達を全滅させればいいのですね」

妖夢さんが二刀を抜き放つ

「私は人間の治療をするわ、行くわよ！上海！蓬莱！」

「シャンハイ」「ホラーイ」

アリスと人形達は人間の治療を始める

「じゃあ、僕は空から攻めてくる妖怪を迎撃するよ」

「ああ、任せた」

会話を終えると僕は空を飛び、壁に着地した

その瞬間、僕の頬を雲の拳が掠めた

「つあつぶねえ!？」

拳が飛んできた方向をみるとそこには、雲のおっさんと屁さんがいた

〈あれは雲は雲でも入道雲の妖怪だな〉

大入道の仲間みたいなものか

〈まあ、そんなもんでいいだろ、相手の正体なんてどうでもいい、やる事は一つだろ?〉

ああ、そうだな……

「ぶちのめす!!!」

そう叫び拳を握りふりかぶる僕——

「ちよつと待ってください!!」

を止める女性の声

「ふえっ?」

僕の拳は思いつきり空振りした……恥ずかしい……

「これは、私達の問題です! 貴方の手を借りるわけにはいきません!」

僕を止めた女性——金髪に紫のグラデーシヨンの入ったウェーブヘアの女性が言う

……こういうときは、とりあえず——挨拶しとくか

「えっと、僕は日下部真言といいます、貴女は?」

「私は聖白蓮、人里近くの命蓮寺で僧侶をしています」

ああ、僧侶さんだったか、だから争いは好まない感じなんだろうな、それなら僕を止めた理由には納得がいくなあ

へククク、年上のお姉さん相手に敬語になっちゃう相棒……こんな意外な弱点があったとは

そんなことねえよ! ただ、敬語を使わなきゃいけないような雰囲気を出してんだよ、あの人は!

〈そういうことにしようかねー〉

そういうことなんだよ!!!

相棒の所為で話が逸れた……戻そう

「ですが、白蓮さん！あの尼さんと入道雲は正気を失っています！ですから一旦大人しくさせる必要があると思いますけど……」

「それは分かっています、ですから……私が力で無理矢理止めます」

流石！幻想郷！僧侶さんも普通じゃなかったよ!!

僕が呆れて固まっていると

『転覆【沈没アンカー】』

〈ちっ！相棒！避ける!!〉

相棒の声で、動き出す、けれど

僕を襲う巨大すぎる錨

……くそっ！これは避けられない!?

ならー！おい、相棒！消すやつ頼む！

〈消すやつって……分かったよ〉

相棒がそう言うのと、僕の手元にスペカが現れる

『拒絶【分かり合えない思い】』

僕はすぐさま右手で錨を殴りつける、すると錨はスペカの効果で消えた

僕が錨を消した後、白蓮さんが悲しげな声をあげる

「村紗!?!貴女まで!?!」

ムラサと呼ばれた僕に巨大な錨を放ってきた短髪のセーラー服の少女と尼さんと入道は白蓮さんの知り合いらしいな

「白蓮さん、僕が尼さんと入道の相手をしますから、貴女はムラサ・？ちゃんの相手をお願います」

僕は提案する

「ですから！貴方の手を借りるわけには！しかも人間の貴方に、このままでは、人間の妖怪に対する印象が悪くなってしまいます！」

ああ、なるほど、この人は人間と妖怪の共存を目指しているんだな・・・

「だったら、尚更です！このままこの人達に人里を襲われたら人々と妖怪達との溝はもっと深くなります!!」

「そしてなにより、僕、妖怪嫌いじゃないですから」

「迫り来る雲の拳を躲す、人が話してんに邪魔すんなよ！
そう言うのと、僕は僕を狙う雲の拳に自分の拳を合わせる

拮抗する二つの力」へえ、この入道中々できるじゃないか
僕はより力を込めて入道の拳を弾き返す

「へほう、あの入道パンチ力だけなら相棒と渡り合えるくらいあるな、だけど、それだけだ——何も驚異じゃない」

いやいや、驚異ですよ!?

〈じゃあ、このスペカを使いな、強化系のスペカだ〉

相棒がそう言うのと、僕の手元にスペカが現れる

おつ、この黒いスペカは・・・七つの大宝スペカじゃないか!?

〈七つの大罪だよ・・・良い加減覚えてくれ、スペカが可哀想だ〉

ごめんね、てへぺろ☆

早速、使うよ!

『傲慢「力有る故に生まれる思い上がり」』

スペカを発動した瞬間、僕の右拳に紫色の炎が灯った

相棒、この炎は一体?

〈これは傲慢・・・この炎が灯った身体の部分が強化されるスペルカードだ〉

確かに、心なしか右手が軽い気がする・・・

僕が右手をグーパーグーパーして感触を確認していると

容赦無い雲の拳が僕を襲った

突然の出来事だったので力をしっかり込めることが出来ないまま奴の拳に自分の拳を合わせてしまった

くう、条件反射って怖い・・・

僕と入道の二つの拳がぶつかった瞬間———拳が砕けた———砕けたのは入道の方の拳だった

あ、ああ、相棒!?!これ凄過ぎだろ!?!

〈炎が灯ってる場所、つまり、一箇所しか強化出来ないのが欠点だな〉
欠点込みでも十分強すぎる性能だよ!!

〈っ、おい!相棒見ろ!〉

なんだよ、つてあれ!?

砕けて霧散した入道の拳は周りの雲を集めて再構築されていた

「うおい!それズルくね!?!」

思わず声に出してしまった

〈まあ、雲の妖怪だから予想はしてたけどな〉

ど、どどど、どうしよう

〈見るからに、あの女が入道を操ってると思うな〉

．．．つまり、あの尼さんを倒せば入道も止まるってこと?!

〈That's right〉

よーし、じゃあ脚力強化で一気に距離を詰めるぜ!

〈あ、ちよっ、待て!!〉

さあ！続くぞ！アンカーを寄越せ！

『湊符「フアントムシップハーバー」』

私には通常弾幕は通じないことが分かったのか、村紗はスペルカードを発動させる私に大量の錨が襲いかかる

・・・これを全て躲すことは私の機動力では不可能ですね

私もスペルカードを発動しようとしたロー『魔法【紫雲のオー・・・】』

しかし、私の脳内に傷付く彼女の姿のイメージが浮かんだロー私はスペルカードを発動するのを止めた

・・・私には、彼女を傷付ける事はローロー出来ない・・・

私はもう躲すことすらやめた

・・・私を封印から出してくれた恩人の一人の手で死ぬるのならそれで、私は満足です・・・

けど、せめて最後に村紗の声だけでも聞きたかったな・・・

「聖ー、聖ー」

そんな私の願いが届いたのか私の耳に村紗の声が聞こえた、ああ、幻聴でも構わない、この愛らしい声が聞けただけでロー私は・・・

「やーい、やーい、聖の年増ー、BBAAー」

「『魔法【紫雲のオーメン】』!!!」

私は即座にスペルカードを発動させる

ぶつかり合う村紗の錨と私の魔法————それは、お互いのスペルカードの制限時間が終わる迄続いた

「うふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ、村紗あああああああああああああああああ!!!」

—————

どうも！正体不明の妖怪、封獣ぬえだよ！

なんで暴走してないのか？正体不明だからよ!!文句ある!?

ちなみに、私は私の『【正体を判らなくする】程度の能力』を使っているので、聖と村紗に私の姿は見えていません、まる

さて、皆さんにさっき起こったことを話すわ

聖に村紗の声真似してBBAって言ったら聖がキレた

『超人【聖白蓮】!!!』

・・・あ、村紗死んだかも

超高速で移動する聖、あれ？いつもより速くない？下手すれば幻想郷最速の烏天狗く

らい速いんじゃない!?

・・・ゴメン、村紗、そしてもう聖を怒らせるようなことはやめよう

村紗は必死に通常弾幕を放つけれど超高速の聖には擦りもしない

通常弾幕は全く聖に通用しないことに気付いたのか村紗はスペルカードを懐から取り出す

「あら〜小細工はいけませんよ〜」

それに対して聖は村紗に一瞬で接近し、村紗の腕ごとスペルカードを握り潰した

「ゴキリ」という鈍い音と共に潰れる村紗の腕、これ腕の骨が粉みたいになってるんじゃないの・・・う、うわあ〜聖やり過ぎ・・・

あ、あれ!?村紗泣いてる!?!まさかさっきの腕潰しで意識戻ったの!?!

「うふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ」

しかし、聖は容赦をしない

右ストレート、左フック、右ボデー、左アッパー・・・次々繰り出される聖のラッシュ

こ、このままじゃ村紗が死んじゃう!?!

そう思った私は村紗に向かって突進して、村紗に体当たりをする

まあ、考えても仕方ないわね

「鈴仙さーん、鈴仙さーん」

私は村紗を抱えて人間を治療している鈴仙さんに話し掛ける

「なによ？ 聖つて、わあ!!」

む、村紗!? ボロボロじゃない!?」

「早く治療をお願いします!!」

私は頭を下げて村紗をベットに横にさせる

「分かったわ! ちょっと、人形遣い、慧音、人間達の治療は任せるわよ!」

「一体、どうしたのよ?」

人形遣いのアリスさんと人里の守護者の慧音さんが駆けつけてくる

「急患よ! 人間じゃないけど!」

「うわ、確かにこれは酷い怪我だ、一体誰にやられたんだ?」

「すいません、私が目を逸らしてる間に・・・」

「・・・そうか」

「では、私は妖怪の迎撃に戻りますので」

「ああ、頼むよ」

今も、上空で日下部さんは戦っている

妖怪を嫌いじゃないって言ってくれた彼の手伝いをしなければならぬ

—————

いいい！皆さんこんにちは！楽園の素敵な巫女の博麗霊夢です☆

私は今、なんと！守矢神社にいます！同じ巫女のミラクル☆さなえちゃんと一緒に先

程起こった地震と妖怪達に起こった異変についての究明をしています！！

……ちよつと早苗？こうすれば人気がでるって本当？信じられないんだけど

……ちよつと諏訪子！何笑ってんのよ！

はあ、やつぱ、やめるわ

慣れないことはしないに限るわね

肩が凝るわ

「で、さっきの話を続きだけけれど」

「なんの話だったっけ？」

諏訪子は本当にさっきまでの話を忘れたかのような態度をとる……巫山戯た神ね

「まったく、諏訪子様つたら〜」

「えへへ、ごめん早苗〜」

早苗は神に甘過ぎるのよ!!だからこういう駄神が幻想郷に溢れかえるのよ!!

「だから、今起こってる異変の話よ!!」

私は二人を怒鳴りつける

「あーうー、でも霊夢はお得意の勘でもう犯人は分かってるんじゃないの?」

「え!! 霊夢さん犯人分かっちゃってるんですか!？」

はあ、無駄に目敏い神ね、あんただって分かってるでしょうに

・・・はあ、めんどくさいわね、私は謎を解くより、武力行使で無理矢理解決する方が得意なのよ

私は溜息を吐き、早苗に私の導き出した答えを説明する

「えっとね、まず、犯人は人間よ、で能力持ち、まあ詳しい名前はわかんないけど『妖怪を操る』程度の能力』みたいな能力よ、きつと」

「なるほど、ですがどうして人間だと分かるのですか? そういう能力を持った妖怪の可能性もあるんじゃないですか?」

早苗が私の説明に反論してくる・・・はあ、めんどくさいわね

「根拠は、異変が本格的に発生したのに姿を表す気配が一切しないことよ」

「え?」

「つまり、犯人が妖怪なら『私がやりましたー!』って言ってドヤ顔するでしょ? それが無いってことは人間が犯人よ」

「あと、妖怪が妖怪を操る能力って矛盾してるしね〜」

馱神が私の説明に後付けをする・・・分かってるならあんたが説明しなさいよ

「で、妖怪達が失踪したのは、その人間が紫を操っているからよ」

「しかし、紫さん程の実力者がそんな簡単に操られたりしますかね?」

「仲が良かったんじゃない? 紫と、だから紫も油断して操られてしまった」

ふうと息を吐く

「けれど、紫だつてただで操られたわけじゃなかったわ

前、外来人の持つてたジャムを舐めた時、紫の術を感じたわ、おそらく、自分の術を無効にする術と異変の元凶の能力を無効にする術ね」

「なら、その外来人のジャムを全ての妖怪に舐めさせれば異変解決じゃないですか!」

・・・はあ、早苗あんたね

「早苗・・・」

「な、なんですか? 諏訪子様? そんな呆れたような顔で私を見て」

馱神も流石に呆れているみたいね

「だから、早苗、あんたは一体この幻想郷に何人いると思ってるの・・・全部にジャムを舐めさせてたらその間に人里どころか幻想郷が減んでしまうわよ」

「確かにそうですね・・・名案だと思っただんですが」

私は小声で諏訪子に耳打ちする

「あんた、ちゃんと早苗を教育してるの？」

「してるよ〜でもあれが早苗だし、早苗の良さでもあるからさ〜」

「??どうしたんですか？お二人とも？ナイショの話ですか、ずるいです！私も仲間に入れてくださいよお！」

「あーうー、私、もうちよつと早苗に成長して欲しいなと思ったよ」

「同感ね、私もよ」

「??」

「さて、そろそろ人里に向かいましょうか」

私は立ち上がって言う

「霊夢さん、身体は大丈夫なんですか？」

「本調子には程遠いけど、まあ、大丈夫よ、時間も迫ってるしね」

「何の時間ですか？」

「恐らく、強力な妖怪・・・失踪した妖怪達が人里を襲い始めるわ」

「あーうー、それは穏やかじゃないね」

「では、諏訪子様いつてきます」

「留守番は任せてよ〜」

「ほら、早苗、行くわよ」

「ああ、ちよ、ちよつと、霊夢さん！待ってくださいいよお〜！」

私と早苗は人里目指して飛び立って行った

「はっ！一体私はどれくらい寝ていたんだ!？」

私——霧雨魔理沙は目を覚ました

「……ああ、私は半日くらい寝ていたみたいだな、もう外が真っ暗だぜ

「ああ、魔理沙、目を覚ましたのね」

人間の治療を終えた鈴仙が私に駆け寄ってくる

「おお、鈴仙、人里は大丈夫なのぜ？」

「ええ、聖と真言さんが妖怪を迎撃してくれたおかげで今は一応、落ち着いているわ」

「そうか、なら安心だな」

私がそう言った直後、

人里が炎に包まれた

『爆符【メガフレア】』

僕、日下部真言が妖怪達を迎撃していると、不意に聞こえるスペルカード宣言、そし

て、白のブラウスに緑のスカートを着て黒い鳥の翼を持った少女の右腕の筒から巨大な炎の弾幕が放たれる

そして、その弾幕が人里を襲い、人里は炎に包まれた

……僕はその弾幕の前に何も出来なかった

〈相棒！腑抜けてる場合じゃねえぞ！〉

でも……

〈こうしてる間にも燃え広がっちゃうぞ！〉

「ちつくしよおおおおおおお！」

僕は叫ぶ、僕の能力じゃ炎を消すことは出来ない……

誰でもいい、神でも仏でも悪魔でも、頼む!!炎を消してくれ!!!

すると、人里に水が降り注いだ

「はい！貴方のその願いを神は聞き届けました、風祝だけどね☆

どうも、東風谷早苗です！」

……なんだかおちやらけた神様が現れた

—————

「うわあ！霊夢さん霊夢さん！人里が燃えてますよ!!」

「そうね」

「やばいですよ！やばいですよ！」

「そうね」

「・・・霊夢さん、本当にやばいと思ってますか？」

「そうね」

「霊夢さん！めんどくさがってないでちゃんと私の話を聞いてくださいよ!!」

「だったら、あんたがやりなさいよ」

「ううゝ分かりました、東風谷早苗、頑張ってください!!」

『開海【モーゼの奇跡】』

うにゆううう、続くよー

第二十五話、凶つたなナズーリン

どうも！日下部真言です！おちやらけ風祝の東風谷早苗さんの力で人里の火事は収まり、最悪の事態は回避できました！……実に危なかったです

へいや、相棒、どうやら危機は去ってないみたいだぜ

……どうということだ？

へさっきの炎の弾幕を放った烏レベルの妖力を持った妖怪が二人……片方は妖怪じゃねえ!!神だ!〜

神だつて!?

神という言葉聞いた僕は早苗さんの方に視線を向けた

「か、神奈子様……」

彼女の表情は驚愕で青く染まっていた

「星!?!星なのですか!?!」

聞こえてくるのは白蓮さんの叫び声

……また、白蓮さんの知り合いですか、妖怪の知り合い多いっすね

「ちよつと!!早苗さん!?!白蓮さん!?!しっかりして下さいよ!!」

僕は二人に櫛を飛ばす

「はっ!?すみません!」

「すみません!日下部さん」

「まあ、失踪した知り合いに会って驚くのは分かりますが、お二人にはご自身の知り合いの相手をしてもらうことでよろしいですか?」

「ええ、構いません」

「分かりました」

〈一番厄介な奴を選んだな、相棒〉

えっ!?

〈あの鳥は只の鳥の妖怪じゃねえ、八咫鳥の力を持つてる〉

八咫鳥ってあの有名な……

〈そうだ、その大妖怪の八咫鳥だ、そしてその力は、太陽神の力……分かりやすく言えば、核融合さ〉

か、核融合!?あの、核ですか!?

や、ヤバ過ぎじゃないですか!?

〈ああ、やばいな、下手に突っ込んだら一瞬で消し炭だろうな〉

……ひ、ひええええええ

〈まあ、言い切った手前、今更撤回も出来ないけどな、なんとかなるだろ〉

お前のその自信は一体何処から来るんだよ……

〈相棒！来るぞ！〉

相棒のそのセリフの後に八咫鳥はスペルカードを発動させた

『核熱【核反応制御不能】』

その直後、八咫鳥は右腕を天高く掲げると、その腕から巨大な太陽が発生した

——不味い、このままじゃ人里に被害が!?

〈相棒、このスペルカードを使い！速く！〉

分かった！

『色欲【恋人同士は嘘まみれ】』

僕は相棒に言われた通り、スペルカードを発動させた——けど、あれ？何も起こらないぞ？

と思つたら、効果は八咫鳥の方に現れた、彼女は急に僕に背を向けると弾幕を放つた
〈これは色欲のスペルカード……効果は幻覚だ〉

なるほど、だから八咫鳥は僕と真逆の方向に弾幕を放つたわけか……

〈とりあえず、今のうちに人里から離れるんだ〉

……オツケー

僕は人里から離れた湖の上空に来ていた——確か、名前は霧の湖だったかな、まあ、上空だから霧も何も無いんだけどな!!

そこで改めて僕は八咫鳥と対峙する——いや、太陽と対峙する……どう考えてもこっちに分が悪すぎると思んですけど、太陽に勝てるわけ無いだろ、常識的に考えて〈所詮、人工太陽なんだ、ホンモノじゃねえよ〉

十分脅威なんですけども

〈まあ、当たって砕けろ!〉

砕けたらお終いなんですけどねえー

……前から思ってたんだけどさ

〈なんだ?〉

『【思いを力に変える】程度の能力』って今発動してんの?

〈してるよ〉

全然前と変わってない気がするんだけど、前より強いスペカが使える程度の変化しか無いんだけど

〈思いが足りないんだよ、劇的に力に変えられるような思いが〉

思いが足りない……?

「知ってるか？怒りや憎しみの方が思いの力が強いんだよ、だから、今の相棒じゃ自分の意志で力を引き出すのは無理だな、スペカで力の一部を引き出すくらいしか出来ない」

つまり、本当に強いスペカが使えるようになっただけじゃないですか、やだー

「まあ、必要になつたら勝手に出来るようになるさ」

「まあ、とりあえず、弾幕を全部躲して八咫鳥を殴りつければ良いんだろ」

「まあ、近距離用のスペカしか無いからな」

「よし、考えるのはやめ！」

僕は開き直って八咫鳥に向かって全力で接近する

相手の通常弾幕をギリギリで回避しつつ、近づいていく

僕の腕が八咫鳥にもうすぐ届くところまで僕が接近した時、

『焰星【十凶星】』

八咫鳥のスペルカードの発動、そして彼女を中心に生まれる十個の小さな太陽

咄嗟の判断で距離をとる

しかし、完全に避けきれず、太陽の一つが僕に掠った———熱い！熱い！熱い！！！！

僕が今まで生きてきた中で感じたことのない熱さだった、熱いというより最早これは痛い！！死ぬ！死ぬ！死ぬ！死ぬ！

離れたら巨大な太陽の弾幕、近づいたら小さな太陽の弾幕……おい、どうやって

倒せばいいんだよ……

〈相棒、服燃えてるぞ〉

うおおおお!

学ランを脱ぎ捨てる僕

……魔理沙のブレイジングスターを食らっても、妖夢さんの剣を食らっても、幽香さんに吹っ飛ばされても、生き残った僕の学ランがああああああああああ
ああ!!!

「許せん」

〈相棒の怒りの沸点、わけわからないぜ〉

「くそ! せめてあの太陽に触れる事が出来れば!!」

〈それくらいなら出来るぞ〉

……マジで?!

〈マジマジ〉

早く言えよおおおおおおおおおおおおお!!

〈悪かったな、ほらよ〉

スペルカードが現れる、また七つのスペカか……

『怠惰は自我を護るために』

スペカを発動させると僕の右手に黒い手袋状の防具——いわゆるガントレットが装着された

〈怠惰は防具を装着するスペルカードだ、それで人工太陽程度なら余裕で触れるな〉
……思っただけで、このガントレット部分以外で触れたらどうなる？

〈ガントレットの部分だけ残して他は全部☆消し炭〉

……ひえええ

しかし、やる事は何もさつきまでと変わらない、接近して殴る、それだけだ

八咫鳥の通常弾幕を躲してどんどん近づいていく

通常弾幕は人工太陽に比べると全然熱く無いし、避けやすい

さらに、八咫鳥の機動力が僕よりも大分低いため、弾幕が何処から発射されるのか分かりやすく、予測もしやすいのだ

難無く接近し、八咫鳥に向けて拳を突き出す

八咫鳥はそれを大きくバックステップで回避する

くそっ！只突っ込むだけじゃ、簡単に回避されてしまう！

どうやって攻撃を当てるかについて考えていると——

〈おい！相棒！構えろ！来るぞ！〉

『ヘルズトカマク』

八咫鳥がスペルカードを発動させる——幻想郷の夜に二つの巨大な太陽が出現した——
 二つ!? 二つ!? そ、そそそそ、想定外! 想定外! 想定外の事態です! あれえ? 作れる太陽は一つだけじゃないんですか!? 一つだけだったら、ガントレットで受けて向きを変えて躲すつてことが出来たけど、二つの場合、片方を受け止めてる間にもう片方で、KE☆SHI☆ZU☆MIにされるのは確定的に明らか!!!

詰んだ、僕の人生終了のお知らせ……

〈落ち着け、落ち着けよ相棒!〉

……く、こういう時の為に遺書を書いておくべきだったぜ……

〈落ち着けて! 片方しか触れないのなら、片方だけ触って両方なんとかすればいいんだよ!!〉

へっ?

〈あー、だからもー、とりあえずこのスペルカードを使い! で、後は感覚でなんとかしろ!〉

スペカが僕の手元に現れる

『憤怒【超・衝・撃】』

スペルカードを発動すると、右拳の一点に身体中の力が集まる感覚——なるほど、

これはこういうことか!!

〈憤怒のスペルカードの効果は強力な近接攻撃だ〉

それは、例えるならビリヤード・・・片方の太陽を殴りつけて打ち出し、もう片方と衝突させて両方とも向きを変える・・・これで片方しか触れなくても、なんとかこの二つの太陽を攻略できる!!

けれど、打ち出す力が弱過ぎると向きは変わらず、死、強過ぎると打ち出す前に打ち出そうとしている方の太陽が砕け散ってもう片方の太陽の向きを変えられず、死・・・
〈安心しろ、太陽だから砕け散ったりはしないって、だから全力でやれ〉

・・・凄く嫌な予感がするんですけど

〈死んだら骨は拾ってやる、拾えないけど〉

「うわああああ、どうとでもなれ!当たって砕けろこのやろおおおおおおおおお
おおおおお!!!」

僕は全力で右拳を片方の太陽に打ち付ける、すると太陽は僕の思惑通りもう片方の太陽にぶつかった、が、僕の思惑通りだったのはそこまでだった

何故なら、二つの太陽がぶつかった瞬間、大爆発が起こったからだ

ドカーン!!!と鼓膜が破れるかと思った程の大爆音・・・死ぬかと思つた、ガチで、霊力で少しでも防御力強化しといて良かった・・・

〈なんとか生きてたな、相棒〉

なんとかじゃねーよ！軽く死ぬところだったわ！

〈まあ、あれは想定外だった、すまん、で、不幸中の幸いなことに、さっきの爆発は八咫鳥も巻き込まれてたぞ〉

八咫鳥の方に目を向けると、確かに八咫鳥もさっきの爆発に巻き込まれたらしく、明らかにダメージを受けている様子だった

これは、後一押しでいけるか！

僕はここぞとばかりに接近する——その瞬間、八咫鳥がニヤリと笑った

『「サブタレイニアンサン」』

スペルカードが発動した直後、巨大な炎が八咫鳥を覆い、球体になる——つまり、彼女は太陽になったのだ

あ、危なかった・・・彼女のニヤリを見逃していたら当たっていた

しかし、それで終わらないのが、太陽神、八咫鳥——彼女は僕を吸い寄せ始めたのだ太陽となった自分にぶつける為

う、うおおおおおおおおお！なんて吸引力だよ！！ダ○ソンかよ!!!

〈こいつをなんとかするには、太陽ごと中の八咫鳥をぶちのめすしか無いようだな〉

た、頼む相棒！何かスペルカードを！！

〈無理だ〉

ええ!?!なら、新しいスペルカードのアイデアを!!

〈無理だ〉

どうして!?!

〈パワーが足りないんだよ、俺がお前に渡すスペルカードは元々は俺のだから、お前には完全には合わないだろうし、今のお前なら自分の手で一番自分に合う強力なスペカを創り出せるはずだ〉

そんなこと……

〈できる!!逆に出来なかったら人里は火の海になるぞ!!傷付いた魔理沙に、長期間の妖怪の迎撃や人間の治療で疲労困憊のアリス、妖夢、咲夜、妹紅、白蓮、慧音にこいつを倒せるのか!?!〉

確かに……俺が、俺がやらなきゃ……

〈そうだ、白紙のスペルカードを手に持ち目を閉じろ〉

言われた通りに目を閉じる

〈集中して、イメージしろ、お前が欲しい力のイメージを〉

欲しい力のイメージ……そうだ、僕は、力が欲しい、皆を守れるような圧倒的な

力が……

すると、身体の何処からか力が溢れてくる、ああ、抑えられない!!

僕は目を開けると手元にある新しいスペルカードを発動する!!

『思想【総てを穿つ一筋の閃光】』

僕は右手で銃を作り、人差し指を太陽の中心に向ける——そして、その指先から放たれる圧倒的で、全てを包み込むような純白の光、それはまるで月の光のようだった

僕の放った月の光は八咫鳥の作った太陽を包み込み、消し去った

〈圧倒的だけど、優しいカー——相棒らしい力だな〉

「ふう、なんとか、終わったか……」

〈ああ、お疲れ様、だけどまだ異変は終わってねえぞ〉

「分かってる、だから人里に戻らないとな……ああ、あの子をそのままにしといや、やっぱ駄目だよな」

僕は目を回して倒れている、八咫鳥の少女を担いで、人里を目指して飛んで行く

〈やっぱり、相棒はお人好しだな、殺されかけた相手なのによ〉

ん？普通だろ？

〈それを普通だと思ってるのが……まあ、いいや〉

……何が言いたいんだ？

〈気にすんなよ、たいして重要じゃねえ〉

・・・・ああ、疲れた、流石に倒れそうだ

「おい、アリス」

私を呼ぶ声

「あら、真言、どうしたの？」

「この子の治療を頼む」

と言って真言は私に地底の地霊殿のさとり妖怪のペットの鳥——霊鳥路空を渡す

・・・確か、この妖怪も失踪していた妖怪の一匹よね

目を覚ましたら襲ってきたりしないわよね・・・

と私が考え事をしてしていると、ドサツ、という音と共に地面に倒れ込む真言——ちよ、

あんたの方が治療が必要なんじゃない!?

時間は戻りに戻って、真言が空を連れて霧の湖に向かった直後の人里上空

さてさて、面白くなってきた、面白くなってきた!

どうも、皆、お久しぶり! 封獣ぬえだよ!

で、今は金と黒が混ざったショートヘアの毘沙門天代理——寅丸星と我等が、命蓮寺の超人僧侶——聖白蓮の対決が始まるうとしています!!

いやー、どうも、実況の封獣ぬえです!!

今はお互い相手の出方を見ているといった感じでしょうか、お互い一步も動かず、相手を観察しています

おーっと、最初に動いたのは以外にも聖選手だー! 身体の向きは変えず、真横にステップして、弾幕を——「聖ー! 聖ー!」

おや? 誰かが聖に話しかけているぞ?

あれは、ナズーリン!?

「おお、ナズーリンどうしたのですか? ここは、危険です!」

「……聖、ご主人の相手は私に任せて貰えないだろうか?」

えっ!? ナズーリン何言ってるの!?

「しかし……悪いですが、貴女の

戦闘能力では、星の相手にならないと思いますけど……」

「それは分かっている、だけど、私には策がある」

「ですが……」

「後、もう一つ理由がある、もし、聖がご主人と戦うとすると、人里の上空を守る人手が

足りなくなるのだ」

「確かに……」

「だから、任せて貰えないだろうか？」

「……分かりました、では、お願いします」

おおつとー！では、対戦カードが変わりましたー！聖VS星からナズーリンVS星の主従対決に変わりましたー！

圧倒的に星が有利な対決に見えますが、ナズーリンの言う『策』というのも気になります、その内容がこの対決のキーポイントになるのは確実でしょう！！

「おい、ぬえ、封獣ぬえ」

おつと、ナズーリン選手が誰かを呼んでいます！一体誰を……え!?私!?

「そこにいるのは分かっているぞ、ぬえ」

ええー!!まさかナズーリン、私の正体不明を見破る道具でも見つけちゃったの!?

「私はいぬえ」

「いるじゃないか」

「どうして、私がここにいることが分かるんだよお」

私は能力を解除して姿を現す

「村紗に聞いた」

「……まさか」

「お前が聖に悪口を言ったことも知っているぞ」

「や、やめてええええええええええええ、聖にバラすのだけはやめてええええええええええ、聖にバラバラにされるうううううううううう、なんでもするからああああああああああ、それだけはああああああああああ!!!」

私は涙を流しながら、ナズーリンに縋り付く……まだ、まだシニタクナーイ!!!シニタクナーイ!!!

「なんでもすると言ったな」

「えっ!?!」

「言ったな?」

「はい」

「なら、私の代わりにご主人様の相手をしてもらおう」

「ええーっ!!」

対戦カードは変わりに変わり、私VS星になった

「まさか、ナズーリン、さつきまで言ってた策ってたまさか……」

「御察しの通り、君に全て押し付けることだよ」

「なあああああずうううううううううううううううううううううううう!!! 貴様!!! 凶ったな!!!」

はっはっはっはっはと笑いながら人里へ降りていくナズーリン、そして残された私と殺る気満々の毘沙門天・・・はあ、やるしかないか

私は星に向かって突進して行くのだった

続きは私より正体不明だね！

第二十六話、唯一の可能性

どうも！引き続きぬえだよ！皆、元気にしてた？私はね……ピンチだよだつてさ、星強いんだもん、伊達に毘沙門天代理してないねー

普段は物失くしたり、どこか抜けてる星だけど、暴走してる今は彼女の馬鹿みたいに高い戦闘力が存分に発揮されて強いつたらありやしない!!

私も星も同じ槍を使って戦うんだけど……槍の技術も星の方が断然上なのよね勝てぬえ、つてか、星の槍の方が私の槍より長いのよ！だから、リーチで負けるから、こっちの攻撃は当たらないのよ！

つまり、武田信玄の最強の騎馬隊も織田信長の長い槍♂に負けたんだよつてことよ！

近距離戦闘に私の勝機は無いね……距離をとって弾幕勝負しかないわ!!

『妖雲【平安のダーククラウド】』

スペルカードを発動させる

雷雲を思わせる黒雲が発生し、そこから弾幕が放たれる、私の得意技『平安のダーククラウド』よ！

．．．でも、星もスペルカードを．．．発動しない!?

『平安のダーククラウド』に直撃する星．．．なんで星はスペカを発動しないの!?

星は必死に服の懐を探している、なんだか慌てているように見える．．．まさか————スペルカード忘れたんかあああああ!!

お笑い芸人のようにずっとこける私

やっぱり暴走しても星は星だった!!

．．．はあ、こんなおつちよこちよいの星をスペカ使ってボコボコにしたら逆に私の器が小さいと思われるわね————よし、私もスペルカードを封印してやろう————私の決意に惚れた人は、拳手しなさい

私はスペルカードの束を星に見せつけるとそれを投げ捨て————るのはもったいないから、懐に入れ直————すのもカッコ悪いから

「聖———聖———ちよつと来て———!」

「はいはい、なんでしよう?」

「はい、これちよつと預かってて!」

「はい、お受け取りしました」

そう言うと、人里に戻っていく聖．．．ふう、これで私のイメージアップは間違いないね!

改めて私は槍を握り締めて星と対峙する

リーチではこつちが負けてるから星に勝つには、超接近戦しか無いわね!!

高速ステツプで星に近づくと、星は私を迎撃する為に槍を突き出すーふ、完璧にそれは読めていたわ!

身体を逸らして槍を回避する、見事に躲した!これで、私のリーチよ!

私は槍を星に突き出す!決まったー横薙ぎいいいいいい!!!

説明しよう!星は私の槍が届く前に自分の槍を横薙ぎ、私を吹っ飛ばしたくそう!くそう!

私のスピードじゃあ槍を一回躲しただけで槍が星に届く前に攻撃を食らってしまうわ!

私が吹っ飛ばされて体勢が整う前に星は私に通常弾幕を連射する

いて、いててて!?

モロに当たっちゃったよ!!

けど、今ので少し縛りが外れたわね

弾幕は弾幕でも通常弾幕はオツケーらしい・・・これが、この勝負での重要なファクターになるわね

このファクターで、勝つ為の道筋が見えた気がする

とは言っても、この勝利方法で勝利を得る為には条件があるわね・・・まあ、これしか勝ち目が無いのだから、全力でこの可能性に賭けるしかない!!

私は、星に向かって突進を繰り返す、さつきと同じように星は槍を突き出す私はそれを躲し、星の横薙ぎに吹っ飛ばされる、星の通常弾幕を受ける、星に向かって再び突進、星の槍を躲す、横薙ぎで吹っ飛び、通常弾幕を受ける、突進、槍を躲す、横薙ぎ、通常弾幕、突進、躲す、横薙ぎ、通常弾幕、突進、躲す、横薙ぎ、通常弾幕………何度も何度も同じことを繰り返す体力の続く限り

そして、私はボロボロになっていく………けれど、これで勝利条件を完全に満たした!!

「いくわよ!!」

私はそう吼えると性懲りも無く星に突進し、体力が残り少なくなっているので星の槍をしつかり躲すことが出来ずに私は真正面から槍に貫かれてしま………う………ように星には、見えている、

しかし、本当の私は星の真後ろに居た!!

「星、お前は………で終わりだな!!!」

星の後頭部に向けて槍を一閃!!!

これで、星に一発ノックダウン!!

私の勝ちだああああああああああああああ!! やったああああああああああああああ!!
ああああああ!!

私は大きくガッツポーズ

さて、皆さん、どうやって私は星の後ろに居たのかの種明かしをします

皆さんは私の能力『「正体を判らなくする」程度の能力』について正しくご存知でしょうか？

私の能力は物に不定形の『「正体不明の種」』を仕込んで、その仕込まれた物に対する周囲の認識を攪乱する能力

例えば、鳥に種を仕込んだとすると、その形状、音、匂いなど「鳥固有の情報」を奪われ、後には行動だけが残る、つまり、「飛んでいる」という行動要素だけが残り、見ている人はその要素だけで己の知識や先入観だけで勝手にその姿を補完し、その見た目が変わるといふ仕組みだ

で、今回私がしたことは、通常弾幕に種を仕込み、星に放ち、星の後ろに回り込んだ、それだけ

まあ、それをする為に何度も何度も何度も星に突進をして、星に『自分に飛んでくる物体Ⅱ私』という先入観を植え付けたのだ、だから星は自分に飛んでくる私の種付きの通常弾幕を私と判断し槍を突き出す、その隙に私は後ろに回り込む、後は槍で星に攻撃

して、私の勝ちいいいいいい!!

ああ、勝負も説明も疲れたあゝ

「聖く疲れたく寝るく」

「はあい、ぬえ、おやすみなさい」

—————

さて、またまた時は戻り

—————

人里を御柱が襲う、その御柱を操っているのは私——東風谷早苗の崇める神の柱——八坂神奈子様だ

人里を襲っているといっても身内なので、私は神奈子様に攻撃をすることが出来ない——という常識に囚われていますね! 皆さん!

私、東風谷早苗はたとえ身内だとしても、人間に危害を加える者を決して許したりはしません!! 守矢神社の信仰が減ってしまいますからね!!!

では、

「神奈子様! 申し訳ありませんが、無理矢理止めさせていただきます!!」

私は神奈子様に戻つ直ぐ突進し、お祓い棒で殴りかかる——しかし、神奈子様はお祓い棒片手で受け止め、私を逆の腕で殴り、吹き飛ばす

「きゃああああああ!!」

吹き飛ばされる私・・・あ、あれええええええええええ？神奈子様ってこんなに強かったんですかあ!?!私の想像の三倍くらい強いんですけど!?!

・・・どうしましょう、どうしましょう、どうしましょう、どうしましょう!?!

普通に考えれば簡単にわかる。

こんなつええヤツには勝てねってことぐらい・・・

お、落ち着きなさい、落ち着くのを東風谷早苗!!クールに、K O O Lになるのよ!!!

ここ、こうなったら

『奇跡【白昼の客星】!!!』

私がスペルカードを発動させると、神奈子様に向かって星明かりを思わせるレーザーが放たれる

『神祭【エクスパンデッド・オンバシラ】』

神奈子様はスペルカードを発動させ、彼女のオンバシラが私のレーザーと拮抗する。その拮抗は長くは続かず、段々私のレーザーが劣勢になってくる

即座に私はスペルカードを中断し、オンバシラを回避するー！ー今回、お互いに使ったスペルカードは威力の高いものでは無かったが、明らかに私の力量は神奈子様は劣つ

ていることが分かる

「まだいきまず！『秘術【クレイソーマタージ】』」

私は二枚目のスペルカードを発動させる、神奈子様に向かって放たれる星型の弾幕群
『天流【お天水の奇跡】』

神奈子様もスペルカードを発動させる・・・その瞬間、神奈子様の口が動いた気がする

神奈子様は大量の弾幕を放つーんという弾幕の密度、そして威力
私はすぐにスペルカードを中断して回避に集中するしかなかった

少し弾幕に当たってしまったが、まだまだ、戦えます

二度のスペルカードで神奈子様に私は圧倒的に劣っていることが分かりました、しかし、私は諦めません!!

何故なら、これは神奈子様から与えられた試練だからです、先の神奈子様のスペルカード発動時に彼女は「諦めるな早苗」と言ってくれた様に私は思います

だから、私は絶対に絶対に諦めません!!!

・・・ですから、

「見ていて下さい！神奈子様ああ!!『蛙符【手管の蝦蟇】!!!』」

私の元にエネルギーが集まってくる

エネルギーが溜まりきると私はそれを爆発させる!!!

神奈子様がとった対処方法は

『御柱【メテオリックオンバシラ】』

私の予測通り、力勝負だった

私の爆発と御柱がぶつかり合う

お互いのトップレベルのスペルカードのぶつかり合い、空気が震え、いつの間にか天が裂けていた

段々と私の弾幕が押されはじめる、しかし私はスペルカードを中断しない、ここで中斷して回避に徹するような姿は神奈子様に見せたくない!!

徐々に徐々に徐々に御柱が私に近づいてくる————もう少して私にぶつかる寸前でお互いスペルカードの制限時間が迎え、強制的に弾幕が解除される

今しか無い!!!

これが神奈子様の弱点——神奈子様は移動速度が遅く、一発、一発の威力が高い代わりに次を繰り出すのに時間が少々掛かることだ

私はこの隙に一気に神奈子様との距離を詰め、スペルカードを発動させる

『秘法【九字刺し】!!!』

大量の縦、横レーザー弾幕が神奈子様を襲いかかる、神奈子様は通常弾幕で抵抗するが、止めきれず、弾幕が命中する——やった、やりましたよ、神奈子様……

満足して、私は意識を手放した

—————

早苗は私に弾幕を当てると気絶して落ちていく

それを私は抱き留める

「早苗も強くなつたもんでしょ？」

私に話し掛ける人影

「ああ、そうだな、諏訪子」

「やつぱり、早苗は成長するのが早いねえ、この間まで、諏訪子様、神奈子様、つて私達に着いてくるだけだったのに」

そう言つて、早苗の頭を撫でるのは、守矢神社の神のもう一柱にして、土着神の頂点——洩矢諏訪子

「実際は最初の弾幕衝突で意識戻つてたんでしょ？」

「ああ、つて、諏訪子！お前いつから見てたんだ！」

「ん？最初からだよ？」

「だったら、早苗じゃなくてお前が私を止めなさいよ」

「まあまあ、でも、早苗強かったでしょ？」

「正直、もうちよつと手を抜いてたら、逆にやられてたな、あれは」

「でしょー？」

諏訪子と二人で「これで、守矢も安泰だな」と笑い合って、人里へ向かうのだった
続くよ？ 読まないよ、きゅつとするよ？

人間が敵になった恐怖、そして、誰も助けてくれない絶望、その二つを私は味わった

その時から私は人間に対して憎悪の感情を抱いていたように思う

そんな私はすぐに能力——『精霊と会話し、使役する』程度の能力』を使って人間を傷つけてしまう、爆弾の様な状態であった

しかし、その状態の私を救ってくれたのは、日下部真言君だった

彼は私と同じく能力持ちで、私の境遇を理解してくれた

私にとって彼は救世主のような存在だった

彼と過ごした時は楽しかった、全てが輝いて見えた、虐めは止まることは無かったが、彼がいるだけで、耐えることができた

そのまま、私は彼と同じ高校に入学し、高校生になった

私への虐めは止むことは無かったが、過去のように人を憎む程では無かった

しかし、数ヶ月が経ったある日、事件が起こった

その日の放課後、私は汚された制服を能力で洗って乾かすために屋上にいた

乾かしている最中、私を虐めていた人達のグループが来たので、とつさに屋上の物陰に隠れた

そして、私は彼等の会話を耳にした

「おい、お前ら日下部真言って知ってつか？」

「ああ、あの女みたいなだせえ顔してる奴？」

「ええ、私、ああいう顔好きなんだけど」

「でさ、あいつがよく進藤話花と連んでるの知ってる？」

「ええ、マジ？ちよくガツカリなんですけど、狙ってたのに」

「だから、あいつ、締めね？」

「おお、いいね！」

「さんせ」

その会話が聞こえた瞬間、私は人間への憎しみを思い出した

・・・どうして!? どうして、あんなに優しい真言君が傷つけられなきゃならないの

!?

・・・あ、そうか、それが人間なんだ

醜く、卑しい、気に入らない人間を傷つけ、不幸にし、他人の不幸を嘲笑う、汚い生

物——それが人間なんだ

私は彼等の前に飛び出し、能力を使って炎の精霊を使役し、炎を生み出し、彼等に火傷を負わせ、病院行きにした

その頃だったか、私の能力は『精霊と会話し、使役する』程度の能力』から『精霊を支配する』程度の能力』に変わっていたのだと思う

時は少し、流れ、私は運命の出会いを果たす、そう、八雲紫との出会いだ

「あら、貴女、人にして人に在らざる力を持っているわね」

「貴女は？」

「私は八雲紫、妖怪よ」

「よう……かい……」

「そう、妖怪よ、で、貴女の持つている能力は人が持つには強力過ぎる、だから、私は貴女を連れて行かなければなりません、妖怪が単食う理想郷、『幻想郷』へ

「だけど、貴女の能力は未だ、開花したばかり、ですから、貴女には選択肢が有ります、私と共に幻想郷へ行くか、それとも、多くを偽ってここで生き続けるのか、その二択です」

「い、一週間時間をくれませんか？」

「いいわよ」

「その代わり、私が貴女を監視させてもらうけど、いいわね？」

「いいですよ、私は進藤話花、よろしくお願いします」

「ええ、よろしく、話花」

その後、一週間は紫と共に生活した、紫は人間には見えないよう術を使っていたので、私は普段通りの生活を送ることができていた

その間、私と紫は沢山話をした、幻想郷についてとか、妖怪についてとか

私の家系は昔、有名な陰陽師の家系『神道』だったので、妖怪についての書物が実家の書庫に数多く残っていたので、妖怪について私にはある程度の知識があった

一週間が経った頃には、私と紫はお互いを友達だと言い合える関係になっていた

「ねえ、紫？」

「なあに？」

「私、幻想郷に行こうと思う」

「そう、歓迎するわ、友人」

「ありがとう、友人」

死んだというふうにした方が後々楽だと紫が言っていたので

私は、屋上から飛び降り、紫のスキマに入って私は幻想郷に辿り着いた

そこは、紫の言う通り、妖怪だらけの理想郷だった

……しかし、人間がいないわけではなかった

人里、そこは妖怪だらけの幻想郷の中で、人間達が暮らしている集落、そこは一見、人間達がお互いを支え合い、楽しそうに暮らしている様に見えた

けれど、人里でも、人間は人間だった

自分の幸福の為には他人を蹴落とすことをなんとも思わない生物に変わりは無かつ

「私の言うこと聞いて？」

私は自分の『精霊を支配する』程度の能力』で紫を支配下に置いた後、人間を滅ぼす計画を立てた

全ての妖怪を支配下に置き、手始めに、人里を襲い、それから、外の世界の人間を妖怪の圧倒的な力で滅ぼす、それだけ

けれど、全ての妖怪を私の支配下に置くためには、私の力が足りない、だから、私は紫のスキマを使って、幻想郷各地の強力な妖怪を誘拐し、その力を少しずつ奪う、全部奪ったら、人間を滅ぼすための戦力にならなくなってしまふからね

そして、今、私は地底の地霊殿を乗っ取り、全幻想郷の妖怪を支配下に置くため、幻想郷中に自分の能力を網のように張り巡らせ、人里を襲わせる『第二浸蝕』を発動させた

今の私は幻想郷中で、強大な力を持つ妖怪達の力を奪っているため、幻想郷中で最強と言っても過言ではないと思う

私は・・・人間が憎い、けど、真言君、貴方だけは・・・

「にやつ!？」

変な声をあげて、僕は目を覚ました

・・・なんか変な夢を見ていた気がする

僕は着替えて・・・あれ!？」

なんで、僕は学ランからパジャマに着替えたんだろうか!?まさか、誰かが僕を着替えさせ・・・

僕は学ランはポロポロだから、ワイシャツとズボンに着替えて、外に出る

「あ、霊夢さん」

外に出たら、霊夢さんが札と針で作られた術式の前で胡座をかいていた

「あら、真言さんじゃない、身体は大丈夫?」

「あ、はい、お陰様で、ぼっちりです

で、霊夢さん、一体何をしているんですか?」

「あの結界の保持よ」

霊夢さんが指差した方向、人里の空を見ると、薄い天幕のようなものが張られているのが分かった

「あれは、結界、あれが張られている限り、私が認めたもの以外の侵入を許さないわ

強度に限界があるけどね、でも操られてるような弱小妖怪に破壊できるようなシヨボイものじゃないから、安心していいわよ」

「そうか」

霊夢さんは僕の方を向いて

「何か言いたいことがあるのかしら?」

「実は……」

僕は霊夢さんに僕の親友——進藤話花について、そして、彼女がこの異変を起こしている元凶だという可能性が高いということについて話をした

「で、貴方は、もし、本当に親友が異変を起こしているとしたらどうするの?」

「僕は……」

もし、他人に異変を起こすことを強要されているのなら、強要した奴をぶちのめします

そして、もし、彼女が自分の意志で異変を起こしているというのなら、ぶん殴つてでも止めます、それが親友である僕の仕事だと思いますから」

「そう……で、皆聞いたかしら?」

「ふえ?」

「『『ええ、もちろん』』』」

そこには、魔理沙、アリス、妖夢さん、咲夜さん、妹紅さんがいた
「異変を解決するためなら、幾らでも力を貸すぜ？」

「乗リかかった船よ、ここまで来たらどこまでも行つてやるわよ」

「幽々子様……魂魄妖夢、今から参りますよ！」

「お嬢様……咲夜は今から参りますよ」

「輝夜がいるらしいからな……」

おいおい、一人ずつ目的が違うじゃないか、

でも、それが俺達らしい

「じゃあ、行くわよ、異変を解決しにね」

「ああ、いざー」

「『『『地底へ』』』』」

ああ、続くよ、神である私が保証する

第二十八話、地底への進撃

はい、どうも！皆様、お待ちかねの日下部真言君でーすよ！

元気ですかー!? 僕は元気でーす☆

で、僕は今、霊夢さん、魔理沙、アリス、妖夢さん、咲夜さん、妹紅さんの七人組で地底に向かって進行しています！

(これ以降、真言のセリフは真、霊夢のセリフは霊、魔理沙のセリフは魔、アリスのセリフはア、妖夢のセリフは妖、咲夜のセリフは咲、妹紅のセリフは妹です)

魔「あの、思うんだけどさ、こんなに戦力が人里からいなくなつて大丈夫のぜ？」

霊「だから、急いで終わらせるのよ」

ア「具体的にどれくらいの間なの？」

咲「そうね、今は守矢の神達が結界の保持をしているので、時間的余裕が無いわけではないのですが」

妖「ですが、あまりにゆっくり移動しすぎると今、戦力が不足している人里に妖怪が雪崩れ込む可能性があります」

妹「まあ、半日あるかないかくらいだな」

真「では、急ぎましょうか」

ア「だから、あんたは速過ぎるのよ！」

妹「にしては、静かだな」

妹紅さんが言う、確かに妹紅さんの言う通り、いつもは妖精達が僕等に悪戯しようとして攻撃をしかけて来るんだけど……一切その姿が見えない

魔「全部人里に向かつてるからじゃないのか？」

咲「それにしては不自然よ、人里へ飛んで行く姿も確認出来ない」

ア「……まさか」

アリスが言葉を言い切る前に

『禁弾「スターボウブレイク」』

誰かがスペルカードを発動させると、七色の高速弾幕が放たれる

速い！避けきれない！

〈相棒！……いつを使え！〉

『暴食「満たされない思い」』

スペルカードを発動させると、僕の両手を黒紫色の光が灯る

僕がその黒紫色の両手で七色の弾幕に触れると、七色の弾幕は、僕の両手にまるで吸

い込まれるように、消えていった

なんでだろう、何故か、疲れがとれたような、そんな気がする

〈これは、暴食・・・相手の攻撃のエネルギーを吸い取り、自分の体力を回復させるス
ペルカードだ〉

皆、各々の方法で七色の弾幕を回避できたようだ、すると

咲「い、妹様!？」

咲夜さんが先程七色の高速弾幕を放った金髪で、七色のクリスタルがついた綺麗な羽
を生やした幼女に向かって叫ぶ

ア「ヤバいわね、暴走してる」

妖「地底に向かう途中になんという障害が・・・」

咲「妹様の相手は私がするわ」

咲夜さんが幼女の前に立ち塞がるが、魔理沙が咲夜さんの肩を叩いて言う

魔「いいや、お前は助けるべき相手がいるだろ？」

咲「魔理沙・・・」

魔「ここは、私に任せろ、フランとは元々、遊んでやる約束をしてたしな」

咲「だけど・・・」

真「咲夜さん!!時間は迫ってるんだ!」

妹「そうだ！ここは、魔理沙に任せて先に行くぞ！」

咲「魔理沙……妹様を頼むわよ」

魔「ああ、任せとけ!!!」

魔理沙はそう言うと、良い笑顔を見せてくれた、これなら大丈夫だな

この場合は魔理沙に任せて、僕等は地底へ向かうのであった

—————

皆が地底に向かうのを見届け、私——霧雨魔理沙は紅魔館の主、レミリア・スカ—レットの妹——フランドール・スカ—レットと対峙する

「私もなるべく早く地底に向かいたいんでね、ソッコーでいかせてもらおうぜ!!」

私はミニ八卦炉を帽子から取り出し、構え、早速スペルカードを発動させる

『天儀【オーレリーズソーラーシステム】』

私を中心に複数の球体が周回を始める

そして、その球体は一定のリズムで弾幕を放つ

今のうちに魔力を溜めるぜ！

『禁忌【恋の迷路】』

フランドールもスペルカードを発動させる、すると、全方位に放たれる濃密弾幕

私の周囲を回っている球体が弾幕を放ち、フランドールの弾幕を回避しやすいように

フランドールの弾幕の数を減らす

魔力を溜めつつ、避けやすくなった弾幕を回避していく

……まあ、私もプロだからな、弾幕の、ソーラーシステム無しでも躲せるんだが、次の一撃の魔力を溜めるためにソーラーシステムを使っただけ

そして、お互いのスペルカードの制限時間になり、強制的に弾幕が解除される

「この一撃で決めるぜえええええええ!!」

お互いにスペルカードを発動させる

『邪恋【実りやすいマスタースパーク】』

『禁忌【レーヴァテイン】』

私は先程まで溜めていた魔力を全てミニ八卦炉で放出する

放たれる圧倒的な極太レーザー、普段のマスタースパークの3倍以上の光の奔流

フランドールは私のマスタースパークに向かって巨大な炎剣を振り下ろす

最強クラスのスペルカードの拮抗、天が裂け、地が震えた

「うおおおおおおおおおおお!!いけえええええええええええええええ!!」

私は吼える、それに呼応するように私のマスタースパークの威力も増幅する

マスタースパークがレーヴァテインを押し、フランドールを飲み込まんとする

けど、足りない、このままじゃあギリギリフランドールに届く前に制限時間を迎えち

まう!!

「おおおおおおおおお!!」

私は吼える!! さつきよりも強く、もっともっと強く!!

ミニ八卦炉を支える腕が悲鳴をあげてるのが分かる、感覚も無くなってきた、でも私は、私は、ここで終わるわけにはいかないんだよ!!!

マスタースパークが私に伝えてくれる、出力の上昇という形で!!!
けれど、無情にもスペルカードの制限時間が迫って来る

……くそつ、届かねえ、頼む、届いてくれえええええ!

『華符【彩光蓮華掌】』

スペルカードの制限時間が迫るその刹那、聞こえてくるスペルカード宣言、そして、フランドールを襲う人影が一つ……美鈴か!?

「ごめんなさい! 妹様!!」

美鈴は、七色に輝く拳をフランドールに叩きつける

すると、フランドールのレーヴァテインは強制的に解除され、拮抗が終わり

私のマスタースパークがフランドールを飲み込む

……あ、美鈴も飲み込まれる

—————

そして、僕等は地底に辿り着く

地底って言うくらいだから、真つ暗な洞窟のような感じを想像していたが、幻想郷の地底には、灯があり、外みたいに明るいわけではないが、不自由しない程度の明るさだった

ア「なんか、静かね・・・」

咲「地底だから、こんなもんじゃない？」

霊「それにしても、静かすぎると思うわ」

真「皆、これを見てくれ」

僕は、指を差して言う、そこには、誰かが戦っていたと思われる大きな傷跡が残されていた

妹「一体だれが？」

妖「この跡の大きさから判断するに、大きな力の持ち主であったと推測できます」

霊「ここから先は何が起こるかわからないわ、注意深く進んでいくわよ」

真「了解」

注意を払いつつ、進んで行くと

茶色の長髪で頭から二本の角を生やした幼女・・・角!?

が地面に倒れ伏しており、それを見下す黒髪の長髪で着物を着た女性がいた

霊「萃香!？」

霊夢さんが角幼女、萃香さん?に駆け寄る

霊「今まで戦っていたのは、貴女だったのね」

萃「ああ、霊夢、すま、ない」

そう言うのと、萃香さんは安心したように目を閉じ寝息をたて、眠りについた

妹「輝夜ああああ!!」

妹紅さんが、吼える

輝夜と呼ばれた黒髪の長髪の女性は挑発するような笑みを浮かべ、妹紅さんを見つめる

妹「皆、ここは私に任せてくれ!」

霊「元からそのつもりよ、萃香のこと頼むわね」

妹「ああ、任せておけ」

妹紅さんのその言葉を聞き、僕等は地底のより深部を目指して進むのであった

—————

私、藤原妹紅は皆が地底の深部に向かっていくのを見届けると、黒髪で着物を着た永遠亭の主、蓬萊山輝夜に向き直り話し掛ける

「おい、輝夜、お前……」

操られてないだろ」

「え〜つまんない、なんでえ、もこたん気づいちゃってんの〜?」

「もこたん言うな、問答無用で襲いかかったりせず、私だけを見つめてたからだよ、蓬莱ニート」

「誰がニートよ、誰が」

「なんか、妖怪を操るこの術は人間や、元々人間には効かないみたいね」
「なるほど、だから私は平気だったのか」

「で、と私は仕切り直しの意味を込めて言い、輝夜に話し掛ける

「どうする? 私にはお前と戦う理由が無くなったんだが」

「そうねえ、正直、私にも無いわ」

「でも」

「だけど」

「「久しぶりに殺りますか」」

私達はお互いにスペルカードを取り出し

『蓬莱【凱風快晴ーフジヤマヴォルケイノーー】』

『神宝【ブリリアントドラゴンバレッタ】』

私と輝夜の放った鮮やかな弾幕達がぶつかり合った

—————

妹紅さんが抜けた地点から更に地底の深い場所まで進んでいく

すると、洞窟のような道に出た

霊「この洞窟を越えると、地霊殿よ」

〈相棒！来るぞ！〉

相棒の言葉の直後、私に向かって飛び掛かってくる影、地底の暗さで、完全にその姿を視認できない!!

しかも、速い!

〈相棒！早くこれを！〉

手元にスペルカードが現れる・・・頼むぜ!!

『嫉妬【嫉妬心ー刃の如くー】』

スペルカードを発動させると、僕の右手から黒い光が溢れ、形を成していき、最終的に刀の形になった

〈これは嫉妬のスペルカード・・・近接武器を生み出すスペルカードだ〉

僕は作り出された刀で襲撃者の攻撃を受け止める

だんだんと襲撃者の姿がハッキリ見えてくる

その姿は青色の短髪に、背中に羽を生やした少女だった
僕は刀を振り、少女を弾き返した

咲「お嬢様!?!」

妖「どうやら、レミリア殿だけではないようです」

妖夢さんの視線の方向を見ると、そこには紫の長髪に分厚い本を持った少女が何か呪文を唱えている姿が見えた

ア「パチュリー……」

『火符「アグニシャイン」』

紫少女が呪文を唱え終わり、スペルカードを発動させる

巨大な炎の球体が出現し、僕等に迫って来る

『魔操「リターンイナニメトネス」』

それにいち早く反応したのはアリスだった、炎に向けて人形を投げつけ、その直後、人形が爆発し、炎と共に消滅した

ア「パチュリーは私に任せて、先に行きなさい!」

咲「お嬢様の相手は私です!」

妖「ここは、お二人に任せて先に進みましょう!真言殿!」

霊「そうね、時間も迫ってるし」

真「二人とも、頼んだぞ」

ア「ええ、任せなさい」

続きます、お、お嬢様！ああっ！お嬢様!!おぜうさまあ——!!!

第二十九話、急転直下

よう、霧雨魔理沙だぜ

「フランドール………と美鈴にマスパを決めたが、フランドールはダメージはあるものの、立ち上がった

くそつ、流石は吸血鬼といったところか、やはり、スペカー一枚じゃ倒しきれないか

正直、さっきのマスパで体力は限界に近いぜ……美鈴と共闘すれば、まだ可能性があつたかもしれないが……美鈴は私のマスパで完全に伸びちまつてるし

このままじゃ、あいつらを追いかけるところか、フランドールの足止めが限界だぜ……

「あーあ、やつぱり弾幕ごっこは自分でやらないと楽しくないなー」

「は？フランドール、意識があるのか？」

「うん！最初からあつたよ！」

「……どうして、暴走した振りしてたんだ？」

「振りなんてしてないよ、身体が勝手に動いてるぼつとみたいで面白かったからそのままにしてただけど、つまなくなつたから、糸をきゅつとしたら治つたよ！」

「糸?」

「うん!身体が勝手に動いてた時に頭についてた!」

「・・・元凶の能力が糸状なのか?」

「ところで、魔理沙!弾幕ごっこの続きしよ?

ネエ?ツツキヲシヨウヨ?ネエ?ネエネエネエネエネエネエネエネエネエネエ

フランドールの目が狂気に彩られる

・・・あ、やばやばやばやばどうしよどうしよどうしよ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ、下手したら死ぬ、下手しなくても死ぬ、・・・・・・・・・・ポクポクポクチーン!!!閃いた!!!

「おい!フラン!」

「ナアニ?」

「私について来い!最高に楽しい弾幕ごっこができるところに連れて行ってやるぜ!!」
「本当!?!行く行く!!」

と、いうことで、私は悪魔の妹を連れて、地底へ向かうのであった

ふう、ストレスで私の寿命がマツハだったぜ

はあ、正直、パチュリーとは戦いたくなかったのよね……

魔法というのは、強い威力の魔法を使えば使うほど隙は大きくなり、呪文の詠唱時間が長くなる

したがって、魔法使い同士の戦いでの勝利方法は相手の魔法をより強い魔法で相手ごと潰してしまう、

相手の高威力の魔法を自分のより弱い簡単な隙の無い魔法で相殺、もしくは回避し、相手に発生する隙を突く

最後に、詠唱している最中を狙う

この三つになる

で、どうしてパチュリーと戦いたくないのかと言うと、私は一般的に魔法使いと言われる魔理沙やパチュリーと違って、人形遣いなので、彼女達のように強力な魔法を使えない、せいぜい人形を爆破する程度だ

さらに、パチュリーは詠唱中に魔法障壁で防御を固めるので、詠唱中の隙は無い

よって、私がパチュリーを倒すためには、彼女の強力な魔法を人形達を使って、回避してその後隙を突くしか無いのよね

その事実はパチュリーも理解しているだろうから、中々、強力な魔法を使つてこないだろう

まず、私がするべきは回避に集中することね、そして、パチュリーが強力な魔法を使うのを待つ……覚悟は決めた、じゃあ、後はやるだけね

出せる人形は2、3体までが限界ね、これ以上は回避するのに問題が発生するわね

私は人形を2体だして、魔法の糸で操りつつ、通常弾幕を放ち、パチュリーの出方を
見る

……やっぱり通常弾幕は、防御されてしまうわね

『水符【プリンセスウンディネ】』

パチュリーがスペルカードを発動し、水流が発生する……これじゃない、これは強い魔法じゃない!!

けれど、まともにくらったらヤバいわね……

『操符【乙女文楽】』

私もスペルカードを発動させると、操っている人形達からレーザーが水流に向かって放たれ、レーザーが当たった部分は水流に穴が空き、道ができる

それを潜ると、パチュリーが次の魔法を放つ為、呪文を唱えている

私は冷静にバックステップで距離をとる

『月符【サイレントセレナ】』

先程まで私が居た場所に魔法陣が描かれ、そこから無数の光の矢が放たれる……あ

のまま距離をとってなかったら串刺しだったわね

でも、スペカ無しでパチュリーのスペカを回避できたのはチャンスに繋がるわね、今のうちに魔力を溜めて、次のスペカに備えるとするわ

しかし、私の予測に反して、パチュリーのスペカ『サイレントセレナ』はまだ攻撃を終わてはいなかった、無数の光の矢は洞窟の天井で反射し私に向かって降り注いだ

咄嗟の判断で私は人形に魔法の防御壁を作らせるが、即席の防御壁の為、光の矢を全て防御することはできず、私は数本受けてしまう

・・・不味いわ、非常に不味いわね、ダメージを受けた上にパチュリーに魔法の詠唱をする時間を与えてしまった

『火符【アグニレイディアンス】』

隕石のように巨大な火球が私に目掛けて飛んでき、パチュリーの使う強力な魔法の一つ・・・これは回避できないし、不意をつかれた今じゃ相殺できるような攻撃を出せないわね、くらってしまったら確実にただじゃ済まない、くらうくらいなら・・・

『魔符【アーティフルサクリファイズ】』

人形を爆発させる・・・但し爆発場所は私の目の前、つまり、私は人形の爆発で吹き飛ばされ、火球を回避する

・・・なんとか最悪の事態は免れたわね、けど、光の矢と爆発のダメージで、受身

倒れこむ私に声をかける人が一人、この声は――

「魔理沙!!」

「おう、魔理沙だけ?」

「どうして?」

「お前を助けに来たんだけ?」

「冗談はやめてよ」

「まあ、フランをなんとかしたから急いで来ただけだけ?」

「そう、じゃあ、手伝ってよ」

「ああ、いいぜ、でも、私も正直体力あんまり残ってないから一撃できめるぜ!!」

サポートは任せたぜ?」

「ええ、任せなさい」

私はそう言うのと十数体の人形を取り出し、魔法の糸で操る

「準備完了よ」

「よし!じゃあ、いくぜえええええええ!!」

『魔砲【ファイナルスパーク】』

魔理沙が吼え、スペルカードを発動させる、すると普段のマスタースパークの2倍程の規模の極太レーザーがパチュリー目掛けて発射される

『火水木金土符【賢者の石】』

パチュリーもそれに抵抗すべく、スペルカードを発動させる

まるで、隕石のような五色の巨大な結晶弾が放たれる

魔法使いの目線から見ると、両者のスペルカードで使ってる魔力の量はほぼ同じくらいね、このままだと、スペルカードの制限時間まで拮抗して強制解除で終わりね

だから、ここから私のサポートの仕事なのよね

『蒼符【博愛の仏蘭西人形】』

『紅符【紅毛の和蘭人形】』

『白符【白亜の露西亜人形】』

私は残っている魔力を全て込めてスペルカードを発動させる

人形達が青、白、赤と様々な色のレーザーを発射する

私の人形魔法は、強力な魔法を放てない代わりに、一つ一つの魔力の消費が少なくて済むため、同時に出したり、連射が得意なのだ

人形達のレーザーと魔理沙のマスタースパークが重なり合い、さらに強大な一つのレーザーとなる

「いっけええええええええ!!」

「魔理沙!いきなさい!!」

「ドールスパーク!!!」

『紅符【スカーレットシユート】』

『禁忌【クランベリートラップ】』

吸血鬼姉妹の弾幕がぶつかり合う

嗚呼、お嬢様、お嬢様、ハアハアハアハア!!!!

「お姉様、操られてもやっぱり強いね!!でも、負けないよ!!」

妹様はスペルカードを中断し、弾幕勝負から接近戦に切り替え、お嬢様に殴りかかる

お嬢様は冷静にスペルカードを中断し、妹様の拳を受け止める

お嬢様達は取っ組み合いの状態になる

今しか無い!!

『咲夜の世界』

私以外の時間が止まる、それは当然お嬢様達も取っ組み合いの体勢のまま、止まつて

いる

私はこのスペルの制限時間の間にお嬢様達に近づいて、二人を抱きしめた!!

こ、これぞ姉妹丼!!!キマシタワー

制限時間を迎え、時は動き出す

そして残ったのはお嬢様達を抱きしめる私・・・正直、鼻血が止まりません!!!
 「さ、咲夜!？」

妹様が驚いて先程放とうとしていたパンチがお嬢様の頭を掠める——すると、どう
 いうわけかお嬢様が目を覚ました!

「ん、あ、あれ?……は? フラン? にしやくや?」

き、きたああああああああ!!!

やっぱりクールなお嬢様より普段のお嬢様の方が可愛い!!!!!!

おぜうさま!!おぜうさま!!おぜうさまああああ!!!!!!

私は鼻血を噴出し、意識を手放すのであった・・・ああ、幸せ

—————

洞窟を抜けると、そこには更なる障害が待ち構えていた

妖「幽々子様!？」

霊「・・・古明地姉妹に、西行寺幽々子か」

妖夢さんが叫び、霊夢さんが冷静に相手を見据える

霊「正直、ゴールまで戦いたくなかったのだけど、仕方ないわね」

霊夢さんは札と針を懐から取り出し、戦闘準備をする

だが、妖夢さんがそれを制する

妖「ここは、私に任せてお二人は先に進んでください!!」

真「だけど、流石に三対一なんて自殺行為だと思っただけ……」

妖「いいえ、三対一ではありません、二対二ですよ、ね、幽々子様？」

霊「どうということ？」

妖「こういうことです」

そう言うと、妖夢さんは幽々子さんに向かってスペルカードを投げる

幽々子さんがそれを受け取ると、彼女はにっこりと笑って

『死符【ギャストリドリーム】』

幽々子さんを中心に紫の蝶が拡散し、古明地姉妹を襲う

幽々「ほらほら、霊夢、真言君、地霊殿はもうすぐよ、行きなさい」

真「霊夢さん、行こう!!」

霊「ええ」

僕と霊夢さんはゴールである地霊殿まで急いで向かうのであった

—————

「じゃあ、妖夢、がんばりましょうね」

幽々子様が私に話し掛けてくれる

「ゆ、ゆゆ、幽々子様あああ〜」

久しぶりに幽々子様に会えた喜びからか無意識に私は涙を流していた

「ほらほら、妖夢、泣かないの！」

「ごう、すみません」

「あらあら、しょうがない子ねえ」

幽々子様は呆れながらも私を抱きしめてくれる・・・幽々子様そんなことしたら余計に涙が出てきますよ〜逆効果です〜うう、ですが今は敵の手前、これ以上情けない姿はみせられません!!

「幽々子様、もう結構です、ありがとうございます〜ございました」

「あら、もういいの?」

「まだ、やるべきことがありますから」

そう言つて、私は刀を抜く

「妖夢、私が見ない間に頼もしくなったものね」

「本当の強さを見せてもらいましたから」

私は古明地姉妹に向かって駆け出す

—————

霊「着いたわ、ここが地霊殿よ」

僕と霊夢さんはゴールである地底の館、地霊殿に辿り着いた

見た目は西洋風の巨大な館、館というより、城に近い見た目

その門前に立ち塞がるように女性が立っていた

その女性は先程までの僕等の地霊殿への侵入を妨害してきた人達とは違って、なぜなら

女「ここを通すわけにはいかないねえ」

彼女は操られてはいなかったからだ

霊「星熊勇儀ね」

星熊勇儀と呼ばれた地霊殿を守る最後の砦、金の長髪に、頭から角を生やした体操服の女性は言う

星「ここは、通せないよ

あの人間は私と鬼の勝負をして勝ったんだ

だから、私はあいつの言うことを聞くんだ、そう言う約束だからね

鬼は嘘をつかないのさ」

へ相棒、正直、この女は強いぜ、鬼という種族も相当強い高位の種族だが、その中でもトツプクラスの強さだ」

ああ、僕にだってわかるよ、すごい威圧感だ

頬がビリビリする

・・・だけど、ここまで来て、逃げられない

僕は拳を握って霊夢さんに言う

真「霊夢さん、あの鬼は僕が相手をします、ですから先に行ってください！すぐに追いつきます！」

霊「・・・分かったわ、死なないでね」

霊夢さんが地霊殿の扉に向かう

星「おいおい、行かせるわけないだろう」

それを星熊さんが止めようとする

そこに僕は突進し

真「貴女の相手は僕ですよ」

星熊さんに右ストレートを放った

彼女も右拳でそれを受け止める

ぶつかり合う二人の拳

星「へえ、あんたやるねえ！鬼の私と互角の力を持つてるとは！」

そう言いつつ、星熊さんは更に拳に力を入れる

・・・ぐおおお、なんて力だ、少しでも力を抜いたら拳どころか全身が砕けてし

まいそうになる、だけど！だけど！ここで終わるわけにはいかないんだよ！！

僕の『思いを力に変える』程度有能力』が僕の思いを力に変える
真「まだ、まだあ！」

今度は僕の方が星熊さんの拳を押し返す

星「やるねえ、だけど、これならどうだい？」

『鬼符【怪力乱神】』

星熊さんがスペルカードを発動させると、星熊さんが僕の拳を押し返しはじめる……
これは、身体強化のスペルか、ならばっ!?

〈オツケー！傲慢準備できてるぜ！〉

僕は直ぐにスペルカードを発動させる

『傲慢【力を有する者の業】』

僕の両腕は紫の炎を纏う

あれ？炎の量増えてない？

〈相棒が能力を少し使いこなせるようになったからスペカが強化されたんだよ

けど、炎を纏うことができるのは両腕のみで固定される欠点があるがな〉

つまり、脚を強化はできないってことだな

〈そーいうこと〉

紫の炎を纏い、力が増した拳が星熊さんへ反撃を始めるが、二人の拳はお互いのちよ

うど真ん中でピタツと動きを止めてしまった

・・・幾ら力を入れても動かない、完全に互角っ！

星「この状態の私の力と互角とは・・・これは楽しい勝負ができそうだ」

真「できれば、勝負はしたくないんですけどねえ」

星「それは無理だな」

真「ですよねー」

直後、僕等は互いにバックステップで距離をとり、戦闘体制を整える

そして、ほぼ同時に相手に向かって駆け出し、拳をぶつけ合う

避けるか拳以外の部分に相手の拳が当たったら死ぬ、地獄のボクシングが始まった

星熊さんの拳を拳で受けて、軌道をずらし、もう片方の拳で彼女にパンチを繰り出す

逆に、星熊さんも僕の拳を拳でいなして躲し、パンチを繰り出す

このぶつかり合いが数回行った後、再びお互いに距離をとる

・・・痛い、拳が痛いぜ、痙攣してやがる

それは星熊さんも同じなのか、彼女も自分の拳を見つめていた

接近戦じゃ、埒が明かない！

ここは、弾幕勝負だ！

と、思った瞬間

『起源「マスタースパーク」』

星熊さん目掛けてマスタースパークが放たれる、それは魔理沙のよりも太く、威力があるように見えた

星熊さんは、それをギリギリで躲し、マスタースパークを放った人物を睨みつける
星「おい、これは私のその人間との勝負なんだ、邪魔をするんじゃないよ」

真「そうです、これは僕の戦いです！

幽香さん！」

僕がそう言った後、幽香さんは僕を睨んで言う

幽「貴方が戦うべき相手はあの鬼じゃないでしょう」

真「……」

何も言えない僕に幽香さんは優しい笑みで

幽「とつとつ、行きなさい、助け合うのも強さなのでしょう？」

と言ってくれた

真「幽香さん、いつてきます」

幽「いつてらっしゃい」

幽香さんと言葉を交わし終わると、僕は地霊殿目指して走り出すのであった

幽「さあ、さっそく殺り合いますよう？」

お山の大將？」

「続くぞ、酒持ってこーい!!」

第三十話、結末が待っているんだ

扉を開け、僕は辿り着く

この幻想郷でずっと探していた親友の元に

—————

「霊夢さん!!」

僕は地霊殿の大広間の扉を開け、中に入る

そこには、床に片膝を着いて蹲っている霊夢さん

それを遠くで嘲笑うような笑みを浮かべて見下すスキマ妖怪、八雲紫さん

そして大広間の最奥にて椅子に座っている変わり果てた姿の僕の親友、進藤話花

「アア、マコトクンダア〜」

話花が僕に話しかける、その声は人間のものではなく、多くの人間の叫び声の合唱のようだった

彼女は文字通り『バケモノ』になっていた

数多くの妖怪の力を取り込んだためか、彼女の身体は人間とは程遠いものになってしまっていた

彼女の肌は変色し、青色になり、身体中に歪な螺旋模様が描かれていた

彼女の右腕は刀のように鋭く、最早、肩から腕ではなく刀が生えているように見え、左腕は個体ではなく液体のように蠢いている——要するにスライムである

右脚は厚い鎧で覆われていて、左脚は獣のように毛深く、鋭い爪を生やしており、背中からは蝶のような翼が生えている

彼女の顔は辛うじて人間の輪郭を保っているが、その両目は真っ赤で白目まで赤で潰れていた、そして血の涙を流し続けている

「アハハハハハ!!マコトクンガキテクレタ!!」

ウレシイナアウレシイナア!!!」

話花の口から発せられる物凄い不快音

・・・こ、これが話花?どうしてこんなことに

僕が放心していると、霊夢さんが立ち上がる

「真言さん、もう、あの女は人間じゃないわ」

「霊夢さん・・・でも」

「でもじゃないわ、これは事実よ、認めなさい」

霊夢さんは冷たい声で告げる

「けど、可能性が無いわけではないわ

彼女が自分の取り込んだ妖怪達の力を束ねている、糸のようなものを断ち切れれば、話くらいはできるようになるかもしれないわね」

「糸？」

〈相棒、あの女の身体中に巻きついてる金色の糸がそうだ〉

よく話を観察してみると、確かに彼女の身体に太い金色の糸のようなものが巻きついており、それが彼女の身体を維持しているように見える

「……とりあえず、近寄らなきや話にならないな

へけど、タダでは近寄らせてくれないようだけ、あれを見てみ」

相棒が示す所には、半透明の壁の様なものが張られている

「気付いたようね、境界よ、紫が張った、ね」

霊夢さんが説明をくれる

「そして、弾幕攻撃は……」

霊夢さんが通常弾幕を境界目掛けて放つ、すると、空間が開き、大量の目のような模様
様の空間が現れる

「……あの目の空間が八雲紫さんがスキマ妖怪と呼ばれる所以である『スキマ』つてやつか

霊夢さんの通常弾幕はスキマに吸い込まれる

そして、霊夢さんの真上にスキマが開きそこから先程吸い込まれた通常弾幕が吐き出される

霊夢さんはそれを最小限の動作で回避し言う

「弾幕は、通用しないわ」

で、あの奥にいる人間に辿り着くためには結界を破るか、紫を倒して結界への力の供給を絶って、結界を解除する必要があるわね

但し、弾幕は紫のスキマで無効にされるから、結界を破る方法は現実的ではないわね
つまり、奥の人間に辿り着くには紫を倒さなければならぬということ、分かった？」

「……はい」

「いい返事ね、じゃあ、協力しなさい」

紫には弾幕は通用しないから、近接戦闘しか有効打を与えられないわ
で、私は貴方ほど近接戦闘が得意じゃないから、私が補助をするわ

悪いけど、貴方は紫に接近して攻撃しなさい」

「わかりました、では、行きます！」

僕は紫さんに向かって最短距離を駆ける！

目の前にスキマ開く！

ゴートウースキマ！

駆け出した地点に吐き出される！

ビターン！

はいやり直しー！

「……果てしなく無駄な僕のファーストチャレンジを巻きで紹介致しました

「……スキマに吸い込まれるのは弾幕だけじゃないのよ」

霊夢さんが呆れた調子で言う

「……すいませんでした」

「はいはい、スキマには注意しなさい

けど、紫が一度に開けるスキマは一つだけ、で、次のスキマを開くために少し時間がかかるから、貴方のダツシユなら一つスキマを避けることができれば紫に接近できそう
ね」

「なるほど、じゃあ、行きますー！」

僕は再び紫さん目掛けてダツシユしようとする、その瞬間、紫さんが通常弾幕を大量に放つ

「……弾幕を避けながら、スキマを見切り、接近するー無理ゲーだろ!!!」

へまあ、スキマに吸い込まれさえしなければ、通常弾幕は当たっても問題ないがな
ダツシユで接近する、これしか無いから……迷わず挑むのみ!!

紫さんへの最短距離を弾幕を避けながら接近する

さつきと同じように僕の目の前にスキマが開く、僕は横に飛び、それを躲すが、横に飛んだ先にスキマが開いていて、はいやり直しー！

「おいしいいい!!!開くスキマは一つだけじゃなかったのかよおおおお!!」

「は？貴方が自分からスキマに吸い込まれに行つたように見えたけど？」

霊夢さん？貴女と私の認識がずれているのですけど？

〈幻覚だよ、相棒〉

な、なんだってー!? 一体いつから!?

〈多分最初からだ〉

マジかよ……

〈次は大丈夫だ、相手の幻覚ほどの程度か良く分かったから、

次は食らう前に止めてみせるぜ〉

にしても、スキマに幻覚……紫さんは僕達を本気で倒しに来てるのか？

〈多分、時間稼ぎだよ、人里を攻め落とすまでの間の〉

……成る程

〈防御や時間稼ぎに徹する奴を倒すほど骨の折れることはないわな〉

でも、負けられない

〈ああ、その通りだな〉

僕はもう深く考えるのは止めて、紫さんへの接近を試みる

ここまで、さつきまでとほぼ同じ感じだったか

『霊符【夢想妙珠】』

霊夢さんがスペルカードを発動する、5つの巨大な光球を紫さん目掛けて放つ……
どうして、紫さんに弾幕は通用しないことが分かっているのに弾幕を発射したんだろう？

それは、紫さんの通常弾幕を蹴散らし、紫さんに直撃……しない、やっぱりスキマで全部吸い込んでる！

………そういうことか!!

僕は全力で紫さん目掛けてダツシユする、霊夢さんの弾幕でスキマは既に開いている
!!更に、紫さんの通常弾幕は霊夢さんの弾幕によって蹴散らされている!最早、僕の紫さんへの接近を邪魔する物は何も無い!!!

完全に僕の拳が届く位置にまで紫さんに接近できた——直後、僕の目の前にスキマが開き、先程霊夢さんが放った弾幕が僕に向かって吐き出される

あ、相棒!早く消すやつ!!早く!死ぬ!

〈………はいよ〉

『拒絶【分かり合えない思い】』

スペルカードを発動し、霊夢さんの弾幕を消し去る

しかし、この消し去る間に発生した数秒で、紫さんにスペルカードを発動させる時間を与えてしまった

『結界【夢と現の呪】』

紫さんは二つの巨大な弾幕を発射する……その弾幕はすぐに破裂すると、大量の小弾幕となり僕を襲う

僕はさつきまで発動していたスペルカードの効果で小弾幕を消しつつ、後退を余儀無くされた

……くそっ！あんなに近くまで接近できたのに、悔しい！！

「私の弾幕を利用して真言さんの接近を止めるとは、操られても頭は回るようね、そのまま私に返してくると思っただけど……」

霊夢さんが冷静に分析する

……どうして霊夢さんはあんなにクールなんだろうか？

僕も落ち着いてクールになった方が強くなれるのかな？

〈能力的に感情を自由に動かせる今のままで良いと思うぜ？〉

まあ、確かに【思いを力に変える】には、クールな性格は向かないだろうな

「霊夢さん」

「何？」

「次、もう一回だけ僕一人に任せてくれませんか？」

「……いいわよ、チャンスだと思ったら私も攻撃するけど」

「よっしゃ！行くぜえ！『暴力』『圧倒的な力による地殻変動』!!!」

僕はスペルカードを発動させ、拳を地面に打ち付ける

すると、紫さんの足元の地面が隆起し槍のように紫さんを襲う

流石に地面はスキマで吸い込めないだろ!!

僕の読み通り紫さんはスキマを使わず、ステップで回避する

まあ、当たるとは思ってたけど、紫さんが回避するために生じる、時間、が大

事なんだよね！

つまり、ステップで回避に集中している紫さんは僕に向かってスキマを使う余裕が無

い

いつ接近するの？今でしょ!!

腕が届く距離まで紫さんに接近する

『霊符【夢想封印・集】』

霊夢さんの弾幕の援護射撃

色鮮やかな巨大な光球が紫さん目掛けて殺到する

それを紫さんはスキマで吸い込む

けど、スキマで吸い込んだ弾幕を吐き出すまでの間に僕は完全に攻撃を当てられる位置まで移動できる

僕は紫さんの目の前まで跳躍する

「もらったああああ！」

紫さん目掛けて拳を振り下ろす

「ネエー・ネエー・マコトクン！マコトクン！イッショニアソボウ！」

話花の叫び声が聞こえた直後、僕の目の前に、二つ目、のスキマが開き、僕は吸い込まれた

「おい、これは幻覚じゃねえぞ！」

「じゃあ、紫さんがもう一個スキマを開けることが出来たってこと!？」

「その可能性もあるが、おそらく、あの人間が開けた可能性のが高いと思うぜ」

話花が!?! どうして!?!

「あの人間、自分が取り込んだ妖怪の能力を扱えるようになるのかもしれないな、推論でしかないが……」

相棒の推測が正しいのか、僕がスキマから吐き出された先は霊夢さんの近くではなく、結界を越えた、話花に近い場所に吐き出された

「アハハハハハハ!!」

『爆符「ペタフレア」』

話花は笑いながら、右手を前に突き出す、そこから八咫鳥と同じ、いや規模はそれ以上の巨大な人工太陽が出現する

・・・死ぬ、冗談抜きで

—————

私はスキマから吐き出された私の弾幕を躲しつつ考える

・・・キツイわね、真言さんと分断されていよいよ紫に対する攻め手が無くなったわ、弾幕はスキマで無効にされ、接近戦は怪我で紫と渡り合えるレベルの戦いが出来るとは思えない

「できるとしたら、時間稼ぎが限界かしらね」

私は独り呟く

・・・そう、最悪時間さえ稼げればいい

真言さんがあの人間を倒してくれば、紫やその他妖怪達の暴走も止まる

しかし、もしここで私が紫を真言さんのいる結界を越えて逃がしてしまったら、真言さんはあの人間と紫の二人の相手をしなくてはならなくなる

そうなつては真言さんの勝ち目は無くなつてしまうだろう

だから、私はなんとしても紫をあゝの結界の先に逃がすわけにはいかないのだ

・・・申し訳ないけど、ここは時間稼ぎに徹することにするわね

私は立ち上がり、紫と改めて対峙する

・・・味方の時は頼もしいけど、敵になると本当に厄介な妖怪ねーでも、ここで負けるわけにはいかないのよね

「まあ、さつきまでで十分休憩はできたし、やれることをやりますか」

私はスペルカードを取り出し、それを宣言ーしようとした直後、地霊殿に巨大な太陽が生まれた

—————

僕に向かって太陽が近寄ってくる

・・・どうしよおおおおおお

〈落ち着け！〉

だって、本家のはずの八咫鳥よりもデカイ人工太陽とか、死だよ！Game overだよ！

〈ほら、スペルカードやるからなんとかしろ〉

おいイ？なんで7枚渡してくれるわけえ？僕に選べってこと!?

〈いや、全部使え〉

・・・なるほど、それならいけそうだな

『怠惰【懶惰は自我を護るために】』

『嫉妬【嫉妬心ー刃の如くー】』

『傲慢【力有る故に生まれる思い上がり】』

『暴食【満たされない思い】』

『憤怒【超・衝・撃】』

『強欲【決して手に入らない苦痛】』

『色欲【恋人同士は嘘まみれ】』

僕は7枚のスペルカードを全て発動させる

怠惰で右腕にガントレットを装着、

嫉妬で左手で刀を生成し、それを地面に突き刺し、自分を固定

傲慢で右腕に身体強化の紫の炎が灯る

暴食で人工太陽のエネルギーを少し奪う

憤怒で人工太陽を弾き飛ばす

強欲で人工太陽は話花目掛けて飛んで行く

色欲で話花の空間認識を少しだけズラす

結果、人工太陽は少し規模が小さくなったものの、真っ直ぐ話花に向かって跳ね返り、

彼女がそれを跳ね返そうとして振った腕は幻覚で空を切り、人工太陽は彼女の腹部に直撃した

・・・無傷かよ、こっちは7枚もスベルカードを使ったつてのに

「アハハ！タノシイネ！マコトくん！タノシイネ！」

無邪気に笑う話花・・・だったもの

最早、彼女は人間じゃない、妖怪よりも化物らしい

会話以前の問題な気がしてくる、もし彼女を縛る金の糸を切ることができたとしても、彼女は正気でいるのだろうか・・・

「モット！モット！タノシイコトシヨウヨオオオオ!!!」

話花が叫び声の咆哮をあげる

『爆符【ペタフレア】』

『爆符【ペタフレア】』

『爆符【ペタフレア】』

『爆符【ペタフレア】』

『爆符【ペタフレア】』

先程までの巨大な人工太陽が5つ、出現する

圧倒的な光と熱量・・・これだけ人工太陽が集まれば、本当の太陽に匹敵するので

は

「……」

〈これは不味いな……〉

僕と相棒が対処法を思い付く前に僕は人工太陽の炎に包まれた

—————

私、風見幽香が鬼の星熊勇儀と地霊殿前で戦闘をしていると

地霊殿が、いや、地底が眩い光に包まれた

「一体何が起こってるんだ!？」

鬼が驚愕を露わにする

「……」

私は冷静に光で眩む視界の中、地霊殿を見据える

数分後、光は止み、炎に包まれた地霊殿が姿を現した

……これは本格的に不味いわね

「わ?! 大火事じゃないか!？」

「鬼、ここは一時休戦よ、まず地霊殿の消化をするわ、手伝いなさい」

「お、おう」

私の言葉に意外そうな顔をしながら、鬼が首を振る

・・・失礼な鬼ね

「おい！何が起こって・・・地霊殿が大炎上してるじゃないか!？」

すると、魔法使い達や吸血鬼姉妹とそのメイドが駆けてくる

「見てわかるでしょ、火事よ、消化を手伝いなさい」

私は淡白に今の状況とすべき事を伝える

「咲夜、パチエを起こしなさい」

「かしこまりました」

吸血鬼はメイドに命令する

確かに七曜の魔法使いの魔法なら消化は楽になるわね

こうして、私達は地霊殿の消化活動を始める

・・・真言・・・死ぬんじゃないわよ

—————

私、博麗霊夢が紫を相手に時間稼ぎをして数分が経った後

地霊殿が真つ赤な炎に包まれた

何事かと思つて結界の方に視線をやると、5つの巨大な太陽

結界越しにも感じる事ができるほどの熱

そして、5つの太陽は真言さんに襲いかかり、大爆発を起こした

空気は震え、激しい閃光が視界を眩ませる

バリンという音と共に崩れる紫の結界

そこから吹き飛ばされる真言さんの身体

彼の身体はまるでボールのように跳ねて、大広間の端から端まで飛ばされ、壁に叩きつけられた

彼は倒れこんだまま動かない

服は所々破けており、彼の周りに血だまりが出来ている

辛うじて五体満足で人間の形を保っているのがまさに奇跡だろう

「……」

私は突然の出来事に呆然と立ち尽くすしかなかった

「……終わりかしらね」

私は呟く

私が諦めかけたその時

彼、日下部真言は立ち上がった

「……………」

「……悪いな」

〈どうしたんだ相棒？〉

眩く

「全部、全部、お前のせいか……」

眩き、拳を握り締める

「お前のせいかなぁあああああああああああああ!!」

俺が吼える、今の俺に残っているのは怒りと生への執着のみ

怒りが戦うための力を生み出し

生への執着が治癒力に変換され、身体の傷がふさがっていく

まだ俺が戦うことができるのを理解したのか

「マダマダアソボウ！モットモットアソボウ！アハハハハハハハ!!」

『神槍【スピア・ザ・クングニル】』

『神槍【スピア・ザ・クングニル】』

『神槍【スピア・ザ・クングニル】』

『神槍【スピア・ザ・クングニル】』

『神槍【スピア・ザ・クングニル】』

あいつの笑い声が聞こえてくる

鼓膜が破れそうなくらいの大絶叫

そして放たれる巨大な槍の嵐

それは回避する隙間すらなく、全てが俺に向かって直進してくる

・・・けれど、恐怖は無かった

「アハハハハ!!コワレチャエ!!コワレチャエ!!アハハハハハハ!!」

黙れこの化物がああああああああああ!!!

「黙れええええええええええええええええええええええ!!!」

感情を爆発させる

俺の中に残っているのは、最早、怒りだけ

俺のその感情を読み取ったのか、俺の持つ7枚の罪のスペルカードが一つの巨大なスペルカードになった

『七罪【総てを統べる力・黒騎士】』

俺の身体を闇が包み込む

その闇は俺の身体全体を覆う

闇が晴れると

俺の頭にはフルヘルム、両腕にはガントレット、そして胴から脚にかけて甲冑を見に

纏っており、そして全てが真っ黒、『黒騎士』の名に相応しい姿となっていた

俺は腰から剣を抜いて、構える

剣は、大きな両手剣で長さは1mくらいだろうか

俺に向かって降り注ぐ槍の雨

「おおおおおっ!!」

剣を力の限り振る

槍は全て剣を振った際に起こった暴風で床に落ちる

「アハハハハ!! タノシイネー! タノシイネー!」

何が楽しいねだよ!! ふざけやがって!!!

俺の怒りが力に変わる

漆黒の鎧は黒い光を放ち、俺の思いに応える

「おおおおおっ!」

俺は疾風のように駆ける、化物から放たれる通常弾幕やスキマを回避し、距離を詰める

『【百万鬼夜行】』

『【百万鬼夜行】』

『【百万鬼夜行】』

その威力は単に十倍、それどころかそれ以上になっている

その規模は地霊殿どころではない、地霊殿周辺8 kmがこの弾幕で恐らく塵も残さず、消え失せるだろう

それは、人にだって言える、まともに弾幕を受けてしまえば、骨も残らず存在を消されることになるだろう

私ができるのは、精々結界を張って自分の身を守る事だけだろう、生き残れる可能性は1%も無いだろう

・・・ああ、せめて美味しいものを食べてから死にたかったな・・・

遂に、その時は訪れる大量の眩く、強大な弾幕結界が私を襲う、私は死を覚悟した

弾幕は

襲ってはこなかった

『落ちる天幕』

弾幕は全て強大な斬撃で、掻き消されていた

「僕はまだ、やらなきゃいけないことがある」

声のする方を見ると、先程まで漆黒だった色を白銀に変え、背中から白い翼を生やした騎士が化物と対峙していた

—————

「オ……………、タ…ケ…」

声が聞こえてくる

沈んでいる意識の中で僕はそれに耳を傾ける

「オネ……………、タスケ…」

ノイズが混ざっている

もつと注意して聞いてみる

「オネガイ、タスケテ」

はつきりと聞こえてくる誰かが僕に助けを求める声……僕はこの声を聞いたことがある

探し続けてきた親友——進藤話花の声だ

「お願い」

そうだ、僕はまだ何も成せていない

「助けて」

彼女が助けてと言っている

なら僕はまだ立ち上がらなければならぬ!!!

—————

僕が強く願うと、視界が開け、意識が戻ってくる

・・・待たせたな、相棒

〈ホントに遅えよ馬鹿野郎〉

まだまだ、終わるわけにはいかないからな

〈ああ、行こうぜ、相棒〉

もちろん!

話花の元へ翼をはためかせる

もつと、もつと速く彼女の元へ!!

僕が願えば願うほど翼はその輝きを増し、グングン速度をあげていく

「ガアアアアアアアアアア」

『深弾幕結界―夢幻泡影―』

『落ちる天幕』

叫び声をあげ、弾幕が放たれるがそれは僕の放つ斬撃で霧散する

「だから……どうするんですか？」

霊夢さんは、少し顔を嫌そうに歪めるが、直ぐに無表情に戻って

「殺すのよ」

明確な殺意を剥き出しにした

背筋が凍る

……本気だ

「……」

「さあ、どきなさい、邪魔よ」

「嫌です」

「どきなさい」

「嫌だ」

「どけ」

「嫌」

「どけどけどけどけどけ」

「嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ」

「どちらも譲らない、いや、譲れない」

議論では無く、最早、意地の張り合いだった

「……ていうか、僕は三文字、相手は二文字……ずるくね？」

〈大事なものはそこじゃねえだろ〉

お互い、このままでは永遠に平行線だという事がわかったので、霊夢さんと僕は懐からスペルカードを取り出した

「まさか、異変の最後に貴方と戦うことになるとはね」

「異変を解決するのは、巫女の役目なんだから？」

「僕は巫女じゃない」

「女みたいな顔して……巫女服着れば十分巫女やれるんじゃないの？」

「……人の黒歴史を思い出させやがって……」

「許さん」

〈相変わらず、相棒の怒りの沸点の意味わからないぜ〉

僕は先手必勝とばかりにスペルカードを宣言——

しようとした瞬間に後頭部に鋭い痛みが走った

薄れいく意識の中、後ろを向くとそこには「ごめんね」と僕に申し訳なさそうに言う

進藤話花の姿があつた

「で、そいつの代わりにあんたが私と戦うの？」

「いいえ」

「じゃあ、何の用なの？」

「……私を殺して下さい」

「ふうん、どういう風の吹きまわしかしら、まあ、こつちにとって協力的なのは嬉しいのだけれど」

「真言君——彼が教えてくれたんです、自分の能力に取り込まれて薄れる意識の中、何度も呼んでくれた、諦めるな、守ってやるって……でも、私がいる限り、彼に迷惑がかかってしまう、それだけは絶対に嫌なんです」

「そう」

「お願いします」

「出来るだけ苦しまないように終わらせてあげるわ」

私は真言君の唇にキスをした

……これくらい、いいよね

僕が目を覚ましたのは、異変が終わってから三日後だった

そして、全てを聞かされた、親友の死やその他諸々

その他諸々って表現したのは、話花の死がショックすぎて他の事を聞ける余裕が無くなつたから

霊夢さんに対して怒りや憎しみは抱かなかつた、心の中はただただ、虚無感でいっぱいだった

誰か一人が傷ついて責任を取るだけでは物語は終わらない

数日後、僕は妖怪の山の人気のない場所に来ていた

僕の物語は落下して始まった

なら、物語の終わりも当然落下して終わるに限る

・・・悪いな、相棒

〈俺は元々は消える予定だったんだ・・・今更文句はねえよ〉

ありがとう

僕はここに飛び降り自殺をしに来ていた

なぜか、恐怖という感情はない

「……今度こそ、親友と同じところに行けるからかな？」

飛び降りようとした、その時

「おいおい、何しようとしてんだよ、真言」

「……魔理沙」

「悪いけど、見逃せないわ」

「……霊夢さん」

「見ろよ、あれを」

魔理沙が指差した方向には僕の知り合いの人間、妖怪達が僕を探している姿があった
「貴方に死なれると、いろいろめんどうくさいのよ、まだ異変解決の宴会もやってないし
ね」

「まったく霊夢は素直じゃねえなあ」

ぶつきらばうな霊夢さんに微笑む魔理沙

つられて僕も笑ってしまう

ああ、こんなに自分が思われていることを知ってしまったら

飛び降りなんてできるわけないじゃないか……

こうして、僕の幻想郷永住が決まったのだった

――――
異変解決の宴会

始めて飲酒をした未成年の真言くんでした

泥酔しました

何をして何を口走ったのかは覚えていません

唯一分かることは、僕が目を覚ました時

僕は全裸でした

．．．．飛び降り自殺してやろうか

――――

「ここは彼岸、死者達の終着駅ですよーおや、貴女は」

「．．．．」

「こちらこそ、はじめまして、私は幻想郷の閻魔、四季映姫ヤマザナドゥです」

「．．．．」

「あんなに凄い異変を起こしたんです、勿論、貴女は地獄行きですよ」

「．．．．」

「おやおや、割とあっさりしてますね」

「……………」

「私はそれだけの事をした……ですか、どうやら反省はしっかりしているようですね」

「……………」

「ぱんぱかぱんぱんぱーん」

「……………!?!」

「貴女には、新しい選択肢が与えられました」

「……………?」

「貴女は天国に行く事は出来ませんが」

新しい命として転成することが出来るようになりました

更に、どういう存在に生まれ変わりたいか、人間、動物、植物 e t c を貴女は自らの手を選ぶ事が出来ます

では、貴女はどのような新しい命を望みますか?」

「……………」

「ほう、それでいいんですか?」

生まれてこれるかどうか不確定ですよ?」

「……………」

「それでもいいーですか、分かりました、では行きなさい」

「……」

「お礼なんて要りませんよ」

貴女は私の友人の親友ですからね

……借りは返しましたよ」

—————

そして、時は流れに流れて

「おー、よしよしパパだぞー」

「ま、ま、い、い」

「ん？まこ？僕のことかい？」

「ま、こ、く、ん、あ、り、あ、と」

「っ!？」

お、おい！この子の名前変えるぞ!!

名前は話花だ！話花!!」

—————

けれど、物語の最後には誰もが笑顔になれる結末が待っているんだ

—————

F i n